

靈界物語 第三七卷 舍身活躍 子の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三七卷』愛善世界社

2001(平成13)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

目次

序じよ

總説そうせつ

第一篇 安閑喜樂あんかんきらく

第一章 富士山ふじさん〔一〇一三〕

第二章 葱節ねぶかぶし〔一〇一四〕

第三章 破軍星はぐんせい〔一〇一五〕

第四章 素破拔すつぱぬき〔一〇一六〕

第五章 松まつの下した〔一〇一七〕

第六章 手料理てれうり〔一〇一八〕

第二篇 青垣山内あをがきやまうち

第七章 五萬圓ごまんえん〔一〇一九〕

第八章 梟ふくろの宵企よひたくみ〔一〇二〇〕

第九章 牛うしの糞くそ〔一〇二一〕

第一〇章 矢田やだの瀧たき〔一〇二二〕

第十一章 松まつの嵐あらし〔一〇二三〕

第一二章 邪神憑じゃしんかかり〔一〇二四〕

第三篇 坂丹珍聞 はんだんちんぶん

第一三章 煙の都 けむりみやこ (一〇二五)

第一四章 夜の山路 よるやまみち (一〇二六)

第一五章 盲目鳥 めくらどり (一〇二七)

第一六章 四郎狸 しろうだぬき (一〇二八)

第一七章 狐の尾 きつねを (一〇二九)

第一八章 奥野操 おくのみさを (一〇三〇)

第一九章 逆襲 ぎやくしふ (一〇三一)

第二〇章 仁志東 にしひがし (一〇三二)

第四篇 山青水清 やまあをくみづきよし

第二一章 参綾 さんれう (一〇三三)

第二章	大僧坊（一〇三四）
第三章	海老坂（一〇三五）
第四章	神助（一〇三六）
第五章	妖魅來（一〇三七）

靈の礎（九）

序

靈界物語も凡百の艱難を排除し、漸く三十六巻、原稿用紙百字詰四萬五千枚、着手日數百八十日にて完結を告げました。併し乍ら過去、現代、未來に於ける顯、神、幽三界の際限無き物語なれば、到底三輯や四輯にてその大要を述べ盡す事は最も至難事でありませぬ。神命に依れば、四萬五千枚の原稿即ち四百五十萬言の三十六巻を一集（實は三輯）としても、優に之を四十八集口述せなくては、徹底的

に解く事は出来ないとの話であります。さうすれば三百六十字詰四百頁を一巻として一千七百二十八巻を要し、瑞月が記録破りの大速度を以て、一年に三輯づつ口述するも、今後四十八年を要する譯になります。實に某新聞紙の評する如く阿房陀羅に長い物語でありますから、神界へ御願致して可成十輯位にし百二十巻位にて神示の概要を口述して見たいと思ひます。就ては瑞月王仁が靈界に仕へたる經路をも豫め述べて置く必要ありと認め、第四輯『舍身活躍』の初に於て、『靈主體從』第一卷（第一篇）に漏れたる穴太に於ける幽齋修行の状況や、綾部に來つて出口教祖に面會し神業に奉仕したる次第をも、略述べて讀者の参考に供する事と致しました。又この『舍身活躍』は『海洋萬里』の繼續的物語で、神素盞鳴尊が數多の神人を教養し、之を宣傳使として、四方の國々島々に遣はし、八岐大蛇や邪神惡狐の靈魂を言向和し、終に出雲の日の側上に於て、村雲の劍を得て天照大御神に奉り、五六七神政の基礎を築き固め、天下萬民の災害を除き救世の大道を樹立したまひし、長大なる物語であります。ア、惟神靈幸倍坐世。

大正十一年十月十二日 於五六七殿

豫言者郷里に容れられずとは古來の諺である。瑞月王仁が突然神界より神務に
 使役さるるやうに成つてから、親族知己朋友その他の人々より、あらゆる惡罵嘲
 笑や妨害等を受け乍ら、神命を遵守して今日まで隱忍して來た種々雑多の經緯を
 述べれば、到底一萬や二萬の原稿で書きつくせるものではない。故に瑞月は靈界
 のがたり「舍身活躍」の口述の初に當り、最初の靈的修行の一端を述べて本問題の神
 代の物語に移らうと思ふ。幸ひ時機の到來せしものか、今日となつては自分の郷
 里の人々は神道家、佛敎家を始め、無宗敎者と雖も一人も反對を唱へたり惡罵嘲
 笑する者が無くなつて來た。否何人も郷里の人は瑞月の精神を了解し、却て讚辭
 を送るやうになつたのは全く時の力である。然るに釋迦にも提婆とか謂つて、何
 時の世にも反對者の絶えぬものである。大正の初頭より勃興し初めた吾が大本の
 敎に對し、學者、宗敎家、新聞記者などが、數年前より隨分攻撃の矢を放つて吾
 人の主張を根底より破碎せむとせしは、新宗敎の初期に於ては免るべからざる順

路である。諺に曰ふ「巨大なる器には巨大なる影がさす」と。また曰く「敵無きものは味方も無し」と。今日の社會よりの攻撃は實に止むを得ざるものである。否これが宗教發展上の徑路かも知れない。吾人は今後に於ても、益々大本に對して大々の迫害の手が加はることと確信して居る。天の瓊矛の様に、大本はイラエバイラウほど太くふくれて固くなり、且つ氣分の好くなるものである。善惡吉凶禍福は同根である。筆先にも「悪く言はれて良くなる仕組じゃぞよ」と、實に至言である。この頃綾部に丹波新聞といふ小さい新聞が出来て、靈界物語を評して曰く「一丁程先から見えるやうな原稿を書いて居る」と。實に良く靈界物語の真相を究めたものである。抑もこの物語は人間の頭腦の産物でない以上は、何處かに變つた所が無くてはならぬ筈だ。一丁程先から見えるやうな大きい字の原稿を二萬數千枚書いたと言つて居るのは、神の靈光が原稿の上に輝いて遠方から拜めたのであらう。又大きい文字に見えたのは所謂著者の人物が大きいから大きく見えたのだらう。否々ソウ慢心しては成らぬ。神様の偉大なる神格が現はれて、筆記者の寫した細い文字が丹波新聞記者の眼にソウ大きく見えたのであらうと、神

直日大直日に見直し聞き直し宣り直し、善意に解釋して置く方が結局大本の教理に
叶ふであらう。實に天下一品の讚辭を與へて呉れた大名文章だと感謝しておく次
第である。呵々。

大正十一年十月十二日

第一篇 安閑喜樂

第一章 富士山（一〇一三）

萬葉集三の巻 山部赤人望不盡山歌に

天地の分れし時ゆ神佐備て、高く貴き、駿河なる布士の高嶺を、天原、振放見れば
度る日の、蔭も隠るひ、照月の、光も見えず、白雲も伊去はばかり、時自久ぞ、
雪は落ける、語つぎ、言繼ゆかむ、不盡の高嶺は。

反歌

田兒の浦ゆ、打出で見れば眞白にぞ、

不盡の高嶺に雪は零ける。

萬葉集、隆辨の歌に

めに懸けて、いくかに成ぬ東道や、

三國をさかふ、ふじの芝山。

夫木集、光俊朝臣の歌に

こころ高き、かふひするがの中に出で、

四方に見えたる山は布士の根。

よみ人知らず

布士の山一つある物と思ひしに

かひにも有りてふ、駿河にもありてふ

天雲も伊去はばかり飛ぶ鳥も翔も上らず
燎火を雪もて滅、落雪を火もて消つつ
言ひも得ず、名も知らに靈くも座神かも。

源光行の歌に

富士の嶺の風に漂ふ白雲を

天つ少女の袖かとぞ見る

萬葉十四の駿河歌に

佐奴良久波多麻乃緒婆可里、古布良久波
布自能多可禰乃、奈流佐波能其登

麻可奈思美、奴良久波思家良久佐、奈良久波
伊豆能多可禰能、奈流佐波奈須與

續古今集、後鳥羽院の歌

けぶり立、思ひも下や氷るらむ、

ふじの鳴澤、音むせぶ也

新拾遺集、慈圓の歌、

さみだるる、ふじのなる澤、水越て

音や煙に立まがふらむ

同權中納言公雅の歌

飛螢思ひはふじと鳴澤に

うつる影こそ、もえばもゆらむ

伊勢家集に

人しれず思ひするがの富士のねは
我がごとやかく絶えず燃ゆらむ

はては身の富士の山とも成りぬるか
燃ゆるなげきの煙たえねば

古今集に

人知れず思ひを常にするがなる

富士の山こそわがみなりけれ

同集に

君と云へばみまれ見ずまれ富士のねの
めづらしげなく燃ゆるわが戀

同集に

富士のねのならぬ思ひにもえばもえ

神かみだにけたぬむなし煙けぶりを

能宣集のうせんしふに

草深くさふかみまだきつけたる蚊遣火かやりびと

見みゆるは不盡ふじの煙けぶりなりけり

重之集しげゆきしふに

焼やく人ひとも有あらじと思おもふ富士ふじの山やま

雪ゆきの中なかより煙けぶりこそたて

拾遺集しふゐしふに

千早ちはやぶる神かみも思おもひの有あればこそ

年經としへてふじの山やまも燃もゆらめ

大和物語やまとものがたりに

ふじのねの絶たえぬ思おもひも有ある物ものを

くゆるはつらき心こころなりけり

誰が於に靡き果ててか富士の根の
煙の末の見えず成るらむ

朽果てし名柄の橋を造らばや

富士の煙の立たずなりなば

十六夜日記に

立別れ富士の煙を見ても尚

心ぼそさのいかにそひけむ

其返し

かりそめに立ち別れても子を思ふ

おもひを富士の煙とぞ見し

問きつる富士の煙は空に消えて

雲になごりの面蔭ぞ立つ

西行の歌

風かぜに靡なびく富士ふじの煙けむりの空そらに消きえて
行ゆく方へも知しらぬ我わが心こころかな

源頼朝卿の歌

道みちすから富士ふじの煙けむりもわかざりき
晴はるるまもなき空そらのけしきに

時とき知らぬ富士ふじの煙けむりも秋あきの夜よの
月つきの爲ためにや立たたずなりけむ

北きたになし南みなみになして今日けふいくか
富士ふじの麓ふもとを巡めぐりきぬらむ

みせばやな語かたらば更さらに言ことのはも

及およばぬふじの高たかね成なりけり

富士ふじのねの煙けぶりの末すゑは絶たえにしを
ふりける雪ゆきや消きえせざるらむ

きさらぎや今宵こよひの月つきの影かげながら

富士ふじも霞かすみに雲くも隠かくれして

尋常じんじやうせう小學がくこく國語こくご讀本とくほんにも

ふじの山やま

あたまを雲くもの上うへに出だし

四方しほうの山やまを見みおろして

かみなりさまを下したにきく

ふじは日本にっぽん一の山いちのやま

青空あそら高たかくそびえたち

からだに雪の着物着て

霞のすそを遠くひく

ふじは日本一の山

以上の如く我富士山は古來各種の歌人に依つて其崇高雄大にして、日本國土に冠絶し、日本一の名高山と稱され、天神地祇八百萬の神の集り玉ふ聖場となり、特に木花咲耶姫命の御神靈と崇敬されて居る。三國一の富士の山と稱へ、日本、唐土、天竺の三ヶ國に於ける第一位の名山となつて居た。併し乍ら其富士山と云ふは、十數萬年以前の富士山とは其高さに於て、又廣さに於ても、非常な相違がある。現在の富士山は皇典に所謂高千穂の峰が僅に残つてゐるのである。昔天教山と云ひ、又天橋山と云つた頃は、西は現代の滋賀縣、福井縣に長く其裾を垂れ、北は富山縣、新潟縣、東は栃木、茨城、千葉、南は神奈川、静岡、愛知、三重の諸縣より、ズツと南方百四五十里も裾野が曳いて居た。大地震の爲に南方は陥落し、今や太平洋の一部となつて居る。

此地點を高天原と稱され、其土地に住める神人を、高天原人種又は天孫民族と

稱へられた。現在の富士山は古來の富士地帯の八合目以上が残つて居るのである。周圍殆ど一千三百里の富士地帯は青木ヶ原と總稱し、世界最大の高地であつて、五風十雨の順序よく、五穀豐穰し、果實稔り、眞に世界の樂土と稱へられて居た。其爲め、生存競争の弊害もなく、神の選民として天與の恩恵を樂みつつあつたのである。

近江の琵琶湖は富士地帯の陷落せし時、其龜裂より生じたものである。そして古代の富士山地帯は殆ど三合目四邊に現代の富士の頂上の如き高さを保ち雲が取巻いて居た。故に天孫民族は四合目以上の地帯に安住して居た。外の國々より見れば、殆ど雲を隔てて其上に住居して居たのである。皇孫瓊々杵命が天の八重雲を伊都の千別に千別て葦原の中津國に天降り玉ひきといふ古言は、即ち此世界最高の富士地帯より、低地の國々へ降つて來られた事を云ふのである。決して太陽の世界とか、金星の世界から御降りになつたのでない事は勿論である。

顯國の御玉延長して金銀銅の救の橋の架けられし時も、最高の金橋は富士山上に高さを等しうしてゐた。又ヒマラヤ山は今日では世界最高の山と謂はれてゐる

が、其時代は地教山と言ひ又銀橋山とも云つて、古代の富士の高さに比ぶれば、二分の一にも及ばなかつたのである。現代の富士山は一萬三千尺なれ共、古代の富士は六萬尺も高さがあつたのである。佛者の所謂須彌仙山も此天教山を指したものである。

現代の清水灣及遠州灘の一部の如きは、富士山の八合目に廣く展開せる大湖水であつて、筑紫の湖と稱へられてゐた。又同じ富士山地帯の信州諏訪の湖は須佐の湖と云つたのである。筑紫の湖には金龍數多棲息して、大神に仕へ、風雷雨電を守護してゐた。又玉の湖には白龍數多棲息して、葦原の瑞穂國（全世界）の氣候を順調ならしむべく守護してゐたのである。そして素盞鳴尊の神靈がこれを保護し玉ひ、富士地帯の二合目あたりに位地を占めてゐた。太古の大地震に依つて、此地帯は中心點程多く陷没し、周圍は比較的陷没の度が少かつた。其爲現代の如く、高千穂の峰たる現富士を除く外、海拔の程度が殆ど平均を保つ事になつたのである。現代の山城、丹波などは、どちらかと云へば地球の傾斜の影響に依つて少しく上つた位である。

丹波は元田場と書き、天照大御神が青人草の食いて活くべき稻種を作り玉うた
所である。故に五穀を守ると云ふ豊受姫神は、丹波國丹波郡丹波村比沼の眞名井
に鎮座ましまし、雄略天皇の御代に至りて、伊勢國山田に御遷宮になつたのであ
る。御即位式の時、由紀田、主基田をお選みになるのも、現今の琵琶湖以西が五
穀を作られた神代の因縁に基くからである。由紀といふ言靈は安國の靈反しであ
り、主基といふ言靈は知ろし召す國の靈反しである。之を見ても丹波の國には神
代より深き因縁のある事が分るのである。

又小亞細亞のアーメニヤ及びコーカス山、エルサレム、メソポタミヤ及びペル
シヤ、印度の一部は、富士地帯の如く高く雲上に突出してゐた。印度の如きも天
竺と稱へられて、其地方での最高地點であつたが、富士山の陥没と同時に、此地
も亦今の如く陥落したのである。アーメニヤといふ事は天の意味又は高天原の意
味である。エルサレムといふ神代の意義はウズの都、天國樂土の意味がある。茲
に國祖國治立尊は始めて出現され、大八洲彦命の敵軍に圍まれ玉ひし時、國治立
尊が蓮華臺上より神力を發揮して、惡魔の據れる天保山を陥落せしむると同時に

天てん教けう山ざんを現げん出しゆつせしめ玉たまうたことは、靈れい界かい物もの語がたり第だい一いつくわん卷わんに述のぶる通とほりである。又またエルサレムは現げん今こんのエルサレムではない。アーメニヤの南なん方ぽうに當あたるエルセルムであつた。そしてヨルダン河がはも、現げん今こんのヨルダン河がはとは違ちがつてゐることは勿もちろん論ろんである。死しかい海かいの位あちもメソポタミヤの東とう西さいを挟はさんで流ながれ落おつる現げん今こんの波べ爾る灣わんがそれであつた。

又また現げん今こんの地ち中ちゆう海かいは此この物もの語がたりに於おいて、古こ代だいの名なをもち用もちゐ、瀨せ戸との海うみと稱とへられてゐる。此この瀨せ戸との海うみはアーメニヤの附ふ近きん迄まで展てん開かいしてゐた。併しかし乍ながらこれなも震しん災さいの爲ために瀨せ戸との海うみの東とう部ぶは陸りく地ちとなつて了しまつたのである。故ゆゑに此この物もの語がたりは地ち球きゆう最さい初しよの地ち理りに依よつて口こう述じゆつするものであるから、今こんにちの地ち理り學がくの上うへから見みれば、非ひ常じやうに位あち置また又または名めい義ぎが變かはつてゐることを豫あらかじ承しよ知うちして讀よんで貰もらひたいのである。

『舍しや身しん活くわつ躍やく』の最さい初しよに當あたりて、此この富ふ士じ山さん（太たい古この天てん教けう山ざん）を述のべたのは瑞ずい月げつが入にふだうの最さい初しよ、富ふ士じの天てん使し松まつ岡をか神しんに靈れい魂こんを導みちかれ、此この太たい古この状じやう況きやうを見みせて貰もらひ、其その肉にく體たいは高たか熊くま山やまの岩がん窟くつに守まもられて居をつた因いん縁ねんに依よつて、物もの語がたりの始はじめに、富ふ士じ山さんの大たい略りやくを口こう述じゆつするのが順じゆん序じよだと思おもふからである。

『**舍身活躍**』は瑞月が明治卅一年の五月、再び高熊山に神勅を奉じて二週間の修業を試み、靈眼に映じさせて頂きし事や、過、現、未の現幽神の三界を探険して、神々の御活動を目撃したる大略を口述する考へである。

あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一〇・八 舊八・一八 松村眞澄録)

第二章 葱節(一〇一四)

西は半國東は愛宕 南妙見北帝釋の
山の屏風を引きまはし 中の穴太で牛を飼ふ

青垣山を四方に回らした山陰道の喉首口、丹波の龜岡に程近き、曾我部村の大

字穴太は瑞月王仁が生地である。賤ヶ伏屋に産聲を上げてより殆ど廿七年夢の如くに過ぎ去り、廿八歳を迎へた明治卅一年の如月の八日、半圓の月は皎々として天空に輝き渡り、地上には馥郁たる梅花の薰り、冷き風に送られて床しく、人の心も華やかに何となく春を迎へた氣分に漂ふ。

瑞月は其頃事業の閑暇に淨瑠璃を唸る事を以て唯一の樂みとして居た。浪華の地より下つて來た吾妻太夫といふ盲目の男の師匠に、終日の業を濟ませ、三味は無けれども叩きにて節を仕込まれて居た。

今宵は淨瑠璃の稽古友達の七八人、温習會を催すべく、大石某と云ふ知己の家で女義太夫を雇ひ來り、ベラベラ三味線をひかせ乍ら、葱節を得意氣になつて嘸鳴つて居た。下手の横好きとか云つて、最初の露拂を勤めたのは瑞月で、鏡山又助館の段を、汗みどろになつて語り終り、其外二三人の天狗連の、竹筒を吹いた様な奴拍子のぬけた聲の淨瑠璃が止むと、再び三月の菱餅を二つに切つた様な硬々した角立つたものを着せられ、破れ扇をたたいて唸つて居る。其時は太閤記の十段目光秀が「夕顔棚の此方より現はれ出でたる……」と云ふ正念場であつた。

老若男女は小さき百姓家に縁の隅から庭は云ふに及ばず、遅れて来たものは門に立つて聞くと云ふ大盛況である。

其時宮相撲をとつて居た若錦と云ふ男を先頭に、侠客の小牛、留公、與三公、茂一の五人連れ、矢庭に演壇に上り、有無を云はせず瑞月を擔いで附近の桑畑の中へ連れ行き、打つ、蹴る、殴るの大亂癡氣騒ぎを始めた。

淨瑠璃友達で隣家の嘘勝と云ふデモ侠客が二三人の手下を引き連れ、二尺許りの割木を各自に持つて五人の仲に飛び込み格闘を始めた。喧嘩は何時の間にか一方へ轉宅して了ひ、バラバラバラと喚きつつ東南の方へ逃げて行く。嘘勝の一隊は後を追つかける。

其後へ二三の友人がやつて来て、瑞月を助けて牧畜場の精乳館と云ふ自分の館へ連れて歸つて呉れた。ひどく頭部を五つ六つ割木で殴られた結果、何とはなしに頭が重たくなり、うづき出し、耳はジャンジャンと早鐘をつく様に聞えて来た。時々火事の警鐘ではないかと、負傷した身體を擡げて戸を開き外を眺めた事もあった。

精乳館は牛乳を搾り附近の村落に販賣するのが營業であつた。牛乳配達人は未
明からやつて来て搾乳の量り渡しを待つて居る。瑞月は頭痛目晦めき、搾乳ど
ころの騒ぎではない。二十數頭の牧牛は空腹を訴へたり、乳の張り切る爲め悲し
相な聲を出して一齊に呻り出した。其聲が頭に響くと一層頭が割れる様な氣分が
する。それでも神様を祈らうとも思はねば、醫者を呼び、藥を付け様とも飲まう
とも思はない。只自分の心裡に往復して居るのは、今迄大切に思ふて居た營業は
スツカリ忘れて了ひ、若錦一派の奴に對し、早く本復して仕返しの大喧嘩をやつ
てやらねばならぬと、そればかりを一縷の望みの綱として居た。門口の戸も裏口
の戸も錠が卸してある。それ故配達人は這入る事も出来ぬ、已むを得ず宮垣内の
母の宅へ走り、
「何故か門口が締つて居る、一寸來て下さい」
と云つて母を呼びに行つた。相手方の村上某が臆てやつて來る時分だから自分の
昨夜の喧嘩で負傷した事を見られては餘り面白くないと、負惜みを出して、頭を
手拭で縛り目をふさいだ儘、慣れた道とて、自分の嘗て借つて置いた喜樂亭と云

ふ郷神社の前の矮屋に隠れ頭から夜具を被つて息をこらして横つて居た。

暫らくすると、門口から自分の名を呼び乍ら、慌しく母が這入つて來られた。

瑞月は、

「こりや大變だ、昨夜の喧嘩が分つたのだらう、額口の傷を見られない様に……」

と夜具をグツスリ被り、足の膝から先は出る程縮んで、寝たふりをして居た。遠

慮會釋もなく母は夜具をまくり上げ、

「お前は又喧嘩をしたのだなア。去年までは親爺サンが居られたので誰も指一本

さえる者も無かつたが、俺が後家になつたと思ふて侮つて、家の倅を斯んな酷い

目に會はしたのであらう。去年の冬から丁度之で九回目、中途に夫に別れる程不

幸の者はない、又親のない子程可愛なものはない。弟の由松は、兄の讎討だと

か云つて若錦の處へ押掛け、反對に頭をこつかれて、血を出して歸つて來て家に

唸つて居る。兄は又此の通り、神も佛も此の世にはないものか」

と自分の子が悪いとは思はず、加害者を怨んで居られる。之を聞くと自分も氣の

毒で堪らなくなり、傷の痛みは何處へやら逃げ去つて了つた。

實際の事を云へば自分は、今迄父がブラブラ病で二三年間苦しんで居たので、それが氣に掛り、云ひ度い事も云はず、父に心配をさせまいと思ふて、人と喧嘩する様な事は成るべく避ける様にして居たから、村の人々にも若い連中にも、チツとも憎まれた事は無く、却て喜樂さん喜樂さんと云つて重寶がられ、可愛がられて居たのである。そうした處、明治三十年の夏、父は藥石效なく遂に歸幽したので、最早病身の父に心配さす事もなくなつた。破れ侠客が田舎で威張り散らし、良民を苦しめるのを見る度に、聞く度に、癢に觸つて堪らない。頼まれもせぬのに、喧嘩の中へ飛び込んで仲裁をしたり、終には調子に乗つて、無賴漢を向ふへまはし喧嘩をするのを、一廉の手柄の様に思ふ様になつた。二三遍うまく喧嘩の仲裁をして味を占め、

「喧嘩の仲裁には喜樂さんに限る」

と村の者におだてられ、益々得意になつて、

「誰か面白い喧嘩をして呉れないか、又一つ仲裁して名を賣つてやらう」

と下らぬ野心にかられて、チツと高い聲で話して居る門を通つても、聞き耳立て

る様になつて居たのである。

其頃、龜岡の餘部と云ふ處に干支吉と云ふ侠客があり、其兄弟分として威張つて居た宿屋の息子の勘吉と云ふ男、身體も大きく背も高く、力も強く、宮相撲をとつて遠近に鳴らして居た。そして其父親は三哲と云つて、附近で名の賣れた侠客であつた。其息子の勘吉が又もや非常に賣り出し、村の者は大變に困つて居た。第一賭場を開いて毎日毎夜「テラ」を取り、乾兒の四五人も養ふて居つた。自分の弟も勘吉の賭場へ毎日毎夜出入し、自分の時計を賣り衣類を賣り、終ひには夜の間に數百圓を投じた乳牛をひき出し、龜岡あたりで五六十圓に投げ賣りして、それを賭博の資とする。自分が意見をすると、勘吉親分を傘にきて艇にも棒にもおへない。村中の息子は鼠が餅をひく様に、今日も一人、明日も二人と云ふ調子で、勘吉の賭場に引込まれ、親達は非常に嘆いて居る。けれども勘吉の耳に這入つては如何な事をしられるか知れぬと思ひ、各自に小聲で呟いて居るのみであつた。

之を聞いた自分は腹が立つて堪らず、火事場に使ふ鳶口を擔たげて、河内屋の

勘吉が賭場へ只一人、夜の八時頃飛び込み、車坐になつて丁半を闘はして居た弟の帯に鳶口を引っかけ、二三間引摺り出した。そうすると親分の勘吉が巻舌になつて、

「男を賣つた勘吉の賭場へ賭場荒しに來よつたのか、素人の貴様にこんな事しられて黙つて居つては男が立たぬ。……オイ與三公、留公、喜樂をのばして了へ」と號令をかけて居る。自分は逃ぐるが奥の手と、尻を後へつき出し二つ三つポンポンとたたいたきり、一目散に牧場に逃げて歸つて來た。そして門の門を堅く締めて、若しも戸を打破つて這入るが最後、打ちのばしてやらうと、棕の棒を持つて外の足音を考へて居た。

其夜は何の事も無かつた。勘吉も口程にない奴だと安心して牧場に眠つて居ると、夜の十時頃、二三の乾兒を連れて門口へやつて來た。そして、

「オイ喜樂、一寸用があるから外へ出て呉れ」
と呶鳴つて居る。流石に先方も、迂闊に這入つて鳶口でやられては堪らぬと思ふたか、門口に立つて誘ひ出してゐる。自分は故意とに作り軒をして寝たふりをし

て居た。そして檜の棒を寢床の横に置いてあつた。暫らくすると女の聲で、

「あんたハン、立派な侠客サンぢやおまへんか、たつた一人の、あんな弱々しい喜樂サンに喧譁に来るなんて、男が下りまつせ、さアあんたハン、一杯桑酒屋へ飲みに行きまほ」

と勘吉の頬邊をピシヤピシヤたたいて居る音が聞えて來た。此女は中村の多田龜と云ふ老侠客の娘で、多田琴と云ふ女である。或機會から妙な仲となつて居つた。其琴が中村から遙々とやつて來て、門口で河内屋に出會ふたのである。流石の侠客も、横面をやさしい聲で毆られてグニヤグニヤになり、五六丁下の吉川村の桑酒屋へ酒を飲みに行って了つた。

それから自分は多田琴の父親の多田龜に就いて侠客學問を研究し始めた。多田龜の云ふのには、

「侠客になつて名を擧げ様と思へば、頭を割られたり、腕の一本位とられなくては本物にならぬ。此方が生命を捨てる氣になれば、何百人の敵も逃げるものだ。兔に角氣轉が第一だ」

と自分の娘の情夫と知り乍ら、碌でもない事を一生懸命に教へて呉れた。さうして多田龜の云ふのには、

「俺の乾兒も大分澤山あるのだが、跡を繼がす者が無い。これからお前に仕込んでやるから、此乾兒を捨てるのは惜いから、若親分になつたら如何だ。お米サン（瑞月の母）に相談して、お前サンを此方の養子に貰ふ積だ。此方も一人の娘をお前サンの自由にさして、黙つて居るのについては考へがあるのだ。よもや一時の「テンゴ」に、俺の一人娘をなぶり者にしたのぢやあるまいなア」と退引させぬ釘をさされた。

父の居る中から、上田の跡は弟に繼がして貰ひ度いと云つて頼んで居つた。両親は龜岡の或易者に卦を立てて貰ひ、

「此子は總領に生まれて居るけれども、親の屋敷に居つては若死をするから養子にやつたが良い」

といつたとかで、両親は已に自分の養子に行くのを承認して了つた。然し侠客の養子に遣らうとは思つて居なかつたのである。

自分は幼時から貧家に生れ、弱者に對する強者の横暴を非常に不快に感じて居た。人間は少しく頭をあげて金でも貯めれば、如何な馬鹿でも賢う見られ、敬はれるが、少しく地平線下に落ちると、子供迄が寄つて集つて踏みつけ様とする。事大思想の盛んな田舎では尚更はげしいのである。何でも一つ衆に擢んでなければ頭があがらない、生存の價値がないと、幼時から思ひつめて居た。學問が無ければ官吏になる事も出來ず、軍人に成り度うても成れず、弱い者を助け、強い者を凹ます侠客になつた方が、一番名が擧がるだらうと下らぬ事を考へ、幡隨院長兵衛の「ちよんがれ」を聞いて、明治の幡隨院長兵衛は俺がなつてやらうかと迄思ふ事が屢々あつた。其平素の思ひと強者に虐げられた無念とが一つになつて、社會の弱者に對する同情心が、父の歸幽と共に突發し、生命懸けの侠客凹ませを企て、猪口才な奴と彼等が社會から睨まれて居たから、一年經たぬ中に九回迄も酷い目に會はされたのである。若しも神様の御用をせなかつたらば、自分は三十四五迄に叩き殺されて居るかも知れないと思ひ浮べて、神様の御恩がシミジミと有難くなつて來たのである。

自分は母の言葉の如く、決して父が逝くなつた爲めに俠客に苦しめられたのではない、つまり自分から招いた災である事を其時已に自覺し得たのである。

(大正一一・一〇・八 舊八・一八 北村隆光録)

第三章 破軍星(一一〇一五)

大坂から田舎下しの舞の師匠に、お玉といふ四十位の年増があつた。村の若者は端唄や舞や踊を毎晩稽古に往つて居つた。何時の間にかは此お玉は俠客の勘吉の内縁の妻となつてゐた。そして勘吉は其お玉に村の若い者をくつつけ、そこを押へては物言ひを付け、金錢を絞り取つて居たのである。此女は少し淨瑠璃も知つてゐて、若者にチヨコチヨコ札で教へて居た。

次郎松といふ男、五十の坂を越えて居乍ら鰥の淋しさに、若い者の舞や踊や淨瑠璃の稽古を毎夜缺かさず見聞に行き、遂にはお玉と勘吉の美人局に陥り寝込み

を押へられ、頭や背中をしたたか毆られ、眞青になつて吾家に逃げ歸り、ブルブル慄へて居た。そこへ上田長吉といふ、次郎松の近所の二十五歳の男がやつて来て、いふやう、

「わしが勘吉とお玉との中へ這入つて話をうまくつけて来たから、二百圓出しなさい。そしたら、勘吉も怒りはすまい」

と言つた。次郎松は生れついでの名齋坊、惜相に工面して、清水の舞臺から飛んだやうな心持で、五十圓の金を拵へ、長吉の手に渡した。長吉はお玉に向つて、
「次郎松サンが二十五圓出して呉れたから、これで勘辨しなさい。此廿五圓はわ

しの金ぢやが、お前に上げる」
と甘くチヨロまかして、又お玉に妙な關係をつけて了つた。

肝腎の勘吉はそんなこととは知らず、五六人の乾兒を伴れ、暗夜に次郎松の家に押掛け行き、強談判を始め出した。平素から憂ひ喜びの悪口言ひと、村中から憎まれてゐた次郎松が、今夜は河内屋にやられるのだ、よい罰だ、面白い、見て來うか……と次から次へ言ひ合はし、門には一杯の人だかりになつてゐる。次郎

松の老母は裏口から飛び出し、吾家に來り、

「コレコレ喜樂サン、大變なことが起つて來た。お前も親類のことであり、内の松が今二百兩の金を出さねば、地獄川へ俵につめて放り込まれるとこだから、早う來て勘吉に談判しておくれ……」

と慄ひ慄ひ泣いてゐる。自分は「ヨシ來た！」……と言つたものの、近所にワアワアと大勢の聲が聞えてゐる、勘吉の呶鳴り聲も手に取る如く耳にひびく。幾分か、コリヤ險呑だ、ウツカリ行く譯には行こまい……と、稍卑怯心の蟲が腹の底の方で囁き出した。そして八十四歳になつた老祖母や母が、不安な顔色をして、自分の返事を如何いふかと待つてゐるやうである。

おこの婆アサンは吾子の一大事だと、一生懸命に、喜樂サン、早う來ておくれ、松がやられて了ふ……と泣き立てる。

「そんなら行きませう」

と自分は立上らうとする。老祖母は行くなと目で知らず。おこの婆アサンは、

「コレ喜樂サン、親類で居つて、こんな時に助けに来てくれんなら、お前の所へ二十圓貸した金を未返しておくれ。河内屋にやる足しにせんならんから、そしてこんな時に来てくれな、モウこれから何を頼まれても聞きませんぞえ」
と少しの借金を恩にきせて無理に引出さうとする。自分は一寸むかついたが、併し世間の者は、そんな事情で怒つて行かなんだとは思はずに、勘吉に辟易して、とうとう喜樂も能う來なんだと誹るであらう。折角侠客の玉子になりかけた所を、「なきがら」だと言はれては、今までの事が水泡に歸する、ナア二多田龜の教へた通り、命を的にかけて行きさへすれば大丈夫だ、一つ度胸を放り出してやらう、名を賣るのは今ぢや……と俄に強くなつて、老母や母の不安な顔を見ぬ振りして、吾家を飛び出し、裏の藪の垣を蜘蛛の巣に引つかかり乍ら、二つもくぐりぬけて、背戸口から次郎松の奥の間へ入りこみ、何くはぬ顔して、奥から又ツと火鉢の側へ現はれて、井筒型の模様のあるドテラをフワリと羽織り、鷹揚に坐り込んだ。そして破軍星の劍先を敵に向けてやらう、自分は劍先の柄に座を占めれば、キツと勝つに違ひないと、稍迷信に囚はれ乍ら、

『オイ河内屋、こんなヒヨロヒヨロ爺に、屈強盛りの侠客が五人も六人も乾兒を伴れて、押よせて來るとは何の事だ。侠客の侠の字は何といふ事か知つてゐるか。遊廓へでも行つて男を賣るのが侠客の本分ぢやないか。こんな小つぽけな田舎で、へボ爺を苦めた所で、お前の名はあがる所か、却てダダ下がりだぞ』
と頭から咬みつけて見た。河内屋は何と思ふたか、物も言はず門口へ出て、乾兒の五人を中へ入れ、

『オイ喜樂を叩きのばせ！ 次郎松を引ずり出せ！』

と號令をかけてゐる。おこの婆アサンは自分の宅へ來たなり、怖がつて震うて歸つて來ない。次郎松は長火鉢の前に坐つたまま、眞青な顔して、

『破軍星はどつちを向いてゐる、なア喜樂サン……』

などと調子外れな聲で尋ねてゐる。乾兒の中の兩腕と聞えたる、留公、與三公は親分にケシを掛けられ、震ひ震ひ、

『コレ喜樂サン、一寸出て下され。次郎松サン、親分があない言つてますから出て下さい』

などと怖々ニユツと手をつき出して、半分ふるうてゐる。河内屋は犬の遠吠に似ず、門口から號令をきびしくかける計りである。自分は懐手をした儘、ドスンとすわり、揚げ面をしてワザと豪傑らしく空威張りをしてゐた。併し乍ら脇の下や腰のあたりは秋の夜寒にも似ず、汗がビツシヨリと着物をぬらしてゐた。門口には村の若い者や女が先ぐり先ぐりやつて来て、ワイワイとぞめいてゐる。不斷から憎まれてゐるので、誰一人仲裁に入らうとする者がない。

暫くすると嘘勝と言ふ男が弟の長吉を引張つて来た。此男は次郎松から常に世話になつて居る所から、近所の事でもあり、且つ自分の弟に關した事でもあるので、裏口から長吉を伴つて這入つて来たのである。自分は長吉に向ひ、ワザと大きな聲で、

「此間松サンからお玉サンに渡してくれといつて、ことづけた五十圓の金は如何したのか？」

と呶なりつけて見た。長吉は震ひ乍ら、
「其五十圓は確にお玉サンに渡しました」

と云ふ。そこで喜樂は皆に聞える様に、

「お玉といふ女は聞けば、河内屋の圍女ぢやないか。侠客の内縁にもせよ、女房になる女が、男から金の五十圓も取るとは怪しからん奴だ。これは要するに河内屋が差圖ではあるまい。こんな女を持つて居ると、侠客の名が汚れるのみならず、此村の恥だ。男達を以て任ずる當時賣出しの河内屋が、女を玉に使うて金を取るといふ、卑怯なことは決してする筈がない。大方貴様がチヨ口まかしたのだから」と嘸鳴つて見せた。嘸勝は妙な顔をして、

「とも角、弟の長吉が悪いのだから、此事は私に任して貰ひたい。河内屋だつて、男の顔に泥をぬられて黙つておるまい。侠客といふ者は、女を玉に使つて金を取るといふやうなことはしそうな筈がない。こんな事がカンテラの親分にでも聞えたら、それこそ大變だぞ」

と嘸鳴りかけた。河内屋はお玉を次郎松が犯し、侠客の顔に泥を塗つたから、承知しない、二百圓の金を出さねば地獄川へ放り込むとねだつて居たのが、少し恥しくなつたと見え、門口から再び上り口の火鉢の前迄やつて来て、

勘吉かんきち「此この勘吉かんきちは、女をんなを玉たまに金かねをねだつたなどと言いはれちや、男をとこが立たちませぬ。何なにかの間ま違ちがひだらう……コラ與よ三公さこう、留とめ公こう、貴き様さま、そんな馬ば鹿かなことを次じ郎ろ松まつサンに言いうたのか、不ふ都つ合がふふな奴やつだ」

と呶ど鳴なりつけた。與よ三公さこうと留とめ公こうは……親おやぶん分ぶんが命めい令れいぢやないか……と言いひたいけれど、言いふ譯わけにもいかぬといふやうな顔かほ付つきで、頭あたまをガシガシかき乍ながら、

「へー、別べつにそんなこたア、言いうた覺おぼえはムいまへん」

と卷ま舌じたが何いつ時まの間まにか、田いな舎なの詞ことばの生き地ぢに返かへつて了しまつてゐる。河かは内ち屋やは顔かほ色いろを和やはらげ、

「ヤア喜き樂らくサン、心しん配ぱいかけて濟すみませぬ。災わざはひは下したからと言いひまして、子こ分ぶんの奴やつがこちらこちらの知しらんことを吐ぬかすもんだから、こんな騷さう動どうになつたのです。併しかし私わたしも御ご存んじの通とほり、今いま賣うりだしの俠け客かくだ。素しろ人うとの喜き樂らくサンにコミ割わられたと人ひとに言いはれては、男をとこの顔かほが立たちませぬ。これは一ひとつ仲なか直なりをして、綺きれ麗いサツパリと埒らちをつけませう」

と碎くだけてかかる。喜き樂らくは、

「そう事が分れば結構だ。そんなら次郎松から十五圓出すから、君の方から十五圓出して、それで一つ宴會でも開いて仲直りをせうぢやないか」

と問うて見た。河内屋はヤレ肩の荷が下りたというやうな體裁で、抜いた刀の納めどこに困つて居たのを、ヤツと幸ひ二つ返事で、

「何分喜樂サンに任しませう。そんなら明晩、龜岡の呉服町の正月屋で仲直りをすることにせう。午後六時から……」

と言つた。次郎松はヤツと安心したものの如く、二百圓が十五圓になつたので、これも異議なく出金することを承諾した。そしてウソ勝は、河内屋が一所に明晩宴會に行かうかと勧めるのを、俄に明日は大坂の親類へ急用が出来たから……と云つて體よく斷つて了つた。

これで其晩の悶錯は一寸ケリがつき、翌日、瑞月と次郎松と長吉との三人は龜岡呉服町の正月屋といふ二階造りの小さい料理屋へ行くこととなつた。

(大正一一・一〇・八 舊八・一八 松村眞澄録)

第四章 素破拔（一〇一六）

「広い龜岡の十三町に 後を見返す女郎はない」

と俗謡に唄はれて居る龜岡の町には、藝者仲居に至る迄、皆京都の田舎下し、パ
チ者の仕入れ者ばかりで、三味線を引くと云つたら、たすきの紐でもくくりつけ
て、座敷中引まはす位が關の山の不見轉ばかりである。股で挟んで金をとる釘拔
女がザツと三打計り、あちらこちらの料亭にうるついで居つた。勘公のお宿坊に
して居る呉服町の正月屋には、鄙には稀な澁皮の剥けた、一寸小意氣な、三味を
能う引かぬデモ藝者が二三人抱へてあつた。何れも春を賣るのが目的である。其
中に年は二十位で、お愛といふ女が始終河内屋に馴染を重ねて、機嫌克く年期を
務めたら、夫婦にならうとまで、約束をして居たのである。

勘公は五人の乾兒を總揚げして、意氣揚々として、正月屋に乗込み、裏の六疊

二間の古腐つた座敷に、眞黒けに垢で光つた柱を背中に、自慢話に耽つてゐる。

そこへお愛が茶を酌んで来て、

お愛「哥兄サン　イヤ親方サン、あの次郎松事件は如何になりました。「きまま」

とか喜樂とか云ふ奴、割とは度し太い奴だと此間も言はれましたが、何とか巧く

片はつきましたかえ」

勘吉「サア俺の威勢に恐れて、流石の喜樂も、とうとう泣きを入れよつて、今日

はあやまりに来るんだ。今晚の七時頃には喜樂、次郎松、長吉の三人がここへ謝

罪に来る筈だ」

お愛「そりや心地よい事ですなア。一遍喜樂が親方にあやまる所を見せて欲しい

もんですな」

勘吉「アハ、、、侠客は侠客としてそれ相當の禮式があるのだ。女なぞのみに

来る所ぢやない。どうぞ二階に席を拵へて、誰も來ない様にしておいてくれ。其

式さへ濟めば手を叩いてやるから、其時にあがつて来て酌をするんだ」

お愛「一番に喜【まま】サンとか喜樂サンとかに、お酒を注ぐんですか」

とそんな事は云うたか云はぬか、喜樂は丁度其時分に穴太を出立しかけてゐる位だから、何程エライ天耳通でも、聞取することは出来なかつた。

午後七時頃、一寸腰の具合の悪いヨボヨボした次郎松さんと、小男の長吉とを伴れて、正月屋の門口を潜つた。例のお愛は顔に冷笑を泛べて、此方が御免なさいと言へば、厭相に「へー」と答へて背中を向けた。喜樂は……此スベタ奴、大事のお客さまを捉へて馬鹿にしゃがる、そんなことで商賣が繁昌するか……と云ひたくなつた。されど何とはなしに一方は無頼漢を相手のこととて、稍不安の雲が心に往復してゐたので、ワザと笑顔を作り、

喜樂「河内屋サンは來て居られますか？」

と問ひかけた、お愛は、

お愛「へー親分ですか。晝頃から乾兒をつれて遊びに來てゐられます。お前サンは喜樂サンですか。とうとう河内屋ハンに負けなはつたのですやろ」

と冷やかに笑ふ。其態度に又むかついた。

喜樂「オイ長吉、次郎松サン、こんな所に立つて居つても仕方がないぢやないか。

女中サンに案内して貰つて奥へ通らうかい」

と稍甲張つた聲で唼鳴り立てた。庭の上に八疊ばかり二階座敷がある。その段階子をトントンと下りて来たのは與三公であつた。

與三「あゝ喜樂サン、早く上つて下さい。親方が待つて居ます。約束の時間が遅れたと云うて、大變に御立腹ですよ。サアサア早く」

と先に立つて段階子をあがる。三人も後に跟いて二階へ上つて見た。チヤンと足のない膳に、五つ六つの菓子碗や皿が竝べられ、杯洗までがランプの影を映して、三人ののぼつた響に、ランプの月を杯洗の海がゆらつかしてゐる。

勘公「喜樂サン、遠方御苦勞でした。ズイ分お前サンも世話ですなア。餘り人の事を構うもんぢやありませんぜ。今の人間は叶はぬ時は神佛のやうに言うて頼み、チンコハイコするものだが、やがて難が去ると、素知らぬ顔をするもんだ。

人の世話もよい加減になさるが宜しかる」
と何だか意味ありげな事を云ふ。

喜樂「河内屋サン、これも止むを得ずだ。乗りかけた舟で、後へ引返す譯にも行

かず、親類のこともでもあり、君の商賣の邪魔をしては濟まんのだけけれど、今度の事件ばかりは例外だと思つて貰はねばならん」

勘公「さうでせう、何分次郎松サンに金を借つたり、いろいろと世話になつてゐられるさうだから、こちらも推量はしてゐるのだ。かう見えても河内屋は血もあれば涙もある男ですよ。チツとは可愛がつてやつて下せえ」

と半分ばかり侠客言葉を使うてゐる。元が土百姓あがりの侠客だから、箱根越えずの江戸つ兒を使はうとするので、其言靈にどこともなく拍子抜けがして、餘り怖相にもなく又權威もない。何だかダラけた様な心持がする。

勘公「次郎ヨモさんイヤ松さん、ズイ分お玉が可愛がつて頂いた相です。此後もお見捨なく御世話をしてやつて下さい、私も男一匹だ。一旦男に汚された女を再び連れようとは思ひませぬから、アハ、ハ、ハ」

とワザと豪傑笑ひをして肩をゆすつてゐる。

次郎松「イヤもう年を老つて、思はぬホテテゴを致しまして、皆サンに御心配をかけ年甲斐もないことで御座いますワイ。ハイ」

勘公「オイ長吉、貴様もお玉に少々おかげを蒙つたといふ事だが、有態に白状せい！ 返答によつては此方にも考へがあるぞ」

と長吉に對してはガラリと態度をかへ、強壓的に嚇しつけた。

長吉「ハイ、あの次郎松サンが何で、へエそしてヤツパリ松サンがお玉サンの何です」

とモチモチし乍ら、ソロソロ震ひ出した。

勘公「コラ長吉、貴様故にこんなザマの悪い事件が起つたのだ。此責任は残らず貴様にあるのだ。何だウソ勝の哥兄を持つたと思つて、ウソ勝の親分はイロハ孝太郎だと云つて威張つてゐやがるが、俺は貴様も知つてる通り、島原のカンテラ親分の兄弟分だ。事と品によつたら、貴様の爲に親分同士の一悶錯が起らうも知れぬぞ」

長吉「オ、オウ河内屋、そんなこと云うたて、シシ知らぬワイ。さう喧し言はずに、今日は仲直りに来たんだから、ゆつくりと酒でも呑んで別れよぢやないか」
勘公「コリヤ侠客の儀式を知つてるか、俺の杯を頂かうと思つたら、それ丈の方

法を知らなくては今日の役は勤まらぬぞ。モシも仕損じをしよつたら、それこそ承知せぬから、さう思へ」

と喜樂、次郎松に對する不平を、弱い男の長吉一人に集中してゐる其可笑しさ。

喜樂「君、僕は素人だ。君は押しも押されもせぬ立派な侠客サンだ。侠客同士なら、どんな六かしい儀式もあらうかも知れぬが、俺達は素人だから、前以て斷つておく。侠客の作法に叶はないと云つて、因縁をつけるのなら、もう杯は貰はぬワ」

次郎松「私も喜樂サンのいふ通り六かしいことは知らぬのだから、こちらの流儀にして貰ひたい、なア河内屋サン」

勘公「あゝさういへばさうだ、そんなら随意に、仲直りの酒を汲みかはすことにしませう。オイ與三、先づ第一に喜樂サンに注いで、それから俺に注ぐのだ、俺の杯を松サンに注すのだ、それから後は勝手に注いで呑んだがよい」

與三「へー」

と云ひ乍ら、爛徳利の握れぬやうなあついで奴から、朝顔の花の形したうす平たい

杯さかづきにドブドブと注つぐ。喜き樂らくは一口ひとくちにグイと呑のんで、

喜き樂らく「失しつ敬けい！」

といひ乍ながら勘かん公こうに渡わたした。勘かん公こうは卷まき舌じたまぜりのドス聲こゑで、

勘かん公こう「ハ―イ宜よろしい」

と云いひ乍ながら受う取けり、與よ三さん公こうに注つがせた。與よ三さん公こうが注つがうとするやつを無む理りに杯さかづきを

上うの方ほうへ上あげて一い滴てきも入いれさせず、呑のんだふりをして……ヘン貴き様さまの杯さかづきを表へ面めんは

兔と角かく、實じつ際さい誰たれが呑のむものか……といふやうな面つら付つきをしてゐる。河かは内ちや屋やは杯さかづきを次じろ

郎ま松つの前まへに猿ゑん臂びを伸のばしてグツと差さ出した、

勘かん公こう「サア色いろ男をとこの松まつサン、ワツちの杯さかづきはお氣きに入いりますまいが、今け日ふは仲なか直なほりの

式しきだから、ドツサリと受うけて下ください。イヤ十じふ分ぶん打うちとけて酔ようて貰もらはねば、仲なか直なほり

の精せい神しんが貫くわん徹てつしません」

と云いひ乍ながら、與よ三さんの德とく利りをグイと引ひたくり、ドブドブと松まつサンの持もつてゐる

杯さかづきへ注ついだ。松まつサンは、

次じろ郎まつ松まつ「エ、モウ結け構こう結け構こう、ちります ちります、こぼれます」

と言つてゐるのを構はず、爛德利をグイと向うへつきつけ、膝の上に一杯の酒をダブダブとこぼして了つた。

次郎松「あゝ勿體ない、此結構な酒を」

と云ひ乍ら、膝の上や畳の上にごぼれた酒を平手にすはしてはチウーチウーと吸うてゐる。

勘公「コレ松サン、わつちの杯が氣に入らぬのか、皆【づち】あけて了うとは、餘り馬鹿にした仕打ちやねいか」

と無理難題を吹つかけて、引つかからうとしてゐる。

喜樂「オイ君、そんな冗談を言ふもんだないよ。君の親切があふれて出たのだから、松サンも感謝してゐるんだら。僕も感謝してゐる。何分爛酒だからな、ア

ハ、ハ、ハ、

と笑ひに紛らす。主客雙方九人は表面仲直りといひ乍ら、非常に深い溝渠を中において、危い丸木橋を渡る様な心持で、仲直りの杯を汲みかはしてゐた。ソロソロ口勘公は當てこすりだらけの都々逸を唄ひ出した。

其間に長吉は少しく酒がまはり、階段を無断で下つて了つた。

下座敷には勘公の思ひ者お愛を始め、二人の不見轉藝者が長火鉢を圍んで河内屋話に耽つてゐた。長吉はヒヨロヒヨロし乍ら三人の前にドツカと坐つた。

お愛「コレ長吉ヤン、とうとう喜樂安閑坊も始めは偉い男だつたが、尻尾を出しよつただぢやおへんか。そんなことなら、體よく始めからあやまつておくといひのに、何程力があると云つても、河内屋の旦那にかけたら、到底駄目なことはきまつて居るのに、本當に喜樂といふ男は安閑坊だなア」

長吉「何、尾をまいたんでも何でも何でもない。此前にも河内屋と下河原で喧嘩をした時に、河内屋の方は子分や野次馬で三十人ばかりで、一人の喜樂を取まいたが、それでも喜樂は五六人なぐりたふして甘く逃げよつた位だから、今度だつて負たんだぢやない。マアマア五分々にしとかうかい」

お愛「何と卑怯な喜樂サンだなア。何十人相手にしても、叶はんやうになつたら逃げるのなら、あたいだつて、そんな易い喧嘩は出来まずワ。次郎松に、何でも喜樂サンは金を貰つたとか、借つたとか云ふことだから、それであれ文、義理に

でも骨を折らんならんのだと、與三ハンが云うてみましたよ。事情を聞けば、喜樂ハンも本當に可哀相なところがあるなア[㊦]

長吉「ナア二そんな事あるものか。河内屋奴が五人の乾兒を伴れて、あんな痲病やみの次郎松サンとこへ押よせて来たもんだから、今まで何回も喜樂サンが掛合つて居つただけけれど、今度はたまりかねて應援に往つたのだ。河内屋も抜いた刀が鞘に納まりかねて困つて居つた所、わしの兄の勝ちやんが仲裁に這入つて、ソレから又喜樂が談判をして、次郎松から十五圓、河内屋から十五圓、勝負なしに、仲直りといふ相談が出来たのだ。一方は侠客の親分、一方は安閑坊の喜樂、そんな者と喧嘩をして、五分々々の別れと云ふのだから、つまり河内屋が負なのだ。そこを喜樂が折角賣り出した河内屋の顔を潰しては可哀相だと思つて、ズツと讓歩して五分々々と云ふ所で體能うキリをつけたのだよ。今夜の御馳走は三十圓の御馳走だのに、なぜ又これ程高いのだ。吉川の桑酒屋へ行つて五圓出しや、これ位の御馳走はしてくれるが、お前とこもチト勉強せぬと、商賣が流行らぬやうになるかも知れぬぞ[㊦]」

お愛「ソラ又本當ですか？」

長吉「俺はウソ勝の弟だけれど、生れてから嘘と坊主の頭とはいうたことがないのぢや」

お愛は顔色を變へて二階へトントンとあがり、

お愛「モシ河内屋の旦那一寸……」

と目配せした。河内屋は「ウン」と云ひ乍ら、お愛のあとについて階段を降り、十分間計り姿を隠した。長吉は酔眼朦朧として階段を四つ這になつて二階へ上つて來た。そこへ勘公が顔色を變へて上り來り、

勘公「コリヤ長吉、今度の事件は貴様が起したやうなものだ。俺たちや、喜樂サ
ンや、松サンがまだここに坐つてゐるのに、貴様勝手に席を外すといふ事がある
ものか。仲直りの儀式を破り、侠客の顔へ泥をぬりやがつた。オイ與三、徳、長
吉を引括つて、井戸端へつれて行き、ドタマから水を百杯ほどかけてやれ！」
と口汚なく罵り乍ら、酔ひつづぶれてる長吉の頭や腰を荒男が力に任して、踏んだ
り蹴つたりし始めた。

喜樂「オイ河内屋、仲直りの杯がすんだ以上は、長吉がどこへ行かうと構はぬぢやないか。長吉に悪い事があるのなら、後で何なつとしたがよかる。明日の朝までは俺は長吉の親兄弟から、身柄を預つてきたのだから、指一本觸へさすこたア出来ぬのだ」

勘公「許し難い奴だけど、喜樂サンや次郎松サンに免じて、今晚は許しておく。明日夜があけたら、俺の宅までキツと出て来い」

長吉「済まなんだ、どうぞ勘忍してくれ。わしや別にお前の悪い事を言うたのぢやない。下の女中が今晚の御馳走は五圓がポチで十圓の御馳走だと云うたから、そんな筈がない、三十圓だと言うたのぢやから、氣を悪うせんとこらへてくれ」

勘公「喧しいワイ、仲直りが済んでからゴテゴテ吐すと、又一つ物言ひがつくぞ。サア早く貴様歸れ……喜樂サン、松サン、どうぞゆつくり機嫌を直して夜が明けると迄呑んで下さい。これから女を上げますから、前席が十圓、二次會が二十圓といふ段取にしてあるのだのに、譯もきかずに長吉がそんな事言ひやがつて、本當に仕方のない奴だ……オイお愛、貴様もよいかげんに喋つておけ、これから第二

次會の注文をする所だ。仕様もない事いふもんだから、喜樂サンにも痛くない腹を探られ、男の面目玉をつぶしよつた」

と言ひ乍ら、最愛のお愛の横面をピシヤピシヤとなぐりつけた。お愛は「キヤツ」と悲鳴をあげて段階子をころげおち、庭に白い尻をあらはしたまま平太つてゐる。二人の女中はあわてて抱き起し、裏の別建の家へ連れていつたやうである。

喜樂「君、僕は明日早く行かねばならぬ所があるから、二次會に列したいのだが、これで失禮する。どうぞ君たち、僕の代りに二人前飲んで十分騒いでくれ。松サシも長吉も連れて歸るから……」

勘公「御用があらば仕方がない。そんならあと二十圓がとこ、君の代りに散財をする。オイ與三、徳、兼、下へおりて注文して來い」

勘公の意中を知らぬ三人はあわてて下に飛びおり、此家の主婦をつかまへて第二次會の注文をして居る。喜樂外二人は此處を立出で、穴太さして夜の道を歸つて行く。何時勘公の手下の奴が先まはりをして、どんな事をするか知れないと云ふ氣が起り、急いで歸らうとすれ共、痲病やみのヒヨロヒヨロ男が酒に酔ひ、又

長吉がへべレケに酔うてゐるので、同じ所許り蟹の様に歩いて居つて、根つから道がはか取らず、十時頃に正月屋を立出で、わづか十二三町の松の下まで二時間計り費やして了つた。

(大正一一・一〇・八 舊八・一八 松村眞澄録)

第五章 松の下(一〇一七)

九月廿五日の月は東の山の端を掠めて昇つて居る。されど満天雲に包まれて居る事とて、只東の山の端が薄明かくなつて、丁度月の出る時刻だから、彼れが月の光だらうと頷かれる位であつた。若し宵の口に東が薄明かるといならば、決して月と思ふ事は出来ない位なものであつた。星の影もなく咫尺暗澹として、六尺幅の道を泥酔者二人の千鳥を伴ひ、松と櫻との古木が抱合ふて立つて居る。松の下と云ふ、淋しい處にやつて來た。

そこには豚小屋の様な一軒屋があつて、嘘勝の親戚なる嘘鶴といふのが、四五人暮して住んで居た。現今では道路が擴張されて、家のあつた處は坦々たる街道になつて居る。嘘勝は河内屋の舉動に不審を起し、いろいろと探索をして見た結果、河内屋の類が、此嘘鶴の家の半丁程東の、樹木茂れる暗い場所、三人を叩きのめさうと企んで居る事を悟り、密かに山へ登り、手頃の石や割木を積んで待つて居た。それとも知らず河内屋の一行六人は、道傍の森林に先廻りして、喜樂一行の歸つて來るのを道に要撃せむと、待ち構へて居たのである。

かかる計略のありとは、神ならぬ身の知る由もなき三人は、暗の路前後に心配り乍ら、ヒヨロリヒヨロリトボトボと、三間山の麓にさしかかる。忽ち現はれた四五の黒い影、矢庭に次郎松の頭を、棒千切れを持つてカーンと音がする程殴りつけた。次郎松は驚いて高岸から滑りおち、稲葉の茂みへ身をかくし、鞆丸を泥田に浸して震ふて居る。長吉は「アイタタタ」と倒れた。喜樂は直に山を目標けて二三間ばかり驅登る。四五の黒い影は長吉に群がり集まつて、踏んだり蹴つたり、やつてる最中に、山の十間ばかり上から割木の雨、栗石の礫の霰が降つて

來る。此黒い影は勿論勘公の一隊である。流石の勘公も石にうたれ、割木にあてられ、這う這うの體にて一目散に闇の路を駆け出した。

長吉は悲しさうな聲で、

長吉「オーイオーイ、喜樂サン、次郎松サン……」

と叫んで居る。喜樂は其聲を聞いて、

喜樂「長吉はやられたと思ふだが、あんな聲が出る以上はまだ生きて居るのか」

と稍安心して山を下りかけた。暗がりから、

「アハ、ハ、ハ、」

と笑ふ男の聲、訝かり乍ら近寄つて見れば、長吉の兄の嘘勝であつた。喜樂は、

喜樂「オイ、其聲は嘘勝ぢやないか」

と聞いて見ると、

嘘勝「サウぢや、嘘勝ぢや、アハ、ハ、ハ、」

と又もや笑つて居る。

此男は嘘が上手で、人から嘘勝と仇名をつけられ、それが遂には通用語になつ

て了しまひ、嘘うそ勝かつと云いはれるのを却かへつて名譽めいよに思おもつて居ある位くらゐな男をとこである。其その叔父をぢも亦またウソ鶴つるといつて、嘘うそをいふのを得意とくいがつて自慢じまんして居ある男をとこである。何事なにことを掛合かけあふのにも、自分じぶんから嘘うそつきと云いふ事を承認しじやうにんし、人も亦また認みめて居あると思おもつてか、一つ話はなしをする度たびに「今度こんどは嘘うそぢや無いぞ」と前置まへおきをする癖くせがある。それでも八九分はちくぶは嘘うそだから堪たまらない。松まつの下したに住すんで居ある嘘鶴うそつると云いふ奴やつ、五斗俵ごとうたはらに粳もみの殻からを充實じゆうじつし、それを叮嚀ていねいに締しめて、何時いつも狭せまい家の庭いへに二十俵にじつべうも積つんで「米こめが十石じっごく、此この通りあるんだが、もちと値ねが出でぬので賣うれぬのだ。之これを抵當ていたうにチツと金かねを貸かして呉くれぬか」と云いつて金かねの融通ゆうつうを妙めつにする男をとこであつた。人ひとが一寸俵ちよつとたはらに觸さはらうとすると「オイコラ、之これに觸さはつてはならぬぞ、觸さはり三百圓さんびやくえんの罰金ばつぎんだ」といひ、鼠ねずみが喰くふといつて柎ひひらを一面いちめんに刺さして居ある狡ずるい男をとこである。其その血統けつとうを受けた勝公かつこうも長吉ちやうきちも、相當さうたうに嘘うそは上手うづであつた。然しかし乍ながら不思議ふしぎな事ことには、比較ひかくてき的に村人むらびとの信用しんようを受け居ある、天下てんか御免ごめんの嘘うそつき男をとこである。

却説さて、長吉ちやうきちは嘘勝うそかつの出現しゆつげんに力ちからを得え、暗くらがりに裾すそをパタパタと拂はらひ乍ながら、長吉ちやうきち「喜樂きらくサン、如何どうも俺おれは欲よくにも徳とくにも代かへられぬワ」

と三才兒の様な言葉で嘆聲を洩らし、頻りに袂や裾を泥がついたと思うて、「か
いば」たきして居る。長吉の疵は別に血も出でず、團瘤が三ツ四ツ出来た位です
んだ。次郎松は三人の囁き聲を聞いて、やつと安心したと見え、水田の稻の中か
ら白い頬冠をパツと現はし、

次郎松「ホーイ　ホーイ」

と力の無い聲で呼んで居る。

喜樂「次郎松サン、嘘勝が出て助けて呉れたのだから、安心なさい。河内屋の
一隊は、とうに逃げて了ひよつた。早く上つておいで……」

と叫んで居る。次郎松は田の中から、

次郎松「モウ、事ア無からうかな」

と云ひ乍ら、ズクズクの身體で高岸を這ふて、街路まで登つて來た。

何時の閒にか東半天は青雲の生地をむき出し、下弦の月は細い光を地上に投げ
た。嘘勝は本街通を左にとり、河内屋の様子を探るべく歸り行く。三人は道を右
にとり、細い野道を渡つて松原に出て、暗い藪小路を潜つて、淋しい妖怪の出る

と云はれて居る坊主池の邊りに辿りつき、又もや野道を渡つて漸く家路に歸つた。斯う云ふ事が何回も重なり、河内屋や若錦の身内から敵視されて、八九回も大喧譁が始まり、何時も喜樂は袋叩きにやられ勝であつた。何時も叩かれもつて、心に思ひ浮かんだのは斯うである。

何だか自分は、社會に對して大なる使命を持つて居る様な氣がする。萬一人に怪我でもさせて法律問題でも惹起したならば、將來のためにそれが障害になりはせないか？」

と云ふのが第一に念頭に浮かんで來た。其次には、

人に傷つけたならば、屹度夜分には寢られまい。自分は何時も眞裸になつて、石だらけの道で相撲をとるが、力一杯張りきつた時は、如何な處へ眞裸で打ち投げられても少しも傷もせぬ、痛みもせぬ、之を思へば、全身に力を込めてさへ居れば、何程叩かれても痛みも感じまい」

との念が起り、指の先から頭の先迄力を入れて、身體を硬くして敵の叩くに任して居た。……もう叶はぬ、謝まるか……と思つてる閒際になると、何時も誰かが

出て来て、敵を追ひ散らし、或は仲裁に入つて、危難を妙に助けて呉れた。それで、

□ 人間と云ふものは、凡て運命に左右されるものだ。運が悪ければ疊の上でも死ぬ。運がよければ、砲煙彈雨の中でも決して死ぬものではない□

と云ふ一種の信念が起つて居た。それ故人に頼まれたり、頼まれなくても喧嘩の仲裁がし度くなつたり、或時は、

□ 思ふ存分大喧嘩をやつて………偉い奴だ！ 強い奴だ！ と云はれ度い。そうし

て強い名を賣つて、假令丹波一國の侠客にでもよいからなつて見たい□

と云ふ精神が日に日に募つて來た。其爲めに二月八日の晩にも、若錦一派の襲來を受くる様な事を自ら招來したのである。

若錦一派に打擲され、頭を痛めて喜樂亭に潜んで居る處へ、母がやつて來て非常に悔まれる。暫らくすると八十五才になつた祖母が、杖もつかずに出て來られた。少し耳は遠かつたが、悪い事は何でもよく聞ゆる人であつた。何時も祖母は

勝手聾をして居られるのかと疑ふたが、實は、本當に聞えないのであつた。聞えぬかと思ふて、「ド」聾とか何とか一言でも悪口を云はうものなら、本守護神が知つて居るのか、但は神様の罰なのか、直に分かるのは不思議であつた。氣丈の祖母は此場の様子を見てとり、諄々として喜樂に向つて意見を始められた。祖母の名は「うの子」といつた。

祖母「お前は最早三十に近い身分だ、物の道理の分らぬ様な年頃でもあるまい。侠客だとか人助けだとか下らぬ事を言つて、偶に人を助け、助けたよりも十倍も二十倍も人に恨まれて、自分の身に災難の罹る様な人助けは、チツと考へて貰はねばなるまい。無賴漢の賭博者を相手に喧嘩をするとは、不心得にも物好きにも程がある。お前は何時も悪人を挫いて弱い善人を助けるのが、男の魂ぢやと云ふて居るが、六面八臂の魔神なれば知らぬ事、そんな病身な「やにこい」身體で居乍ら、相撲取や侠客と喧嘩するとは餘り分らぬぢやないか。今年八十五になる年寄や、夫に別れて間もない一人の母や、東西も辨へ知らぬ様な、頑是なしの小さい妹がある事を忘れてはなるまい。此世に神さまは無いとか、哲學とか云つて空

理窟ばかり云つて、勿體ない、神々様を無い物にして、御無禮をした報いが今來たのであらう。能う氣を落ちつけて考へて呉れ。昨晚の事は全く神様の御慈悲の鞭をお前に下して、高い鼻を折つて下さつたのだ。必ず必ず、若錦や其外の人を恨めてはなりません。一生の御恩人ぢやと思ふて、神様にも御禮を申しなさい。お前の實父は幽界から、其行状の悪いのを見て、行く處へも能う行かず、魂は宙に迷ふて居るであらう程に、之から心を入れ變へて、誠の人間になつて呉れ、俠客の様な者になつて、それが何の手柄になるか」

と涙片手に慈愛の釘をうたれて、流石の喜樂も胸が張り裂ける様に思ふた。森嚴なる神廳に引き出されて、大神の審判を受ける様な心持がして、負傷の苦痛も打忘れ、涙に暮れて、兩親の前に手を合せ、

「改心します、心配かけて済みませぬ」

と心の中で詫をして居た。

老母や母は吾家を指して歸り行く。あとに喜樂は只一人悔悟の涙に暮れて、思はず兩手を合せ、子供の時から神様を信仰して居乍ら、茲二三年神の道を忘れ、

哲學にかぶれ、無神論に墮して居た事を悔ゆると共に、立つても居ても居られない様な気分になつて來た。

夜は森々と更け渡る。水さへ眠る丑滿の刻限、森羅萬象寂として聲なき春の夜、喜樂の胸裡の騷々しさ、警鐘亂打の聲は上下左右より響き來り、吾身を責むる如くに感じられた。

「あゝ今が善惡正邪の分水嶺上に立つて居るのだ。左道を行かうか、右道を行かうか」

と深き思ひに沈む。折しも忽然として、一塊の光明が身邊を射照らす如く思はれて來た。天授の靈魂中に閑遊する直日の御靈が眠りより醒めたのであらう。深夜つらつら思ふ。

「あゝ吾は誤解して居た。父ばかりが大切な親ではない、母も亦大切な親であつた。そして祖母は又親の親である。天地廣しと雖も親は一人よりない。斯かる分りきつた道理を、今迄體主靈從心の狹霧に包まれて、勿體なくも母や祖母を輕んじて居たのは、思はざる失敗であつた。父が亡くなつた以上は、もう如何な荒い

事をしても、心配する親はないと、仁俠氣取りで屢危難の場所に出入し、親の嘆きを今迄氣づかなんだのは何たる馬鹿者ぞ、何たる不孝者ぞ！ア、諺にも……いははぬ蜂は刺さぬ……と云ふ事がある。なまじひに無頼漢位を相手に挑み争ひ、且つ挫かうとしたのは、餘り立派な行ひではなかつた。勘公が次郎松に二百圓の金を出ささうとしたのも之は決して人間業ではない。次郎松はとられねばならぬ因縁があつたのだ。蛇が折角、艱難辛苦して漸くに蛙を口にし、一日の餌にありついて甘く吞まうとして居る際に、人あり、其蛇を打ちたたき、弱い方の蛙を助けてやつたなら、其蛙は大變に喜ぶであらうが、肝腎の餌食をとり逃した蛇は屹度其人を恨むであらう。掛け構へもない人の商賣を構ひ立てたと怒るのは、人間も同じである』

と云ふ様に考へて來た。本居宣長の歌にも、

世の中は善事曲事行きかはる
中よぞ千ぢの事はなりづる

何事も世の中は正邪混交陰陽交代して成立するものである。別に人の商賣まで妨げなくとも、自分は自分の本分を盡し、言行心一致の模範を天下に示せば宜いのだ。自分に迷ひがあり罪があり乍ら、人の善惡を審く權利は何處にあらうか…
…
と思へば思ふ程、自分が今迄やつて來た事が恥かしく、且恐ろしき様な氣になつて來た。

…
母は吾子の愛に溺れて喜樂が悪いとはチツとも思はず、只父が亡くなつたから、人々が侮つて、自分の子をいぢめるとのみ思はれて居る様だが、父が亡くなつたのは喜樂ばかりぢやない、廣い世の中には幾千萬人あるか知れぬ程だ。父が亡くなつた爲めに世間の同情をよせた人こそあれ、たとへ自分の様に、一部の俠客社會からにせよ憎まれたものは少い、釣り鐘も撞く人が無ければ決して鳴らない、太鼓も打つ人がなければ決して音はせぬ、之を思へば祖母の今朝の教訓は、眞に神のお諭しである。自分の心から親兄弟に迄迷惑をかけたか…
…
と思へば、懺悔の劍に刺し貫かれて五臟六腑を抉らるる様な苦しさを感じて來た。

悔悟の念は一時に起り來り、遂には感覺までも失ひ、ボンヤリとして吾と吾身が分らない様な氣分になつて來た。

此時芙蓉山に鎮まり玉ふ木花咲耶姫命の命として、天使松岡の神現はれ來り、喜樂即ち今の瑞月王仁を、高熊山の靈山に導き修行を命ぜられた事は、第一巻に述べた通りであるから、此處には省略して置きます。

(大正一一・一〇・八 舊八・一八 北村隆光録)

第六章 手料理(一〇一八)

喜樂の姿が、郷神社前の喜樂亭から二月九日の夜より見えなくなつたので、母や兄弟は……大方女の所へでも憂さ晴らしに遊びに行つたのか、但は龜岡あたりへ散財に往つたのだらう……位に思つて氣にも留めなかつた。二日立つても三日立つても歸つて來ないので、ソロソロ例の次郎松、其西隣のお政後家を始め、株

内近所の大騒ぎとなつて来た。

長吉と云ふ男が、龜岡の五軒町の神籬院中井傳教といふ稻荷下の所へ參拜して、稻荷大明神の託宣を請ふと、傳教先生は白衣白袴に烏帽子を着し、恭しく天津祝詞や六根清淨の袂、心經などを神佛混交的に稱へ上げ、少時すると忽ち神靈降臨あり、

水邊に氣をつけよ、早く捜さないと生命が危い、此男は發狂の氣味があるぞよとの御託宣を得て、あわてて歸り來り、池や井戸や川などを探し廻れども、少しの手係りもなかつた。

お政後家サンが株内のこととて氣を揉み、宮前村の宮川妙靈教會所へ參つて神宣を請うた所、西田清記といふ教導職の神宣に依れば、
「言ひ交はした婦人と東の方へ向けて遠く驅落してる。併し一週間の内には葉書が出て來るから安心せよ」

との滑稽な神宣もあつたさうだ。お政後家サンは、又もや篠村新田の弘法大師を祀つて居る立江のお地藏さまと稱する婆アさまに占つて貰うた所、

「此男は神かくしに會うたのだ。悪い天狗に魅まれたのだから、生命に別状はないが、法外れの大馬鹿者か、氣違になつて、キツと一週間の後には歸つて來るか
ら安心せよ」

との託宣であつたと云ふことだ。

次郎松サンは龜岡の易者の所へ行つて、判断をして貰つた所、
「牧畜場の賣上金を一百圓計り持つて出て居るが、此奴は外國へ行く積りだ。思
はぬ野心を起こして、朝鮮から滿洲に渡り、馬賊の群に加はる積りだから、一時
も早く保護願をして、外國へ渡らないやうにせよ」

との途方もない判断であつたと云ふことだ。

人々の噂は……節季前だから、支拂に困つて夜ぬけをしたのだ。餘り金使ひ
が荒過ぎたから……などと云つて居る者もあり……の女と驅落をしたのだ。
イヤ天狗につままれたのだ、發狂したのだ、狐狸にだまされて山奥へつれて行か
れたのだ。河内屋の勘吉や若錦がこわさに親を振捨てて、どつかへ逃げたのだ、
餘程不孝な奴だ、大馬鹿者だ、分らぬ奴だ、腰拔だ……とまちまちに評議の花が

咲いてみたといふ事だ。

喜樂の机の上に残してあつた一通の巻紙には、左の如き歌が記されてあつた。

☐ 我は空行く鳥なれや

我は空行く鳥なれや

遙に高き雲に乗り

下界の人が種々の

喜怒哀樂に囚はれて

身振足ぶりするさまを

われを忘れて眺むなり

げに面白の人の世や

されども餘り興に乗り

地上に落つることもがな

御神よ我れと共にあれ

と毛筆で認めてある。何の意味だか誰も知る者はなかつた。

七日目の如月十五日正午前、宮垣内の伏屋へ問題の男喜樂は歸つて來た。家族の歡喜は云ふも更なり、株内近所の人々が、歸つたと聞いて追々つめかけて來る。死んだ者が冥途から歸つて來た様に珍しがつて、

「コレ喜樂サン、お前はどこへ行つて來たのだ、どこで何をして居つたのだ、お前の不在中の心配は大抵のことではなかつた」

とウルさい程質問の矢を放つて來る。一々應答してる日には際限がない。自分も何だか恥かしくなつて來たので、

「神さまにつれられて、一寸修業に往つて來ました。何でも神界に大望があるさうなので……」

と云つたきり、あとは無言であると、例の次郎松サンは口をとがらして揚面をしなから、

「ヘン、人を馬鹿にするない。皆サン、眉毛に唾でもつけて居らぬと、堺峠のお紋狐につままれますぞ。田芋か山の芋か、蒟蒻か瓢箪か知らぬが、餘程安閑坊……ぢやない安本丹だ。そんなこと云つてゴマかさうと思つても、此松サンの黒い

目で一目睨んだら、イツカナ イツカナ外れはせぬぞ、アハ、ハ、ハ、なまけ息子の俄狂言もモウ駄目だぞよ。こんな奴に相手になつて居るとしまひのはてにや尻の毛までぬかれて了ふ。險呑だ險呑だ、皆サン氣を付けなさい』
と面を膨らし、半破れた疊を蹴つて足をひつかけ乍ら、スタスタと歸つて行く。
それから代る代る四五人の親切屋が、何とかカンとか云つて忠告や意見をしてくる。自分は神勅を重んじ、無言で聞いてゐる許りであつた。又何程辨解してみた所で、神さまの御用で行つたなどと説いても駄目だからである。俄に腹の蟲が空虚を訴へる。自ら膳を取出し、冷い麥飯を二杯許り矢庭にかき込んでみた。實に山海の珍味にまさる心持がした。

堤防の決潰したが如き勢で睡氣が襲うて來た……ねむたい時には馬に五十駄の金もいや……といふ俗謡の文句の通り、一切萬事の執着にはなれ、其まま暗い部屋破疊の眞中にゴロリと横たはつた儘、後は暫く白河夜舟で再び天國をさまよつてゐた。其間の樂しさは、後にも先にもなき有様であつた。

十六日の午後二時頃になつて、漸く目がさめて來た。枕許には依然として四五

人の男女が見舞に来て、いろいろの噂をし乍ら、介抱してゐた。目がさめて見ると随分きまりが悪い。忽ち産土の小幡神社へ無我夢中になつて参詣し、其足で山傳ひに、父の墳墓へ小松を根曳きして供へに行つた。

後から見えがくれについて来たのは、南隣の八田繁吉といふ三十男であつた。日のズツポリ西山に沈んだ頃、重い足を引ずつて不安の顔色をし乍ら伏家に歸つて来た。次郎松サンやお政後家がウルさい程つめかけて、いろいろと聞糺さうとする、自分は首を左右にふつて、何にも答へなかつた。

翌十七日の早朝から、自分の體は益々變になつて来た。催眠術でもかけられた様に、四肢より強直を始め、次いで口も舌もコワばつて動かなくなつた。最早一言も口を利くことも、一寸の身動きをすることも出来ぬ、生きた死骸の様になつて了つた。併し乍ら耳丈は人々の話聲がよく聞えて居る。懐中時計の針の音までが聞える位、耳丈鋭敏になつて居た。家族や株内の者がよつてたかつて、いろいろと撫でたりさすつたり、「やいと」を灸えたりしてゐる。

今日で三日ぶり、鱧の様によう寝た者だ、よほどくたぶれたと見える。自然に

目のさめる迄寝さしておくがよからう……」

と一座の相談がまとまつたのが自分の耳にはハツキリと分つてゐた。四日たつてもビクとも體が動かぬ、眠からさめぬ。家族や株内の人々は、忽ち不審の雲に包まれて、俄に慌出した。……「モウ駄目だ、お参りだ、用意せなくてはならぬ……」

と松サンの言つた詞が瞬く間に擴がつて、見舞客の山を築いた。誰が頼んで來た者か、お醫者さまの聲が聞えて來た。自分は醫者が來よつたなと思つてゐると、柿花の名醫で吉岡某といふ先生、叮嚀に脈をとる、熱を計る、打診、聽診、望診、問診、觸診と、非常の丹精をこらし、

「實に大變な痙攣です。此強直狀態が此儘で今晚の十二時頃まで持續すれば、最早駄目です。體温は存して居りますから死んだのではない、つまり假死狀態とでも云ふのでせう。兔に角不思議な病氣です」

と頻りに首を振てゐる様子であつた。自分は病氣でも何でもありません、神界の修業ですと云つて、ガワとはね起き、皆の分らずやを驚かしてやらうと思つて、

全身の根力をこめてきばつて見たが、ヤツパリ體はビクとも動かない、口も大きくことが出来なかつた。お醫者さんの靴の足音が次第々々に自分の耳に遠く響いて来た。これで醫者の歸つたのだと感ぜられた。

轉輪王明誠教會所の齋藤といふ先生が、二人の弟子と共に、誰が頼んだ者が祈祷の爲にやつて来た。天津祝詞も神言も上げず、直に拍子木を力チ力チと打ち、悪きを拂うて助け玉へ轉輪王の命、一列すまして甘露臺、一寸はなし、神のいふこと聞いてくれ、悪きの事は云はぬでな、此世の地と天とを形取りて夫婦を拵へ来るでな、これが此世の始めだし」

と唄ひ乍ら、大の男が三人、日の丸の扇を開いて拍子木を力チ力チ叩き囃し立てる。祈つてゐるのか、踊つてゐるのか、チツとも見當がつかない。随分騒がしい宗教だなア……と思つて居た。齋藤先生は諄々として、十柱の神さまの身の内話を説いた末、

「此病人サンは全く天の理が吹いたのだから、一心に天十柱の神さまを御願ひなされ」

と親切しんせつにくり返かへしくり返かへし説ときさとし乍ながら、

「又明日伺またみちうにちうかがひます」

と言葉ことばを残のこして歸かへり行ゆく。家内かないや株内かぶうちの者ものが感謝かんしゃして居ゐる聲こゑが聞きこえて居ゐた。

法華經ほつげきやうしんじや信者しんじやのお睦婆むつばアサンが親切しんせつに尋たうねに來きた。そして「お題目だいもくが有あり難がたいから」

と云いつて喧やかましう「南無妙法蓮華經なむめうはふれんげきやう」を幾いく十回じつくわいとなく珠數じゆずを揉もみ乍ながら、繰返くりかへし稱となへて

ゐる。そして頭あたま、顔かほ、手足てあしのきらひなく、珠數じゆずで打うつ、こする、撫なでる、しまひ

の果はてには、お睦婆むつばアサン、妙めうなことを言いひ出だした。

「コレ、お狐きつねさまか黒くろさまか知しらぬが、お前まへさま一體いつたい何なにが不足ふそくで、こここの喜樂きらくに

憑つきなさつたのだえ。お不足ふそくがあるならば遠慮ゑんりよなしに、トツトと仰おつ有しやれ。小豆飯あづきめし

か揚豆腐あげとうふか、鼠ねずみの油揚あぶらあげが欲ほしいのか、何なんなつと注文次第ちうもんしだい拵こしらへて上あげませうから、

それを喰くつて、一時いちじも早はやう肉體にくたいを残のこして山やまへ歸かへつて下ください。澁しぶとうなされると、お

題目だいもくで責せめますぞや」

と云いひ乍ながら、無茶苦茶むちやくちやに珠數じゆずで脇わきの下したの肋骨あばらほねをガリガリ言いはせ乍ながら、コスリつけ

るのであつた。自分じぶんは心こころの中なかで……馬鹿者ばかものが寄よつてたかつて、人ひとを馬鹿ばかにしやが

る……と憤慨してゐた。

二十三日の早朝、京都の誓願寺の祈願僧が尋ねて来た。溺るる者はわらしべ一本にもたよらうとする諺の如く、何でもかでも助けてやらうと云ふ者さへあらば、無暗矢鱈に引張込んで来る。此祈禱僧は皺枯れた聲で「南無妙法蓮華經」と幾回もくり返し次に心經を二三回許り唱へ乍ら、一人で拍子木を叩く、太鼓をうつ、まだ其間に鐘を叩く、汗みどろになつて勤行する、其熱心さ實に感謝に價すると思つた。併し自分の耳がつかんぼになり相であつた。これ程喧しう騒がねば聞えぬとは、餘程耳の遠い佛さまだなア……と心の中で可笑しくて堪らなかつた。

拍子木打ち太鼓鐘叩き經を讀む

法華坊主の藝の多さよ

此坊サン次第々々に聲がかすれ出し、御幣を手に持ち、又もや「高天原」に「六根清淨」の袂を上げる。俄に彼の身體はドスーンと上下に震動し、

いなりさ 稻荷下げのやうな事を始め出した。そして狭い部屋中をグルリグルリとこるげま
はり「ウンウン」と言ひ乍ら座に直り大聲を張り上げて、

「われこそは妙見山の新瀧に守護いたす、正一位天狐恆富稻荷大明神なり、伺ひ
の筋あらば近うよつて願へッ」

との御託宣であつた。一座の者は低頭平身、息をこらして畏まつてゐる。次郎松
サンは容を改め兩手をついて、

「有難き恆富大明神さまに御伺ひ致しますが、一體これは何者の仕業で御座いま
すか、どうぞ御知らせを願ひます」

恆富「これは今より三十年前、此家の株内に與三郎といふ男があつたであらう。
其男に狸が憑いた。此家の者、其外近所の者が當家によつて来て、其與三郎に牡

丹餅が出来たから食てくれと言つて、ここへ引よせた。與三は牡丹餅をよんでや
らうとは有難い……といひ乍ら手をニユツとつき出した。近所のお睦婆アが、與

三には古狸がついて居るから、此奴を追出した後でなくては牡丹餅はやらぬと、
與三に見せつけておき乍ら、狸退治だと云つて、青松葉に唐芥子をまぜて、鼻か

らくすべ、與三の肉體まで亡くして了つた。其恨をはらすが爲に、與三の怨靈が、自分についてゐた狸をお先に使つて、この息子をたぶらかし、腹の中に巢をくんで惱めて居るのだ。併し乍ら此恆富大明神の神力に依つて、怨敵忽ち退散さす程に有難く思つて信心致せ。一時の後には與三の死靈も古狸もサツパリ降服するぞよ。ウンウン」

と言つて正氣に返つて了つた様子である。これを聞いて居つた自分の可笑しさ。一座は此託宣を命の綱と信じ、有難涙にかきくれて、鼻を啜る聲さへ聞えて居る。併し乍ら、一時間たつても、半日経つても、死靈も退散せねば、古狸も去なぬと見えて、喜樂の體は依然として強直状態を續けてゐる。祈祷坊主は尻こそばゆくなつたと見え、雪隠へ行くやうな顔して、何時の間にか、禮物を貰つた儘姿をかくしたやうな按配であつた。黄昏時になつて、又例の次郎松がやつて來た。

「あゝヤツパリあの糞坊主も、尾のない狸だつた。とうとう尻尾をみられぬ先に逃げよつたなア。偉相に吐して居つた坊主の御祈祷も、恆富稻荷の御託宣も、當にならぬ嘘八百をコキ竝べよつた。それよりも手料理に限る。第一此奴が墓へ參

りよつたのがウサンぢや。キツとドブ狸たぬきがついてゐるにきまつて居る、昔むかしの與よ三さに憑ついて居をつた奴やつだろ。青松葉位あをまつばくじゆでくすべた所ところで、此奴こいつは餘程よほど劫がふを経て、毛けが四よつ股またになつてる奴やつぢやから、中々なかなか往生わうじやうは致いたすまい。七味しちみや唐辛たうがらしや山椒さんせうをまぜて、青松葉あをまつばでくすべたら往生わうじやうするだろ。本人ほんにんの喜樂きらくは二三日前にさんにちまへに死しんで了しまうてゐるのだ。只狸ただたぬきの息いきで體からだがぬくい丈だけだ。……オイコラ狸たぬきサン、モウ駄目だめだぞ、覺悟かくごはよいか、いいかげんに去いにさらせ

といひ乍ながら、失敬しつげい千萬せんばんな足をあげて、自分じぶんの頭あたまを蹴けつたり、鼻はなを捻ねぢたりしてゐる。青松葉あをまつばや唐辛たうがらしの用意よういが出来できたと見みえ、次郎松じろまつは得意とくいになつて、

「オイ【ため】サン、これから七味しちみや唐辛たうがらし山椒粒さんせうつぶに松葉まつばくすべの御馳走ごちそうだ。サ、ドットと遠慮えんりよなしに上あがつてくれ」

と迷信家めいしんかが寄よつて殺人さつじんの準備行爲じゆんびかうゐをやつて居る。耳みみのよく聞える自分じぶんは、モウ斯かうなつては何所なにところでない、全身ぜんしんの力をこめて起上おきあがらうとしたが、ビクともしない、口くちも利きかない。次郎松じろまつはふちの缺かけた火鉢ひばちに火ひをおこし、唐辛たうがらしと青松葉あをまつばをくべて、團扇うちわで鼻はなの先さきへ扇あをぎこまうとして一刹那いちせつな、母ははが、

□ 松サン……一寸□

と何か頭の先で歎いてみられる。そして母の目からおちた涙が、自分の顔をうるほはした其一刹那、どこともなく、上の方から一筋の金色の綱が下つて来た。それを手早く握りしめたと思ふ途端に、不思議にも自分の體は自由自在に活動することが出来るやうになった。一同は歡喜の涙にうたれてゐる。自分も復活したやうな喜びに充たされて居た。

(大正一一・一〇・八 舊八・一八 松村眞澄録)

第二篇 青垣山内

第七章 五萬圓(一一〇一九)

友人齋藤宇一の奥座敷を借つて、愈幽齋の修業に着手する事となつた。修業者は宇一の叔母に當る静子、及妹に當る高子（十三歳）、多田琴、岩森徳子、上田幸吉其外二三人の者を以て、朝夕軒を流るる小川に水浴をなし、午前に四十分間づつ三回、午後にも亦三回、夜二回都合八回で、一日に三百二十分間、嚴格に修業した。そして瑞月は小幡川で拾つた假天然笛で、羽織袴を着し、極めて嚴肅に審神者の役を修するのであつた。

初めての審神者の事でチツとも様子は分らぬ。第一番に多田琴が神主の座に着くや否や、組んだ手を前後左右に振まはし、二十貫もあらうといふ女が、古い家の床が落ちる程飛あがり出した。戸も障子も襖もガタガタになつて了つた。一週間程の後には、餘りドンドン飛上つた爲か、床が二三寸下がり、障子も襖もバタバタと獨りこけるやうになつて了つた。宇一は此時まだ二十二三歳、兩親から苦情が起り、修業所をどこかへ移轉してくれとの命令を下された。さうかうする内、多田琴が口を切り始めた。

『シ、白瀧白瀧白瀧』

といひかけた。審神者は始めての口切りで、肝をとられ、驚きと一つは始めて口の切れた喜びとで、愈幽齋修業も前途有望だと、知らず知らずに天狗になつて了つた。多田の神主は日一日と發動が烈しくなり、詞も圓滑に使ふやうになつて來た。其時の審神者としては大きな聲を出し、よく發動し、荒く飛上がる程偉い神が來たのだと信じ、本當のしとやかな神感者を見ても、もどかしい様な氣になつて了つた。

多田琴に續いて又齋藤静子の面相が俄に猛惡になり、組んだ手を無性矢鱈に震動させ、これ又ドンドンと荒れ狂ひ出した。一人は大女、一人は三十になつても貰ひ手のないといふ、四尺足らずのチンコさんである。それが一時に負ず劣らずドンドンと飛上がり出した。静子の姉を始め、養子に來た元市といふのは、宇一の兩親であつたのが、静子が神憑になつたので、俄に乗氣になり、修業場を移轉することを取消して貰ひたいと申込んだ。

多田の神主はソロソロ大口をあけ、目の白玉に巴形の赤い模様が出来て、
静御前と義經辨慶、加藤清正どちらが偉い、此方は和田義盛の妻巴御前である

ぞよ、其證據には此方の目の玉を見よツ

と目を指し示す。初心の審神者は其目の玉をよくよく見れば、まがふ方なき一つ

巴が、兩眼に眞紅の色を染出して居る。……ヤツパリ巴御前ぢやあるまいかなア

……と思案してみると、神主は審神者の頬べたをピシヤピシヤと殴り、

馬鹿審神者の盲審神者、此方の正體が分らぬか。此方は勿體なくも、官幣大社

稲荷大明神の眷族三の瀧に守護致す、白瀧大明神であるぞよ。サアこれから此

白瀧が審神者をしてやらう。其方は神主の座にすわれ

と唼鳴りつけた。静子は又發動して、

おれは妙見山に守護いたす、天一天狐恆富大明神だ。見違ひ致すと、今日限り

審神者は許さぬぞ。ウンウン、バタバタ ドスン ドスン

と小さい婆アが飛上がる。今から思へば抱腹絶倒の至りだが、其時の審神者にと

つては一生懸命であつた。笑ふ餘地も怒る間も、調べる隙もない。只始めて會う

た發動状態、神の託宣、愈人間にも修業さへすれば、老若男女の區別なく、神通

が得られるものだ、といふ確信はたしかについたが、其外の事は一切耳にも這入

らず、思ふ事もなかつた。只一心不亂に三週間の修業を續けて居た。

一週間程たつた時、修業者は一齊に口を切り、少女の口から、

「チ、、、、、ツ、、、、、」

と口を尖らし、組んだ手をヒヨイヒヨイと動かして乍ら、喋り始めた。修業場は一切他人の近よることを禁じてみたが、餘り大きな發動の響と神主の聲とに、近所の者が聞きつけ、次から次へと喧傳して、晝も夜も家のぐるりは人の山になつて了つた。

多田琴は……白瀧大明神の命令だ……と云つて、修業者を殘らず引連れ、白衣

に緋の袴をうがち、一里餘りの道を白晝大手をふつて、

「家來ツ、伴して來い」

と云ひ乍ら、何だか譯の分らぬ歌をうたひ、足拍子を取り、外の修業者は其歌に合はして、石や瓦を叩き乍ら、テンツテンツ ツンツクツンなど言ひ乍ら、中村の多田龜の家へ行つて了つた。審神者は……コリヤ大變だ、一つ鎮めねばならぬ……と後追つかけようとすれ共、如何したもののか、自分の體は數百貫の石で押

へられたやうに重たくなつて、チツとも動く事が出来ない。止むを得ず、宇一は審神者代理となりて側にすわり、自分は惟神的に手を組まされ、瞑目してゐると、腹の中から丸いかたまりが二つ三つグルグルと喉元へつめ上げ、何とも言はれぬ苦さであつた。三四十分間息が切れるやうな目に會はされた揚句、

「此方は此肉體を高熊山へ導き、其靈魂を富士山へ伴れて行つた松岡天使である。サアこれから本當の審神者をさしてやらう。天下の萬民を助ける神の使は、餘程の修業を致さねば駄目だ。さアこれから此方の申す事をチツとも叛くでないぞよ」と自分の口から言ひ出した。宇一は這ひつくばひ乍ら、

宇一「恐れ乍ら松岡様に申し上げます。私は皆と一緒に修業を致して居りますが、まだ一遍も手も震うた事もなし、皆の様に神様がうつつつて物を言うて下さりませぬが、如何いふ譯で御座いますか。神さまさへ憑つて下さるのなら、どんな修業でも致しますから、どうぞ教へて下さいませ」

と頼んで居る。そうすると又神主の口から、

松岡「其方は大體精神のよくない男だから、神が憑る事が出来ぬのだ。三年や五

年修業したとて、其方は駄目だから、一層のこと、審神者になつた方がよからう

ぞ

宇一 「神主にもなれない者が如何して審神者が出来ませうか」

松岡 「神がせいと云つたら、キツと出来る。神が其方の肉體を使つてするのだから、

ちツとも心配は要らぬ」

宇一 「左様ならば御用を致します。不束な審神者で御座いますから、どうぞ宜し

う御願ひ致します」

松岡 「ヨシ、此神主の肉體は其方の監督に任すから、よく氣をつけたがよからう

ぞ。何時夜分に飛出すか知れぬから、氣をつけて居るがよい」

宇一 「ハイ、有難う御座います。此度の一同の者の修業が済みましたら、其先は

如何致しませうか」

松岡 「神が五萬圓程金をやるから、此穴太の或地點を買収し、大神苑を作り、神

殿を拵へ、神道の本部を建てて、布教をするのだ。何事も一々神の命令を遵奉せ

なくては駄目だから、そう心得たが宜からう」

宇一は齋藤源次といふ人の東隣の紋屋の息子である。其父親が相場に祖先傳來の財産を殆どなくして了ひ、今や其邸宅までが危なく浮いてゐたのである。何時家も屋敷もどこへ飛んでゆくか、流れるか知れぬやうな危険状態になつてゐた。今此松岡天使の五萬圓を與へるといふことを聞いて、喉を鳴らし、元市が其場に飛んで来て、叮嚀に兩手をつき、元市「松岡さま、どうも有難う御座います。これでいよいよ御神徳が有りました。どんな事でも神さまの御用を聞きますから、早く五萬圓の金を下さいませ。何れ天から降らして下さる譯にも行きますまい。相場に依つても五萬圓儲けさして下さるのでせうなア」

松岡「相場の事なれば此方は餘程不得手だ。坂井傳三郎といふ百年前に相場師が大坂に居つた。其の男は八十五萬圓の財産を残らず相場で負て了ひ、僅に残つた財産を、堺の住吉明神に献上致し、其の神徳に依つて、今は住吉の大眷族大霜といふ天狗となつて、相場の守護を致して居るから、其神が今此肉體にうつる様に守護してやらう。それに聞いたがよからうぞ。松岡はこれで引取る。ウンウンウ

ン」

元市「ママママママ一寸待つて下さいませ、モウ一言御尋ね致したう御座います」といふのも一切頓着なしに、審神者の肉體を三四尺宙に巻上げ、ドスンと元の座に尻を卸し、パチツと目をあけて、元の喜樂になつて了つた。

これより元市夫婦は態度一變し、今まで「喜樂々々」と呼びつけにしてゐたのが、現金にも「上田大先生様」とあがめ出して喋つた。宇一も親しき友人の事とて「オイ喜樂」などと云うてゐたが、俄に爺に倣つて、「大先生」と言ひ出した。何とはなしにテレ臭いやうな氣がしてならない。

「どうぞ今までのやうに喜樂と云うてくれ」
と何程頼んでも、親子共に首を左右にふり、

「イエイエ滅相もない、こんな立派な相場の神さまが御憑り遊ばす御肉體を粗末にしては、神さまに對し申譯がありません。どうぞ大先生と言はして下さい」
と金の欲に迷はされて、一生懸命に厭らしい程大事にし出した。

元市「モシ大先生、最前神さまが仰しやつたやうに、倅の宇一が審神者を致しま

すから、大霜さまの神懸りを一つ願うて下さいな」

と頼み込む。喜樂は仕方がないので、東側の溝に身をひたし、體を清め、再び白衣に紫の袴を着し、奥の間に静坐し、手を組んだ。又もや身體震動して、

大霜「われこそは官幣大社住吉神社の一の眷族、大霜天狗であるぞよ。相場の事なら何でも聞かしてやらう」

と大聲で怒鳴り立てた。元市は飛付くやうにして、頭を疊にすりつけ乍ら、膝近くまですり寄り、

元市「ハイ、有難う御座います。併し乍ら此通り門一杯人が聞いて居りますから、どうぞ低い聲で仰しやつて下さいませ。私も折入つて御願が御座いますから……」

大霜小さい聲で、

大霜「ヨシ分つた、何んなつと聞いてやらう。大方五萬圓の金を相場に勝たしてくれいと申すのだらう」

元市「ハイ、御察しの通り五萬圓の金の必要が起りました。何とマアあなた様は、私の心を御存じで御座います。疑もなき天狗様、これから家内中が打揃うて、村

の奴が何と申さう共信仰を致しますから、どうぞ米の上り下がりやハツキリ知らして下さりませ」

大霜「ヨシ、俺は生前に於て坂井傳三郎といふ堂島の相場師であつた。相場の爲に財産をなくした位だから、神界に於ても相場に詳しいので、其方面の守護を致して居る神だ。つまり言はば専門家だ、此方の負た丈の金は其方に勝たしてやつても、別に社會の科にもなるまい。五萬圓などとそんな吝嗇臭い事申すな。八千萬圓勝たしてやらう、どうぞや嬉しいか？」

元市「ハイ、嬉しい御座います」

大霜「其八十萬圓の金を手に入れたら如何する積りだ」

元市「ハイ、申す迄もなく、曾我部村を全部買収し、五萬圓がとこ林を買うて、其處を天狗さまの公園となし、残り七十五萬圓はマア一寸考へさして頂きますせう」

大霜「七十五萬圓の財産家となつて羽振を利かす考へだらう。其方は其金が手に入つたならば、立派な家を建築し、妾をおいて、榮耀榮華に暮さうといふ、今から考へを持つて居らうがなア。餘り贅澤になると酒色に耽つて衛生上面白くない、

身體衰弱して短命になる。又女房のあるのに妾などを置けば、家内が常にもめる道理だ。一層の事、今の貧乏の方が却て幸福かも知れないぞ。そうになると、却て神の恵が仇となるから、五萬圓丈にして置かうか」

元市「メ、滅相な、神さまの言に二言はないと聞いて居ります。あなたこそ神さまとなれば、お金の必要は御座りませんが、肉體のある以上は金は必要です。七十五萬圓の内、十萬圓丈は私が頂戴致しまして、後の六十五萬圓は驛遞局へ預けたり、慈善事業に寄附したり、社會の爲に使ひます」

大霜「それも結構だが、神さまのお道の爲に使はうといふ氣はないか」

元市「ハイ、神さまの方は五萬圓御約束の通り、チヤンときまつて居ります」
大霜「アハ、、、、そんならそうでも宜からうが、相場をする基本金は如何して

拵へるか」

元市「ハイ御存じの通り、スツカリ貧乏を致しまして、最早一圓の金も貸してくれる者もありませんので、此資本を神さまの御厄介に預つて貸して頂きたいもので御座います」

大霜「ヨシ、そんなら小判の埋藏所を知つて居るから、それを其方に明示してや
らう。誰にも言つてはならぬぞ。乍併此金は山奥に埋めてあるから、其方が行か
いでも、此神主の肉體を使うて掘りにやらすから、二三日待つて居るが宜からう」
元市「ハイ有難う、いくら隠してあるか知りませぬが、一人では途中が危なう御
座います。もし賊にでも出會うたら大變ですから、どうぞ私一人丈はお供にやつ
て下さいな」
大霜「ならぬ ならぬ、其金は一寸百萬圓ばかり小判で隠してあるが、其方に其
所在を知らすと、又悪い精神を出し、體主靈從におちてはならないに依つて、先
ず一萬圓計り資本に、此肉體に掘らしてくる。キツと従いて來る事はならぬぞ」
元市「そんなら倅の宇一をお供をさしますから、それ丈許して下さい」
大霜「イヤそれも成らぬ。此神主の肉體を神が勝手に使うて掘り出して來る。其
方の改心次第に依つて渡してやる」
元市「ハイ承知いたしました。御安心下さいませ。メツタに慢心する氣遣ひは御
座いませぬ。ズントズント心の底から改心を致して居ります」

喜樂は自分の腹の中から言ふ事を一々残らず傍聴し、又元市の言も聞いて可笑しくてたまらず……ナアにそんな金があるものか……と心の中で思つて仕方がなかつた。

大霜「神は最早引取るぞよ。此肉體を大先生と崇めて大切に致せよ。ドスス、ウン」

と飛び上がり、憑靈は忽ち肉體を離れて了つた。

元市「あゝ大先生、御苦勞はんで御座いました。どうぞ體を大切にして下さいや。大變な結構な御神徳を頂きました」

喜樂「私も聞いてみました、あんな甘い事大霜サンが言はれたけれど、嘘ぢやなからうかと、心配でなりませぬワ」

元市は首を左右に振り、

元市「大先生、そんな勿體ないことを言ふもんぢやありません。天狗サンは一割正直な御方ですから、嘘を仰しやる氣遣は御座いませぬ。アー之れで私の運も開きかけた」

とニコニコしてゐる。

其日は何となく吾家へ歸りたくなつたので、久し振りに自宅へ歸ることとなつた。

(大正一一・一〇・九 舊八・一九 松村眞澄録)

第八章 梟の宵企(一〇二〇)

久し振りで自宅へ歸り、心もユツタリと宵の口から眠つて居た。俄に「オイオイ」と自分の體を揺り起すものがある。吃驚して目を醒まして見れば誰も居ない。只老母や母や妹が、未だ宵の口とて眠りもせず、行燈の側で小説本を見たり、繪を廣げて見たりして居るのみであつた。俄に自分の體は器械の如く自動的に立ち上り、自然に歩み出した。靈に憑依された肉體は自分の意思では如何ともする事は出来ぬ。

體の動くままに任して居ると、何時の間にか産土の社の傍の殿山と云ふ、小さい丘の山に導かれて居る。臍の下あたりから、圓い塊がゴロゴロと音をさして、喉の近邊まで舞ひ上つて來たと思ふ刹那、

「大霜天狗……」

と唖鳴り立てた。自分は、

喜樂「モシ大霜さま、懸つて下さるのは結構でムいますが、さう苦しめられては堪りませぬ。もつと樂に懸つて下さいませ」

大霜「樂に懸つてやり度いのは神も同じ事だ。神だつて苦しいのだ。其方はまだ疑心がとれぬから、それで苦しまねばならぬ。早く改心を致して、神様の御用に

たたねばなるまいぞ。高熊山の修業の事は覚えて居るか」

喜樂「あんまり苦しうて、今の處では全然忘れて了ひました。何だか頭がボーッとして、分らぬ様になつて來ました。又ボツボツと思ひ出すだらうと思ふて居ます」

大霜「これから元市に申した金の所在を、其方に知らすによつて、鶴嘴や鋤鏈を

用意し、畚を一荷もつて奥山に行け。そこになつたら又此方が知らしてやるから

……」

喜樂「奥山の様な處へ一人行くのは困ります。宇一でも連れて行きませうか」

大霜「馬鹿をいふな。あんな欲どしい奴を連れて行かうものなら、神様の御用ど

ころか、みんな自分の所有にしてしまふ。其方一人、神がついて居るから早く歸つ

て用意をせい。お前もやつぱり金は要るだらう」

喜樂「私はもう神様のお道へ這入つたのですから、金の欲望はありません。金の

事聞いてもゾツと致します」

大霜「馬鹿云ふな。此時節に金がなくて神の道が擴まるか。家一つ建てるにも金

が要るぢやないか、布教に歩いても旅費が要る。又肉體も食はねばならず、着物

も着なくてはならぬぢやないか。金に離れて如何して神のお道が擴まるか」

喜樂「それもさうです。然し重たいものを澤山に持つて歸ると云ふ事は、暗がり

の山道、困るぢやありませんか」

大霜「俺が天狗の正體を現はして、重たければ俺が擔いで歸つてやる」

と自分の口から云つたり、答へたり、自問自答をする事稍暫らくであつた。
斯う聞くと、矢張金が無ければならぬ様な心持になり、宇一の來ぬ中に掘出し
て來うと思ひ、土運びの小さい畚を携へ、棕の杖、鶴嘴に鋤鏈、畚に小判一杯擔
うて歸る様な心持で、宮垣内の伏屋をソツと抜け出し、前條から愛宕山麓、姥の
懷、虎池、新池、芝ヶ原、砂止と段々進んで、高熊山の修業場を右手に眺め、猪
熊峠をドンドン登り、危険極まる打子越と云ふ坂を上り、算盤岩を渡り、再び馬
の背の險を経て、奥山の玉子ヶ原と云ふ谷間へ進んで行つた。
そつと空畚を卸し、山に腰掛け息を休め、天津祝詞を奏上し始めた。何だか知
らぬが其邊ぢうが眞黒氣になつて來た。谷の下の方から灰色の雲の様なものが、
チクチクと此方へ向ふて押寄せて來る様な氣分がして、何時の間にか手も足も震
ふて居る。何とも云へぬ淋しい様な情ない様な氣分になり、假令一億圓の金があ
つても掘り度くもなし、欲しくもない。それよりも早く、自分の宅に歸り度いと
云ふ弱い氣分が襲ふて來た。幸ひに東の空から、春の朧月が瘦た顔して昇つて來
た。心の勢か、其邊あたりに何とも云へぬ淋しい、人と虫とも獸とも見當のつ

かぬ様な、悲しい嫌らしい聲が聞えて来る。臍の下から又もや三つの塊がグレグレグレと動き出し、咽喉元へ舞ひ上る。又神懸りだなと思ふて居ると、
「俺は大霜だ、サア此下に小判がいけてある。此處を掘れ、鶴嘴を持って！」
と呶鳴り出した。喜樂は命のまにまに鶴嘴の柄を握ると、兩の手は鶴嘴の柄に食ひついた様に離れず、器械的に鶴嘴は、カチンカチンと動き出した。何程體がえらいから一休みしようと思ふても、鶴嘴の柄が手に着いて離れず、勝手に鶴嘴は堅い土をコツンコツンとこつき出す。殆ど二時間ばかり土をこついては鋤鏈でかき分けさせられ、又鶴嘴で土をつつきては鋤鏈で掻き分け、又鶴嘴で土を掘り二尺ばかりの深さに四尺四方形掘らされて了ふた。腹の中から、
大霜「大分お前も草臥れただらう。神も餘程疲れたから一寸一服致す」
と云ふと共に、引着いて居た鋤鏈は手から離れた。殆ど十分間ばかり腰を打ちかけ掘つた穴を眺め、
「こんな處何時迄掘つた處で何が出てくるもんか」
と心に思はれて仕方なかつた。腹の中から、

大霜「オイ、喜樂、貴様はまだ疑ふて居るな。此處に金が無いと思ふか、神がある」と申したら確にある。もう一息の辛抱だ。さうならば貴様の疑もとけるだらう。金光燦然として目も眩きばかりの、大判小判が無盡藏に現はれて来るぞ。貴様はまだ銀貨や銅貨は見居るが、金は見た事はあるまい。ビツクリ致さぬ様に、先に氣をつけておく。シツカリ腹帯をしめてかかるんだぞ。嫌さうにすると神が懲戒を致すぞよ。又喉をつめようか」

喜樂「いやとも何とも云つてるのぢやありません。神様の云ふ通りしとるぢやありませんか」

大霜「随分樂しみぢやらうなア。何程貴様は金は要らぬと「ヘラズ」口を叩いても、其金が隠してあると思へば、やつぱり心がいそいそするだらう。此金があるさへすれば、此世の中に苦勞も要らず結構に渡られるのだ。貴様は餘程果報者だ。サア早く鶴嘴を持って！」

と云ふかと思れば、自分の體は器械的にポイと立ち上り、矢庭に鶴嘴を握り、カチンカチンと大地をつつき出した。掘つても掘つても天然の岩ばかり二尺ほど下

に竝んでゐる。又一時間程掘らされたが、今度は一寸も掘れない。鶴嘴の先は坊主になつて了ひ、一寸も利かなくなつて了つた。

喜樂「こんな岩ばかり、何時迄こついて居つても駄目でせう。誰かが埋けたのなら岩蓋が出なければならぬ。此奴ア天然の岩に違ひありません。チツと處が間違ふて居るのぢやありませんか、もう欲にも徳にも此上働く事は出来ませぬわ」

大霜「アハ、ハ、ハ、腰抜けだな。そんな弱い事で如何して神様の御用が出来るか。地球の中心迄打ち抜く丈の決心がなければ、三間や五間掘つては小判の處へは届かぬぞ」

喜樂「天狗サン、お前サン俺を騙したのだなア。あんまり殺生ぢやありませんか。金を欲しがつて居る元市には掘らさずに、金なんか要らぬと云つて居る私を、此んな處へ連れて來て騙すとはあんまりです。サアもう私の肉體には置きませぬ。

早く出て下さい」

大霜「何程出えと云つても、お前の生命のある限り出る事はならぬわい。本當は嘘だ、お前の心をためしたのだ。こんな處へ金があつて堪るか。アハ、ハ、ハ、」

喜樂「こりや、ど狸！人の體へ這入りやがつて、馬鹿に【さらす】も程がある。

もう何と云ふても俺の體にはおいてやらぬぞ」

大霜「貴様はまだ金が欲しいのか」

喜樂「俺は一寸も欲しくないわい。天狗の奴が欲しいものだから俺を使ひやがつ

て、あてが外れたのだらう。あんまり馬鹿にすな、サア去にくされ」

と腹から胸を握り拳で力一杯叩いて見た。それきり腹の中の塊も舞ひ上つて來ず、

佛が法とも云はなくなつた。斯うなると俄に淋しくなつて堪らない。折角此處迄

來て、空畚を擔いで歸るのも態が悪いと、月夜の事で露をおびて光つて居る紫躑

躑や赤躑躑を、ポキポキ折つて一荷の花の荷を拵へ、そこへ鶴嘴や鋤鏈を隠し、

朧月夜を【ばやい】たり、びくついたりし乍ら、漸くにして砂止迄歸つて來た。

其處にはハツキり分らぬが二つの黒い影が腰をかけて、煙管煙草をスパスパや

つて居る。喜樂は心の裡で、

「ハテナ、今頃にあんな處に男が煙草を吸ふて居やがる。ヒヨツとしたら泥坊か

も知れぬぞ。もし泥坊だつたら、折角掘り出した小判を皆盗られて了ひ、生命ま

で奪られて了ふかも知れぬ。マア、金が無うてよかつた。もし泥坊が何か渡せと云つたら、此花をつき出してやつたら吃驚するだらう』
と思ひ乍ら、怕々一筋道を黒い影の處迄やつて來ると、
「ヤア、大先生、お目出度う！ 之から私が擔いであげます。實の所は大霜さまがきつう止められましたから、お供はしませんでしたが、一生懸命掘つてゐた時、一丁程側から見張りをして居りました。大分澤山掘れましたやらうなア。サア私が之から擔いであげませう。何分黄金といふものは嵩の割合に重いもんだから……」

と欣々として噪いである。

喜樂「いいえ、そんなに重いものぢやありません。空畚と同じですから、此儘私が擔いで参ります。薩張り駄目でした」
元市「駄目でしたやらう。それはその筈ぢや。此處はマア駄目にして、此儘私の家へ歸つたら如何ですか」
喜樂「元市サン、みんな空畚で躑躅の花ばかりです」

元市「上かはは躑躅でも宜いぢやないか、どれ私が擔ぎます」

と無理に棒をひつたくつて肩に擔ぎ、

元市「あゝ割とは軽い、これでも一萬圓位はあるだらう。空畚にしては大變重い

から……」

喜樂「重いのは鶴嘴の目方ぢや」

元市「マア結構々々、假令少々でも資本さへあればよい。サア之から八十萬圓儲

けて、天狗さまの公園にかからう」

と欣々として吾家へ歸つて行く。

それから後は元市親子の信用を失ひ、遂には修行場まで斷られて了つた。不得已、自分は自宅へ歸つて自修する事となつた。多田琴は中村へ歸つて奥山川の水に浸り御襖し乍ら、盛に鎮魂や歸神の修業を四五人と共にやつて居た。

(大正一一・一〇・九 舊八・一九 北村隆光録)

第九章 牛の糞（一〇二一）

齋藤元市氏は大霜天狗の託宣のがらりと外れたのに愛想をつかし、修業場を貸すことを謝絶し、それきり自分の方へは見向きもせなくなつたのみならず、「大先生」と、暫く崇めてみた喜樂に「泥狸、ド狸、野天狗、ド氣違」と罵り始めた。そして自分の妻の妹のチンコの静子を、中村の修業場から引張歸り、園部の下司熊吉といふ博奕打の稻荷下げをする男の女房にやつて了つた。十三歳の高子の方は神懸りが面白いので、中村の多田龜の内で修業をして居た。宇一は爺の目を忍んで、そろそろ喜樂の宅へ出入りを始めた。そして神の道を覺束なげに研究してみた。

奥山で失敗して歸つてから、五日目の夜さであつた。又もや大霜天狗サンが、五日間の沈黙を破つて、腹の中からグルグルと舞ひ上り、喉元へ來て呶なり始めた。喜樂はヤア又かと、迷惑してゐると、雷のやうな大きな聲で、大霜「此方は住吉の眷族大霜であるぞよ。男山の眷族小松林の命令に依つて、再

びここに現はれ、其方に申渡すことがあるから、シツカリ聞くがよいぞ。宇一は暫く席を遠ざけたがよからう」

宇一は審神者氣取りになり、

宇一「コレ大霜天狗サン、餘り人を馬鹿にしなさるな。奥山に金が埋けてあるなんて、能うそんな出放題が言へましたなア、モウこれからお前の云ふことは一言も聞きませぬで……オイ喜樂、チとシツカリせぬと可かんぜ。お前の口から言ふ

のぢやないか、餘程氣を付けぬと氣違になつて了うぞ。……オイ大霜、これでも神の申すことに二言がないといふか。八十萬圓なんて駄法螺を吹きやがつて、俺

たち親子を馬鹿にしやがつたな」

大霜「八十萬圓でも八百萬圓でも其方の心次第で與へてやる。まだ改心が出来ぬから、誠のことが言うてやれぬのだ。金の欲が離れたら幾らでも金を與へてやる」

宇一「金の必要があるから欲しくなるのです。誰だつて必要のない物は欲しいことはありません、欲しくない金なら要りませぬワイ。石瓦も同然だから、金を欲しがらぬ奴には金をやらう、欲しがる奴にはやらぬといふ意地の悪い神がどこに

あるか、チツと考へなさい。審神者が氣をつけます」

大霜「そんならこれから神も改心して、欲しがる奴にチツと計り與へてやらう」

宇一「ハイ、私は別に必要はムいませぬが、内の爺は先祖からの財産を相場です

ツクリ無くして了つたものですから、親類からはいろいろ攻撃せられ、あの養子

は「ようし」ぢやない、「わるうし」だと人に言はれるのが残念ぢやと悔やんで

居ります。餘り欲な事は申しませぬから、元の身上になる所迄金を與へてやつて

下さい。そしたら爺も喜んで信仰いたします。此頃は、大霜サンが喜樂にうつつて

騙しやがつたと云つて怒つてゐます。それ故私も爺に内證で、斯うして神さまの

御用をさして貰はうと勉強して居るのでムいます」

大霜「お前は親に似合はぬ殊勝な奴だ、それ丈の心掛があらば結構だ。そんなら

これから金の所在を本當に知らしてやる、決して疑ふではないぞ。先に騙された

から今度も嘘だらうと、そんな疑を起さうものなら、又もや金銀の入つた財布が

牛糞に化けるか知れぬぞ、よいか！」

宇一「決して神さまのお言を始めから疑うて居るのぢやムいませぬが、此間の様

に神様から間違はされると、又しても騙されるのぢやないかと、自然に心がひがみまして、一寸計り疑が起つて参ります」

大霜「それが大體悪いのだ。綺麗サツパリと改心をいたして、此方の申すことを一から十迄信ずるのだぞ」

宇一「ハイ、一點疑をさし挟みませぬから、お告げを願ひます」

大霜「そんなら言つてやらう、一萬兩でよいか」

宇一「ハイ、當分一萬兩あれば、さぞ爺が喜ぶこつてムりませう」

大霜「其一萬兩を如何する積りだ。天狗の公園を先にするか、自分の目的の相場の方にかかるか、其先決問題からきめておかねば言うてやる事は出来ぬワイ」

宇一「ハイ、そこは神さまにお任せ致します。御命令通りになりますから……」

大霜「そんなら言つてやらう、よつく聞け！ 葦野山峠を二町許り西へ下りかけ

た所の道端の叢に、十萬圓這入つた大きな色の黒い財布がおちてゐる。それは鴻の池の番頭が京都の銀行から取出して、大坂へ歸る途中泥坊の用心にと、ワザと

途を轉じて葦野山峠を越えた所、泥坊の奴、チヤンと先廻りを致し、葦野山峠に

待つてゐた。それとも知らず番頭は、百圓札で一千枚都合十萬圓持つて、葦野山峠をスタスタと登り、夜の十二時頃通つた所を、泥棒が物をも云はず、後からグーイと引つたくり、持つて逃げ様と致すのを、此大天狗が大喝一聲……曲者！……と樹の上から唳鳴りつけた所、泥棒は一生懸命に逃げ出す、番頭は生命カラガラ能勢の方面へ逃げて行く。ア、大切な主人の金を泥棒に取られて、如何申譯があらう、一層池へ身を投げて申譯をせうと、今大きな池のふちにウロウロしてゐる所だ。それをどうぞして助けてやらうと、此方の眷族を閒配つて守護致して居るから、先づ今晚は大丈夫だが、何れ彼奴は金が出ない以上は死ぬに違ひない、それ故其方が其金を拾ひ、其筋へ届けたなら規則として一割は貰へるのだ、一割でも一萬圓になる、サア早く行け！」

宇一 「それは何時賊が出ましたのでムいますか？」

大霜 「今晚の十二時頃に出たのだ」

宇一 「一寸待つて下さい、まだ午後五時で御座います。日も暮れて居らぬのに、今晚の十二時に賊が出たとは、そら昨夜の間違ひと違ひますか？」

大霜「ナニ今晚に間違ない、神は過去、現在、未来一つに見え透くのだ。先に出て来る事を知らぬ様では神とは申さぬぞよ。サア早く行け、グツグツして居ると番頭の壽命がなくなるばかりか、十萬圓の金を又外の奴に拾はれて了へば、メツ夕に出て来る例がない」

宇一「葦野山峠は僅に一里計りの所です。今から行きましたら六時には着きます。六時間も待つて居るのですか？」

大霜「オウそうぢや、お前は肉體を持った現界の人間だ、神界と同じ調子には行かぬワイ、そんなら十二時に賊が出て金を取るのだから、餘り早過ぎてもいかず、遅過ぎてもいかぬから、此處を十一時半に立つて行け、そうすれば丁度都合がよからう」

宇一「最前申した様に決して疑は致しませぬけれど、もし間違つたら如何して下さいますか？」

大霜「間違うと思ふなら行かぬがよかる、後で不足を聞くのは面倒だから、一層の事喜樂一人行くがよい、一萬圓の謝金は其方の自由に使うたが宜からうぞ」

宇一「もし大霜さま、此間の様に喜樂丈が行きますと、不結果に了るかも知れませぬ。私も一緒に連らつて行つたら如何ですか？」

大霜「それも宜からう。それまでに水を三百三十三杯頭からかぶり神言を五十遍上げよ。そうすればこれから丁度十一時半迄時間がかかる、それから行つたがよからう。神は之から引取るぞよ」

ドスンと飛上り、疊を響かせ鎮まつて了つた。宇一は釣瓶に三百三十三杯の水をかぶるのは苦痛で堪らず、小さい杓で、一杯の水を三しづく程酌んで「一つ二つ三つ……」と云つて三百三十三杯かぶる眞似をしてゐた。祝詞も神言では長いと云つて、天津祝詞に代へて貰ひ、漸くにして五十遍早口に唱へて了ひ、

宇一「サア喜樂、ソロソロ行かうぢやないか。まだ九時過ぎだが、道々修行したりなんかしもつて行けば、丁度よい時間になるよ。遅いより早いがまだだからな」

喜樂「モウおかうかい、おれは何だか本當のやうに思はぬワ。又此間の様な目に會はされると馬鹿らしいからな」

宇一「薬物にこりて膾を吹くとはお前の事だ、そう神さまだつて何遍も人を弄び

になさる筈がない、疑ふのが一番悪い、何でも唯々諾々として是命維れ従ふと云

ふのが、信仰の道だ。そんな事云はずに行かうぢやないか

喜樂 〇 餘り人に分らぬよにしてをつてくれ。もし失策つたら又次郎松サンに村中

觸れ歩かれると困るからなア

宇一は 〇 ヨシヨシ 〇 と諾き乍ら、早くも吾茅家を立出でる。喜樂も従いて、田

圃路を辿り天川村を右に見て、出山を越え、上佐伯の御靈神社の森に辿りつき、

森の杉の木の株に腰を打掛けて、夜のボヤボヤした春風を身に浴び乍ら、眠たいの

を無理に辛抱して、時刻の到るのを待つてゐた。

愈十一時を社務所の時計が打出した。

〇 ア、モウ十一時だ、早く行かう

と宇一は先に立つ。喜樂は後からスタスタと險しき葦野山峠を、七八丁計り登つ

て行く。峠の茶屋に山田屋と云ふのがあつた。まだ時刻が早いので、一寸一服し

て行かうと、戸の隙から中を覗くと、此五六軒よりかない村の若い者が、まだ遊

んでゐる。……コリヤ却て都合が悪い……と云ひ乍ら、峠の右側の松林に進み入

り、暫く時刻の到るを待つてゐる間に、二人共グツスリ寝込んで了つた。

フツと先に目が開いたのは宇一であつた。

宇一「オイ喜樂、早う起きぬか、今一寸道の方を覗いて居りたら、神さまの云ふたやうに、一人の黒い男が、財布の様な者を擔げて通りよつたぞ。又其後へ二人の男が一町ほど離れて行きよつた。ヤツパリ神様の仰しやる事は違はぬワ。丁度今財布をボツタクられてる所だ。餘り早く行くと俺達が泥棒と間違へられて天狗さまに叱られては大變だから、ゆつくりして行かうだないか」

と小さい聲で囁く。喜樂の心の中は、八分まで信ぜられない、如何してもウソの様な氣がする。けれ共二分許り何とはなしに希望の絲にながれてるやうな氣がした。

そこで兩人は林の中から街道へ下り、峠を二町ばかり降つて見ると、一寸曲り途がある。ここに間違ひないとよく目を光らして見れば、財布の様なものが黒く落ちてゐる。二人は「イニウ三ツで其の黒い物に手をかけると、財布と思ふたのは牛の糞の段塚であつた。」

二人は餘り馬鹿らしいので、互に何とも云はず、まだ外に落ちてるに違ひないと、汚れた手をそこらの草にこすりつけ拭き取り乍らガザリガザリと草の中を捜して見た。ここは常から牛車の一服する場所、路傍の草原に牛をつなぐ爲、どこにもかしこにも牛糞だらけである。……コラ此處ではあるまい……と又一町許り降り、そこから中捜してみたが、何一つおちてゐない。念入りに葦野峠の西坂五六丁の間を捜してる間に、夜はガラリと明けて了つた。宇一は失望落膽の餘り、宇一「オイ喜樂、貴様の神懸りはサツパリ駄目だ。今度は糞を掴ましゃがつただないか、クソ忌々しい、もうこんな事は誰にもいふなよ。お前は口が軽いから困る。そして今日限り神懸りは止めようぢやないか」

喜樂「グツグツして居ると金の財布が牛糞になると神さまが言ふたぢやないか。モウ仕方がない、これも修業ぢやと思つて諦めようかい」

宇一「サア早く歸なう、誰に出會うか知れやしない。餘り見つともよくないから……」

と云ひ乍ら、力なげに兩人は穴太へ歸つて來た。

斯かくの如ごとくして神かみさまは天狗てんぐを使つかひ、自分等じぶんらの執着しふちやくを根底こんていより拂拭ふつしきし去さり、眞しんの神柱かむばしらとしてやらうと思召おぼしめし、いろいろと工夫くふうをおこらし下くださつたのだと、二十年にじふねん程ほど経たつて氣きがついた。それ迄までは時々ときどき思おもひ出だして、馬鹿ばからしくつて堪たまらなかつたのである。あゝ惟かむながらたま神靈ちんげい幸倍ちへい坐世ませ。

（大正一一・一〇・九 舊八・一九 松村眞澄録）

第一〇章 矢田やだの瀧たき（一〇二二）

葦野山あしのやまたうげ峯のしぎかの西坂にしざかでマンマと牛糞うしくそをつかまされ、阿呆あほうらしくて堪たまらず、稍やや自暴自じばうじき棄て的きになつて、二三日にさんにちの間朝寝あひだあさねをする、宵寝よひねもする、天津祝詞あまつのりとの奏上そうじやうや、鎮魂歸ちんこんきし神しんの修業しうげふは中止ちゅうししてゐた。そうすると三日目みつかめの晩ばん、又またもや臍下丹田さいかたんでんから例れいのグルグルが喉元のどもとへ舞まひ上あがり、

『アーアー』

と大きな聲を連發し、暫くすると、

「阿呆阿呆阿呆！」

と嘯鳴りつける。喜樂は思つた……本當に天狗の云ふ通り、阿呆も阿呆、圖なしの阿呆だ。併し乍ら誰にも云はずに今まで隠してゐるのだから、大霜天狗無頓着にあんな聲で、葦野山峠の失敗事件を喋りでもせうものなら、それこそ親兄弟、近所株内の奴に馬鹿にしられ、神さまの祭壇も取除かれて了うに違ひない、どうぞ大きな聲を出してくれねばよいがなア……と心の中に念じてゐた。

大霜「コレ肉體、スツパ抜かうか、チツと貴様も困るだろ。どうせうかな」とからかひ始める。

喜樂「どうなつと勝手にしなさい。元の土百姓や牧畜業者になつて了ひます。却て素破ぬいた方が諦めがついて宜しい」

大霜「そう落膽するものぢやない。まだお前は十分に身魂が研けて居ないから、もう一度神が連れて行くから、水行をするのだ。小幡川原の水は體にしみ込んで垢がとれぬから駄目だ。今度此方がよい所へ連れて行つてやるから、其用意をせ

い。草鞋や脚絆をチヤンと拵へて、今晚の十二時に此處を立つ事にするのだ」

喜樂 「又ウソを言ふのぢやありませんか？」

大霜 「嘘も糞もあつたものかい。モウ斯うなつた以上は何事があらうと神に任し、

糞度胸を据ゑてかからねば何事も成功しないぞ。あの位の事でフン慨しとるやう

な事ぢや駄目だ」

喜樂 「モシモシ天狗さま、お前さまは大霜だと云つて居られるが、違ひませう。

どうも云ひぶりが松岡さまらしい」

大霜 「松岡でも大霜でも構はぬぢやないか、お前の魂さへ研けたらいいのぢや。

本當の守護神が分らぬやうなこつては神柱も駄目だ。本當は俺を誰だと思つてる

か」

喜樂 「松岡さまにきまつてゐますワイ」

松岡 「よう當てた、本當は松岡だ。奥山へ金掘りにやつたのも、牛の糞を掴まし

てやつたのも皆此松岡だよ、アハ、ハ、ハ、ウフ、ハ、ハ、ハ」

喜樂 「馬鹿にしなさるな」

松岡「馬鹿の卒業生を馬鹿にせうと思つても、する餘地がないぢやないか、エへへへ。これからサア身魂の洗濯に連れて行かう。草鞋や脚絆がなければ下駄ばきでいいワ、サア行かう」

と腹の中からどなると共に、喜樂の體は器械的に立上がり、庭の駒下駄をはいたまま、夜の十二時頃に自宅を立出で、小幡川を渡り、スタスタと穴太を東に離れ、重利の車清の側の橋を越え、藪をぬけ、一町許り進むと、自分の足は土中から生えた様にピタリと止まつて了つた。そこには田園に施す肥料をたくはへる糞壺があつて、異様の臭氣が鼻をついてゐる。腹の中から塊がクルクルと又もや喉元へつきつけ、

松岡「オイ肉體、眞裸になつて此糞壺へ這入り、身魂の洗濯を致せ！」
と唝鳴り出した。體は自然に糞壺の方へ進んで行く。鼻が曲るほど臭うてたまらぬ。

喜樂「コレ松岡さま、こんな所へ這入つたら尚汚れるぢやありませんか。綺麗な水で洗濯してやらうと言ひ乍ら、糞壺へ這入れとはチツと間違ひぢやムいませぬ

か
」

松岡 「錆た刀を砥ぐ時も、生灰をつけたり、泥をつけたりする様に、お前のやう

な製糞器は糞で研いでやるのが一番だ。糞より汚い身魂を持つてゐ乍ら、糞が汚

いとは何を吐すのだ
」

と大聲に呶鳴り立てた。喜樂はビツクリして、

喜樂 「ハイ、そんなら裸になつて這入ります。どうぞ大きな聲を出さぬやうにし

て下さい
」

と帶を解かうとする。

松岡 「オイ待て待て、それさへ分ればモウよい。お前の體は機關だ、生宮だ。そ

んな所へ這入つて貰ふと俺も一寸困るのだ、アハ、ハ、ハ、」

喜樂 「私は元からの土ン百姓で、糞位は何とも思つて居りませぬ。糞がなければ

五穀野菜が育ちませぬから、一遍這入つて見ませうか
」

松岡 「這入るなら勝手に這入れ。其代り此松岡は只今限り守護致さぬからそう思

へ。あとはもぬけのから、狸の容物にでもなるがよからう
」

斯う言はれると何となしに未練が湧いて来る。松岡神が人の體へ這入つて、ウソ計り言ひ何遍も失敗をさせよる仕方のない奴、こんな邪神は一時も早く退散させたいと思ふ事は度々であつたが、サテ之れ限り立退くと云はれると、何だか惜い様な氣がして來るのが不思議である。

喜樂「そんなら、あなたの仰に従ひます。サア是から美しい水の所へ連れて行つて下さい」

松岡「コレから一里許り東へ行くと、矢田の瀧というて東向きに落ちてゐる、形計りの瀧がある。そこで水行をするのだ、サア行ケ！」

と號令し乍ら、喜樂の肉體を自由自在に操つて、足早に硫黄谷を越え、大池の畔を傳うて、龜岡の産土矢田神社の奥の谷に導き水行を命じた。そして一週間の間毎夜此瀧に通ふ事を肉體に嚴命した。喜樂はそれより毎夜々々淋しい山道や池の畔や墓場を越え矢田の瀧へ通ふ事となつた。

矢田の瀧へ通ひ始めてから七日目、今晚が行の上りと云ふ時になつて、なんとなく心の底に恐怖心が湧いて來た。奥の間にかけてあつた大身鎗をひつさげ、十

二時頃自宅を立つて、穴太の村外れまで進んで来ると、自分の持つて居る鎗が心の勢か勝手に動き出し、リンリンと唸り聲がして来る。鎗の穂先は夜でハツキリは見えぬが、自然に曲り鎌首を立ててゐる様な気がしてならぬ。黒い古ぼけた鎗を握つた積りでゐたのがいつの間にか太い蛇を握つてる様な気がして来たので、麥畑の中へ矢庭に放り込み、車清の方へ向つて進みかけた。此鎗を棄ててから餘程恐怖心が薄らいで来た。

追々進んで硫黄谷の大池の側へ来て見ると、周圍一里もあると云はれてゐる山間の大池の中に二三丈計りあらうと思はる背の高い、それに恰好した太さの、赤い丸顔の男が深い池水に腰あたりまでつけて、バサリバサリと自分の方を向いて歩いて来る様に見える。髪の毛は縮み上げる、胸は動悸が高くなる。一心不亂に「惟神靈幸倍坐世」を稱へ乍ら池端を東へ東へと走りゆく。此怪物はどうなつたか、後は分らなかつた。前方に當つて青い火が、いつも燈つてゐない所に見える。進みもならず退きもならず暫く途中に立つて思案をしてゐると體がオゾオゾと慄ひ出す、益々怖くなつて来る、四方八方から厭らしい化物に襲撃されるやうな氣

がしてならない。あゝこんな時に松岡さんが憑つてくれるといいのにと思ひ、

「松岡天狗さま、松岡さま」

と大きな聲で叫んでみた。自分乍ら聲は大きうても、其の聲に波が打ち、ふるひが籠つてゐた。かうなると自分の聲まで厭らしくなつて来る。怖いと思ひかけたら、如何にも斯うにも仕方のないものである。……マア此處で暫く静坐して公平な判断をつけねばなるまい……と道の傍の芝生の上に腰を下し、姿勢を正しうして両手を組んで見た。されど自分の體も腰も手も足も、骨なしの蛸のやうになつて、グラグラして一寸も安定を保つ事が出来なかつた。たつた一聲腹の中から、

「突進！」

といふ聲が聞えて來た。其聲を聞くと共に、俄に糞落着きに落着く事が出來た。

そして心の中で……エー之れが靈學の修業だ、何れ靈界の事を研究するのだから、現界と同じやうな事では研究の價値がない、これが却て神さまの御守護かも知れぬ、今日は一週間の修業の上りだ、高熊山の修業中にいろいろと靈界の事を見せ、て貰ひ、教へても貰うて居る。随分其時も厭らしい事や恐ろしい事があつた、

これ位な事は靈界探險當時の事を思へば、ホンの門口だ……と直日に省み漸く腰を上げて、青い火の方へ進んで行つた。怖々火の側へ寄つて見れば青く塗つた硝子の行燈に火が點してある。途のわきがすぐ墓になつてゐて今日埋けたばかりの新墓に白い墓標が立つてゐる。氣をおちつけて見れば、龜岡の稻荷下げをして居つた婆アで、御嶽教の教導職を勤めて居た六十婆アが死んだので、此處に葬つたのだと云ふ事が白い墓標の文字で明かになつた。ヤツと安心して漸く矢田神社の境内にさしかかり、社前の水で體を清め、御社の前で天津祝詞を奏上し、瞑目靜坐などして夜の明けるのを待つてゐた。最早これから奥へ夜中に行く丈の勇氣が臆病風に誘はれて無くなつてゐたからである。

夜はホノボノと明けて來た。そこらの様子が何となく晝らしくなつたので俄に元氣を出し、細谷川を傳うて、一週間歩き馴れた谷路を登つて行く。併し實際は夜が明けてゐるのではなかつたと見え、再びそこらが薄暗くなつて來た。空を包んでゐた雲がうすらぎ、東の空から月が昇つたのが薄雲を通して光つたからであつた。二三町許り行つた所に、五十五六の骨と皮になつた、瘦た可なり背の高

い婆アが、一方の手を前に出したたり後へ引いたり、切りに樵夫が前挽をひくやうな事をやつてゐる。……ハテ怪體な奴が出やがった。夜が明けたと思へば暗くなつて来る。そこへ川に臨んで婆アが妙な手つきをして體を揺つて居る。此奴ア、ヒヨツとしたら稻荷山の峰つづきだから、奴狐がだましてゐるのかも知れぬ。心よわくては駄目だ……と俄に空元氣を出し、婆アの近くによつて、一生懸命の聲で、

「コラツ！」

と唼鳴つて見た。婆アは此聲に驚いて、折角發動してゐた手をピタリと止め、腰を屈めて、

婆「ハイ、どなたか知りませぬが、何か御無禮な事を致しましたかな。妾は樽幸の稻荷さまに信心して居りまして、御臺さまから神うつりの傳授を受け、今日で三年許り毎晩此處へ修業に来て居ります。おかげで右の手腕此通り御手うつりが出来出しました。もう三年すれば又左の手に御手うつりがあり、それから胴うつり、頭にうつり、御口が切れるのが、ママアザツと之から十年の修業で御座

います。お前さまは此頃評判の高い、穴太の天狗さまぢや御座いませぬか
喜樂「お婆サン、そんな年寄りがこれから十年も修行して居つたら、口の切れる
のと死ぬのと一時になるぢやないか。モツと早う口の切れるやうにして上げよう
か。私が修業したら、一週間にはキツと口を切つて上げる」
婆「ハ、ハ、ハ、さうかが易く神様が憑つたり、口が切れるやうな事なら、此婆も
こんな永い修行は致しませぬワイナ。早う口の切れるやうな神は碌なものぢやあ
りませぬ。どうで狐か狸でせう」
と自分が豆狸にうつられて居乍ら、狐狸をくさしてゐる其可笑しさ。肥持ちが糞
の臭を知らぬのと同じやうなものだなアと思ひ乍ら、此場を立去らうとすると、
婆アサンは又右の手を樵夫が木をひくやうに動かせ乍ら、腰をキヨクン キヨク
ンと揺り動かし、動かぬ方の手をニユツと前に出し、
婆「コレもし、穴太の天狗さま、どうで御世話になりますか、一遍樽幸の稻荷さ
まに伺うた上頼みますワ。此間西町の御臺さまが、樽幸の稻荷さまの弟子で居乍
ら、餘部の稻荷さまの方へ肩替しやはつたら、其罰で死なはりました。昨日葬式

がありました。神さまの御機嫌を損ずると恐ろしいから、とつくり樽幸の稻荷さまに伺うた上御世話になりますワ

喜樂 樽幸の稻荷さまはキツと反對するにきまつてゐる。此方は天狗さま、そちらは黒サンだからなア

婆 コレコレ、何といふ勿體ない事を仰有る。あの神さまは正一位天狐御劍大明神さまだ。一の峰に御守護遊ばすお山一の御守護神さま。勿體ない、黒サンぢや

などと、狸にしてうとは、罰が當りますぞえ。そんな御方に御世話にならうものなら、どんな事が起るか知れませぬ。モウ是ぎりお前さまも妾の事を忘れて下

さい、妾も忘れます。妙な因縁の綱がからまると互に迷惑しますからなア。六根清淨六根清淨南無妙法蓮華經……

と一生懸命に唱へ始めた。喜樂はここを見捨てて二町許り上手の東向きの瀧へ行つて見ると、いつも餘り太くない瀧が一丈程落ちて居るのに、今日は又如何した

ものか、五六間こつちから瀧を見ると、眞白けの者が立つてゐる。朧月夜にすかし乍ら、瀧壺の前まで近よつて見ると、二十五六の女が白衣をつけて髪をふり亂

し、瀧にかかつてゐる。喜樂は神憑りと見て取り、

喜樂「何神さまで御座いますか、お名を聞かして下さい」

とやつて見た。瀧にかかつてた白衣の女は両手を組んだまま、頭上高く差し上げ、背伸びをし、少しく反り返つて、

「力松大明神……」

と甲聲で呶鳴つた。

喜樂「力松大明神とは何處の守護神ですか？」

女「稻荷山、奥村大明神の御眷族、力松大明神だ。此方を信仰致せば病氣災難一切をのがらしてやるぞよ。其方は穴太の天狗であらう。今日で一週間の修行の上

りと聞いた故、此肉體の外志ハルを、此方が誘ひ出し、其方に面會させる爲に待つて居つたのだ。随分途中で怖かつただらうのう」

喜樂「分りました、どうぞ御引取を願ひます」

女「引取れと申さいでも、此力松大明神はそちの心をよく知つとるから引取るぞよ。ウンウン……」

と云つたぎり、龜岡旅籠町の外志ハルと云ふ神憑りは正氣に歸つて了うた。

さうかうする間に夜はカラリと明け渡つた。二人はいろいろと神様の話をし乍ら外志ハルの頼みに依つて、旅籠町に廻り、夫の筆吉といふに面會して、互に道の爲に助け合ふ事を約し、穴太へ歸つて來た。

(大正一一・一〇・九 舊八・一九 松村眞澄録)

第一章 松の嵐(一〇二三)

一週間の矢田の瀧の行を終つてから、宮垣内の自宅に於て、喜樂は愈々神業に奉仕する事となつた。盲目や聾啞、リウマチ、其他いろいろの病人がやつて來て鎮魂を頼む、神占を乞ふ、何れも御神徳が彌顯だと云ふ評判が忽ち遠近に轟いて、穴太の天狗さまとか金神さま、稻荷さまなどといつて、朝から晩まで參詣人の山を築き、食事する間もない位、多忙を極めて居た。

例れいの次郎松じろまつサンがやつて来て、祭壇さいだんの前に尻しりを捲まくつてドツカと坐すわり、大勢おほぜいの参さん拜者ばいしやの中なかをも顧かへりみず、眞赤まつかな顔かほして喜樂きらくを睨にらみつけ、次郎松じろまつ「コリヤ極道ごくどう息子むすこ、貴様きさまは又またしても山子やまこ商賣しやうばいをやる積つもりだな。ヨシ、今いまに化けばの皮かはをヒン剥むいて、大勢おほぜいの前まへで赤恥あかはぢかかして見みせてやらう。それが貴様きさまの將しやう來らいのためにもなり、上田家うへだけの爲ためにもなるのだ。株内かぶうちや近所きんじよへよい程ほど心配しんぱいをかけさらせやがつて、其上そのうへまだ狐使きつねつかひの眞似まねをすとは何なんの事ことだ。何故なぜ折角せつかくここ迄まで築きつきあげた、見込みこみのある牧畜ぼくちくや乳屋ちちやを勉強べんきやうせぬか。神かみさまだの、占うらなひだの、譯わけの分わかぬ出鱈目でたらめを吐ぬかしやがつて、世間せけんの人ひとを誤魔ごまかし、甘うまい事ことを仕様しやうたつて駄目だめだぞ、尾をの無いド狐ぎつねとは貴様きさまの事ことだ。貴様きさまが本當ほんたうに神様かみさまに面會めんくわいが出来でき、又また神様かみさまの教をしへが伺うかがへるのなら、今俺いまおれが一つ檢査けんさをしてやらう。萬まんが一いちにも當あたつたが最後さいご、俺おれの財産ざいさん四百圓よんひやくえんの地價ちかを殘のこらず貴様きさまにやる」
と口汚くちぎたなく罵ののしり乍ながら、湯吞ゆのみの中なかへ何かなに小さい物ものを入れて、其口そのくちを厚紙あつがみで貼はり糊のりをコテコテとつけ、音おとをせぬ様やうに懷ふところから出だして前まへにソツと置おき、次郎松じろまつ「サア先生せんせい、イヤ極道ごくどう息子むすこ、指一本ゆびいっほんでも觸さえる事ことはならぬ。此儘このまま此湯吞このゆのみの

中に、どんな物がどれ丈け這入つてをるかと言ふ事を、貂眼通とか鼬通とか云ふ先生、見事あてて見よ。これが當つたら、それこそ天が地になり地が天になる。お月さまに向つて放す弓の矢は中つても、こればかりは滅多にあたる氣遣ひはない。如何ですな、先生！

と輕侮の念を飽迄顔面に現し、喜樂の顔を頤をしやくつて睨めつける。

喜樂「俺は神様の誠の教を傳へたり、人の悩みを助けたりするのが役だ。手品師の様に、そんな物をあてると云ふ様な事は御免蒙り度い。神さまに教へて貰ふた事はないから知りませぬ」

次郎松はシタリ顔で、一寸舌を出し頤を二つ三つしやくつて、

次郎松「態ア見やがれド狸奴、到頭赤い尻尾を出しやがった。エー、おけおけ、此時節にそんな馬鹿の眞似さらすと、此松サンがフンのばして了ふぞ。オイ狸先生、腹が立つのか、何だ、其むつかしい顔は……残念なか、口惜しいか、早く改心せい、ド狸野郎奴」

と益々傍若無人の惡言暴語を連發する。喜樂はあまり次郎松の言葉が煩さくなつ

て來たので、一層の事、彼の疑心を晴らしてやらうと思ひ、

喜樂「松サン、あんまりお前が疑ふから、今日一遍だけ云ふてやるが……一錢銅貨を十五枚入れてあるだらう」

側に聞いて居つた數多の參詣者は、各自に此實地を見て感嘆して居る。次郎松は妙な顔し乍ら、御叮嚀に喜樂の顔を又もや覗き込み、自分の右の手で自分の膝頭を二つ三つ叩き、首を一寸傾けて、

次郎松「ハア……案の定、狐使ひだ。やつぱり箱根山の道了權現のつかはしの飯綱をつかつてるのだな。一體そんな管狐を何處で買つて來たのだ。何匹ほど居るのか。そんなものでも一匹が一圓もとるか、一寸俺にも見せて呉れ、ホンの一寸でよい、大切なお前の商賣道具を長う見せてくれとは云はぬ」

と譯の分らぬ質問を連發する。迷信家ほど困つたものはない。

喜樂「神懸りの靈術によつて、透視作用が利くのだ」

と少しばかり靈魂學の説明を簡單に述べたてて見た。されど元來の無學者だけに、何をいつても馬耳東風、耳に入りさうな事はない。又もや次郎松は口を尖らして、

次郎松「透視だか水篩だか、そんな事ア知らぬが、そこらに小さい管狐を放り出さぬ様にして呉れよ。ヒヨツと取り憑かれでもしたら大變だ。皆さま用心しなさい。此奴ア飯綱使ひだから、うっかりしていると憑けられますよ。病人が來ると、管狐を一寸除かして、病氣を癒し、又暫くすると管狐をつけて病人にして、何度も禮をとると云ふ蟲の良い商賣を始めかけよつたのだ。何しろ近寄らぬが何よりだ。別に穴太の村に喜樂が居つて神を祀らうが祀らうまいが、矢張お日さまは東から出て御座る。暗がりになるためしもなし、喜樂が神さまを始めてから、お日さまが、光りが強くなつた譯ぢやなし、お月さまが毎晩出る譯でもないし、斯んな者に騙されるより早う皆さまお歸りなさい。こんな奴に眉毛をよまれ尻毛をぬかれて堪りますか。俺はきつてもきれぬ親類だから、第一上田家のため、又此極道の爲め、お前サン達の爲め氣をつける」

と口を極めて反對の氣焰をあげる。然し參詣者は一人も消えぬ。依然として鎮魂を乞ひ、伺ひを願つて喜んで歸つて行く。次郎松サンは翌日の朝早くから穴太の村中一軒も残らず、

次郎松「家の本家の喜樂と云ふ奴は、此頃飯綱を買って来て妙な事をして居るから、相手になつてくれるな」

と賃金不要の廣告屋を勤めて居る。次郎松は神の教を忌み嫌ふ悪魔の靈に憑依されて知らず識らずに邪神の走狗となつて了つたのである。

其翌日大勢の參拜者を相手に、鎮魂をしたり神話を始めて居ると、侠客侯野の乾兒と自稱する背の低い牛公がやつて来た。足に繃帶をして居る。

牛公「オイ、喜樂サン、随分お前の商賣もよう繁昌するね。俺は夜前一寸足に怪我をしたのだ。何卒お前の鎮魂とかで足の痛みを止めて貰ひ度いものだ」

と横柄に手を拱き、座敷の眞中にドスンと坐つて擲掬ひ始めた。元より怪我などはして居ないのだ。みな嘘の皮、萬々一喜樂が、

「さうか、それは氣の毒だ」

と云つて直に祈願でもしやうものなら、
「天眼通の先生が之が分らぬか、怪我も何もして居ない、嘘だぞ」
と云つて大勢の中で笑つたり、ねだつたり、困らしたりしようとの悪い企みで來

て居るのである。若し喜樂が、

「お前は疵も何もして居ない。そんな事をして俺をためしに來て居るのだ」

と云へば、自分の指の下に隠した小刀で繃帶を解き乍ら一寸足を切つて血を出し、

「これや、これ丈け血が出て居るのに怪我して居ないとは何の事だ。ド山子奴！」

と啾鳴り立てあやまらして、酒錢の一圓も取つてやらうとの算段をして居るのだ

と見てとつた喜樂は、牛公の言葉を耳にもかけず放擲つて、素知らぬ顔で數多の

參詣者に鎮魂を施して居た。

牛公は喜樂の態度が餘程癢に觸つたと見え、狂ひ獅子の様に暴れ出した。忽ち

先祖代々から家の寶として居る、蟲喰だらけの眞黒氣の障子の桁を滅茶苦茶に叩き

破る、戸を蹴破る、火鉢を蹴り倒すと云ふ大亂暴をなし乍ら、再び座敷の眞中に

ドスンと胡坐をかき、

牛公「こりや安閑坊の喜樂！ これでも罰をようあてぬか、腰抜け神の鼻垂れ神

ぢやな。そんな「やくざ」神を祀つてる貴様は、日本一の馬鹿野郎だ。今此牛さ

まが神床に小便をしてやるから、神力あり正念がある神なら、立所に罰をあてる

だらう。そんな事して能う罰をあてん様な腰抜神なら、神でも何でもない、溝狸位なものだ。蚯蚓に小便かけてさへが腫れるぞ、此奴ア狸だから正念があるなら、俺のを腫らして見い！」

と云ひ乍ら犬の様に片足をピンと上げて、無作法にもジヨウジヨウとやりかけた。數多の參詣者は吃驚して、残らず外に逃げ出して了つた。喜樂は神界修業の時から、三五教の無抵抗主義を聞いて居たから、素知らぬ顔して彼がなす儘放任して居た。牛公は益々圖にのつて、終ひには黒い尻をひきまくり、喜樂の鼻の前でプンと一發嗅し「アハ、と笑ひ乍らサツサと歸つて行つた。

それと擦れ違ひに、弟が野良から鍬を擔げて慌だしく馳來り、牛公の亂暴した事を聞き口惜がり、地團太を踏み乍ら、

由松「エーツ、此神さまは力の無い神だ。毎日々々物を供へてやるのに何の罰でも能うあてぬのか。ウーンと「フン」のばして了へばよいのに、そうすれや牛公だつて、次郎松だつて能う侮らぬのだが、此處に祀つてあるは氣の利かぬ寢呆け神だから、あんな奴に馬鹿にしられるのだ」

と齒をかみしめて吃り乍ら怒つて居る。喜樂は靜に弟に向つて、

喜樂「オイ、由松、そんな分らぬ事を云ふな。よう考へて見い、彼奴ア畜生だ。

名からして牛ぢやないか。猫や鼠は尊い御神前の中でも、糞や小便を平氣で垂れ

て居る、烏や雀は神様の棟へ上つて糞小便を垂れかける、それでもチツとも神罰

があたらぬのぢやないか。元來畜生だから、神様のおとがめがないのだ。人間も

人間の資格を失ふたら畜生同様だ。畜生に神罰があたるものかい」

と云はせも果てず由松は、

由松「ナニ、馬鹿たれるか」

と云ふより早く、祭壇の下へ頭をつつ込み其ま直立した。祭壇も神具もお供物

一式ガタガタと轉落し、御神酒からお供水、洗米、其他いろいろの供物が座敷一

杯になつて了つた。神様の御「みと」迄疊の上ひつくり返つて居る。由松は拾

うては戸外へ投げつける、參詣者はビツクリして顔色を變へチリチリバラバラに

逃げ出す。由松は猶も猛り狂ひ、

由松「オイ哥兄、こんなやくざ神を祭つて拜んでも屁の役にもたたぬぢやないか、

もう今日限りこんなつまらぬ事はやめてくれ。こんな餓鬼を祀つただけに家内中が心配したり、村中に笑はれたり、戸障子を破られたり、此神は上田家の敵だ。敵を祀ると云ふ事が何處にあるものか』
と分らぬ事を愚癡つて怒つて居る。

喜樂は由松の放かした「おみと」を拾ひ鹽で清め、再び祀り直し神様にお詫をして、漸く其日は暮れて了つた。

其日の夜中頃、由松の枕許に男女五柱の神様が現はれ玉ふて、頻りに由松に御立腹遊ばした様な顔が歴々と見え、恐ろしくて一目もよう寝ず、夢中になつて寝たままあやまつて居る。せまい家の事とて横に聞いて居る喜樂の可笑しさ。由松もこれで少しは氣がつくだらうと思つて居ると、翌朝早くから御神前をお掃除したり、お供物をしたり、祝詞を奏げるやら、暫くの間は打つて變はつて敬神の行爲を勵んで居た。然し十日ほどすると、又もや神様の悪口を次郎松と一所になつて始めかけた。

(大正一一・一〇・九 舊八・一九 北村隆光録)

第一二章 邪神憑（一〇二四）

喜樂は矢田の瀧に修行に行つた序、朝早くから龜岡の伯母の内を一寸訪問して
みた。伯母は大の稻荷信者であり、又其頃一寸天理教にもかぶれてみた。喜樂が
神懸りになつたといふことを聞いて、一度參つて見たく思ふてゐた際である。齋
藤宇一を伴うて、其日伯母を訪ねて見ると、何時も「喜樂坊喜樂坊」と呼びずて
にし、「お前はチンコだ、甲斐性なしだ。内の倅は體格も丈夫だし、餘程賢い」
などと、クソカスにこきおろすのが例であつた。それに今度は打つて變つて、門
口へ這入るなり、伯母が飛んで來て、
伯母「モシモシ御臺様、能う來て下さいました、どうぞ座敷へ御通り下さいまし
て、御ゆるりとなさいませ、何なつと御註文次第御馳走を拵へて上げます。お揚
げが宜しいか、小豆飯をたきませうか、瓢箪さまの御臺さまが御座ると甘鯛の一
鹽が好きだと云ふて、生なり食つて下さる、種油も食つて下さる、神さまによる
と、石油でも五合位おあがりになる、あなたは何かが好きで御座いますか、何な

りと御註文なさりませ、神さまに氣よう食て頂くほど氣持のよいことはありませぬ」

とサツパリ稻荷下げに人をして了うてゐる。喜樂は首を左右に振り、

喜樂「伯母サン、私に神さまがうつつてもそんな卑しい物は御あがりにはなりませぬ、富士の山の天狗さまが憑つて御座るのだから……」

伯母「天狗さまなら猶のこと、御あがりなさらんならん、いつも御臺さまに鞍馬

山の魔王さまがお憑りになり、何でもかんでも御あがりになり終ひにや瓢箪さま

まで御憑りになつて、よい聲で歌ひ踊らはると、何とも云へぬ氣持のよいものだ、

さうすると、御前の神さまは死んだ神さまだな、物を食はぬから……」

何時も狸寄せ、狐寄せをやつて居る伯母は、神懸りは何でもかんでも喰べるも

のと思ふて居るらしい。龜岡附近では何時も迷信家が寄つて、稻荷下げの御臺さ

まを招いて來て寒施行といふことをする。其時御臺になる女は神佛混淆の御經を

となへ、御幣を振つて……おれはどこの稻荷だ……とか、魔王だとか、五郎助だ

とか、太郎八だとか、狸までがやつて來て、一生懸命に一人の口へ入れて了ふ。

小豆飯あづきめしの三升位さんせうくらゐ一遍いつべんにケロリと平たひらげ、油揚あぶらげの五十枚位ごじふまいくらゐ苦くもなく食くつて了しまひ生節なまがしの十本じつぽん、蒲鉾かまぼこの二十枚にじふまい、種油たねあぶら一升いつしやう、醬油しやうゆ五合ごがふごはん御飯ごはんにお酒さけと殆ほとんど想像さうざうもつかぬ程ほど平たひらげ了しまひ、そしてよい聲こゑを出だして、身輕みがるに舞まうたり踊をどつたりする。いよいよ神かみよせが濟すむと、元もとの肉體にくたいに返かへる。すると其その稻荷いなり下げは大抵たいてい女をんなが多いおほが、

「あゝ大變腹たいへんはらがへりました。御膳ごぜんをよばれませうか」

と自分じぶんから催促さいそくして、一人前いちにんまへ以上いじやうを食くつて了しまふ。かういふ神憑かむがりでないかめをかと龜岡地かめをかち方うでは持もてはやされぬのである。伯母をばはこの傳でんをいつも見みて居ゐるから、自分じぶんに懸かる神かみさまは何なにも食くはないと云いつたら、伯母をば「ソラお前まへの神經しんけいだ。ヤツパリ神かみさまぢやない」

などと云いつて、又また態度たいどが一變いつべんし、

伯母をば「コレ喜き三さ、よい加減かげんに目めをさまして、早はやう歸かへつて元もとの乳屋ちちやをしたり、百姓ひやくせうをしなさい。お前まへがさうヒヨロヒヨロしてお米よねがどん丈心配だけしんぱいするか知しれぬ。

私わしがこれから旅籠町はたごちやうの天理王てんりわうさまへ連つれて往いつて御祈禱ごきたうして貰もらつて上げよか」と親切相しんせつさうに言いうてくれる。宇一ういちはポカンとして二人ふたりの問答もんたうを聞きいてゐたが何なんと思おも

つたか、黙つてポイと此家を出て了つた。喜樂も宇一の出たのを幸ひ、伯母の内を甘く逃げ出し、穴太へ歸る途中、荒塚村の前で宇一に追ひつき、それから其足で寺村の重吉といふ稻荷下げの所へ調べがてら行くこととなつた。

漸くにして寺村の小谷重吉の家に着いた。竝河馬吉といふ男が世話係の元締をして居る。宇一は馬公と懇意の仲であつた。それは親類關係からである。馬吉は宇一の姿を見るなり、

馬吉「ヤア宇一サンか、能う來て下さつた。今穴太へ相談に行かうと思つて居つた所だ。昨夜から神憑りが烈しうて、どうにも斯うにも仕様がな、穴太の先生にしづめて貰はうかと思つてゐた所だ。どうやるなア、來て下さるだらうか」

と尋ねて居る。宇一は、

宇一「此人が喜樂サンだ、頼んでみたがよからう」

馬吉「それは願つてもないこと、イヤ失禮しました。あなたが喜樂サンで御座いましたか、何分宜しう御願申します、サア何卒奥へ御通り下さい」

瓦葺の田舎では可なり大きな家であつた。馬吉の案内につれて二人は奥へ通る

と、次の間に何とも知れぬ妙な唸り聲が聞えてゐる。馬吉は一寸其聲する方を指し、

馬吉「モシ喜樂の先生様、あの通り二三日前から唸り通して御座います。今迄二十三人病人を助けましたので、皆の者がエライ神さまだと云うて信心してゐましたが一寸調子に乗つたと見えて、逆上したのか、取止めのない譯の分らぬことを、あの通りベラベラ囀つて居ります。どうかして直す法は御座いますまいかな」と心配らしく尋ねてゐる。喜樂は俯いて手をくみ思案にくれてゐる。

宇一「二三日前からうなり出したか、ソラ大方大天狗の口の切れかも知れんぞ、ズイ分俺ンとここで三週間修行した時にも、家がゴーゴー鳴る、ゆすれる、ソレはソレは大變なことがあつた。家の爺が怒つて、喜樂サンに修行場をどつかへ持つて行てくれと唸鳴つた位の大騒動だつた。其時は俺もズイ分肝を潰したが、モウ神憑りに經驗がついたので、あの位の唸り聲は何でもないワ。喜樂サンでなくても俺が一つ這入つてしづめて来てやらうか、ナア喜樂サン、如何せうかな」
喜樂「マアやつて見い、萬一可けなかつたら、俺が出るとせう」

宇一「ヨシ来た、喜樂サン、ここに待つてゐてくれ……オイ馬サン、お前も一所
に行てくれ、おれが一つ審神者をして天狗の口をきるか、もし悪神であつたら靈
縛をかけてやらう」

と確信あるものの如く意氣揚々として、一寸した廊下をわたり、二間建の離れ座
敷の、唸り聲のする方を指して進んで行く。

暫くすると大變な甲聲の太いやつが聞えて来た……ハテナ野天狗が現はれて口
を切つてるのだなア……と思ひ乍ら、自分で茶を汲み、二人の歸つて来るのを待
つてゐたが、何時までたつても歸つて来ない。「ウンウン」と唸る聲は段々と烈
しくなる。此家の者はビツクリして、同じ村の親類へ皆逃げて行つて不在である。
日の暮に間近く、座敷の隅はソロソロうす暗くなつて来た。細い廊下を渡つて
聲のする居間へ行つて見ると、二人共あべこべに靈縛にかかり、ふんのびて了ひ、
其上に小谷重吉が神憑りになつたまま目を丸く光らせ、妙見サンが波切丸の寶劍
を振り上げたやうな恰好で、力瘤だらけの腕を、赤裸になつて、頭上に片假名の
フの字型にし、左の手を握つて馬吉の頭をグイグイ押へつけ乍ら、

重吉「コリヤ悪人共、改心致すかどうぢや、きさまは俺の所の女房と何々して居るだらう。白状せい、コリヤ宇一、貴様も餘り性がよくないぞ、鞍馬山の大僧正が其悪事をスツクリ調べ上げて制敗をしてやるのだ、サア如何ぢや」

と云つては頭をコツンとなぐる。二人は強直状態となり、首計りふつて聲をも能う出さず苦んでゐた。小谷重吉の神憑りは喜樂の姿を見るより、二人の上からツツと下りて叮嚀にキチンとすわり、

重吉「これはこれは大先生さま、能う来て下さいました。私是一體神憑りですやるか、但は氣が違つて居るのですやるか、自分がてに合點が行きませぬ。どうぞ一つ調べて下さいな、オホ、々、」

と厭らしう笑ふ。如何しても普通とは見えぬ。そこで「ウーム！」と一つ鎮魂をやつて見ると、重吉は何の感應もなく依然として坐つて居る。靈が二人にかかつたと見え、俄に二人は強直状態から免がれ、ムクムクと立上がり、重吉の左右に責寄つて、宇一は左の手を、馬吉は右の手をグツと後へまはし、手早く手拭で括らうとする。

喜樂「オイそんな亂暴なことしちや可かぬ、待て待て、コリヤ神憑だから、本人が悪いのぢやない、そして俺がここへ来た以上は、キツとあばれさせぬから、其手を放してやれ」

馬吉「今日迄こんな事はなかつたのです、只大きい聲で怖い面して吠なる一方でしたが、今の先から様子がガラツと變り、私が此男の女房を何々したとか云つて、覚えもないことをぬかし頭をコツきよるのです。こんな神憑があつてたまるものか、常平常から此奴ア悋氣深い奴だから、私が此處へ遊びに来るのを、何か妙な目的があつて来て居るのだと思つて居つたに違ひない。それが一つになつて氣が狂ひ、情ないことをぬかすのだらうから、一つ頭から血を出し、水でもかけてやらねば直りますまいで、なア宇一君、お前如何思ふか」

宇一「俺は全くの氣違とは能う思はぬワ、ドエライ野天狗が憑きやつて重吉の肉體の精神とゴツチヤ交ぜになつて、こんな事を吐すのだと思ふ。一つ喜樂サンに鎮魂して貰うたら分るだらう、俺もこんな審神者をしたことは今日が始めてだ、こんな奴に相手になつて居らうものならそれこそ命がけだ、最前も俺の喉笛に喰

ひつかうとしたので、横面をはり倒してやつたら、俄に口を切り出しあんな事吐すんだよ」

重吉は又もや立ち上り、兩腕をプリンプリン振り乍ら、

重吉「此方は鞍馬山の魔王大僧正だ、これから鞍馬山へ天の雲へ乗つて、行つて来る、其方はそれ迄ここに待つて居れ、今度おれが歸つたら、大變な神力を受け、歸り、どいつも此奴もゴテゴテ吐かす奴を片つ端からふん伸ばし、股から引き戒めてやる程に、ウツフーン」

と云ひ乍ら、ドシンドシんと一足々々足に力を入れ外へ出ようとする。喜樂は兩手を組んで、「ウーン」と一聲靈を送つた。重吉は其場になつて倒れて了うた。

馬吉「コレ喜樂サン、そんな無茶なこととして如何になりますか、手も足も冷たうなつたぢやありませんか、若し後へ戻らぬやうなことがあつたら吾々は大變ですがな、どうして下さる」

と氣色をかへて、鼻息をはずませ、腕をニユツとつき出して迫つて来る。

喜樂「ナアニ心配いりませぬよ。今戻してやりませぬよ。」

と言ひ乍ら、二拍手して天の數歌を二回まで唱へ上げた。重吉は、

「アハ、ハ、ハ、」

と笑ひ乍ら、身體元の如く軟くなつて起あがり、

重吉「アー喜樂サン、ホんに偉い御神力ぢや、モウ是ならお前さまも大丈夫だ、

サア法貴谷へ修行に行きませう、喜樂サン從いて來て下さい、お前さまに眞言秘

密の法を教へて上げるから、此魔王大僧正が直接に、神變不可思議の魔術を授け

ますぞや。アーン」

喜樂「おかげで私はいろいろの神術を高熊山で教はりましたから、モウ結構で御

座います、どうぞ結構な法があるのならば、馬サンや、宇一サンに授けて上げて

下さい」

とからかひ氣分に云ふ。重吉は肩を怒らし乍ら、言も芝居口調になつて、

重吉「コレなる兩人は、生れつきの精神が悪いに依つて、神が見せしめの爲、ふ

ン伸ばしてやつたのだ。かやうな者に魔訶不思議の法を授けやうものなら、どん

なことを致すか分りませぬワイ、ウツフ、ハ、ハ、

と立ちはだかつて、得意面をさらしてゐる。半分は肉體、半分は野天狗の神憑といふ状態であつた。馬吉は握拳をかためて重吉の横面をピシヤピシヤとなぐりつけ、

馬吉「コリヤ小谷重吉、きさまは偽氣違の偽神がかりだ、常平常から俺を誤解してゐやがるからそんな事をぬかしやがるんだ。俺は貴様の云ふやうな悪人ぢやないぞ、どうぢや貴様が去年、の嬢をした時に、泣いて俺に仲裁を頼みに來よつたぢやないか、其御恩を忘れたのか馬鹿野郎奴！」

と面ふくらしして眞向になつて怒つてゐる。

宇一「オイ馬公、こんな半氣違をつかまへて怒つたつて仕方がないぢやないか」

馬吉「おれも親類なり、友達だと思つて、家内でさへも能う居らぬ重公の世話をしてやつて居るのに、喜樂サンの前で、有りもせぬことを吐しやがると、業腹がにえてたまらぬのだ」

重公は其間に尻をまくり、

重吉ぢうきち「コラ馬公うまこう、けつでもくらへ！」
と云いひ乍ながら、眞黒まつくろけの尻しりを出だし、二ふたつ三みつ叩たたいて裏口うらぐちから、どこともなし飛出とびだして了しまうた。日ひはズツポリとくれて、何處どこへ行いつたか、チツとも見分みわけがつかなくなつて了しまうた。後あとにて聞きけば法貴谷ほうきだにの石凝いしこりとか云いふ天狗てんぐが住すんでゐる岩山いはやまへ逃にげ込こんでゐることが四五日しごにちしてから分わかつたのである。
喜樂きらくは只一人ただひとり穴太あなをの自宅じたくに歸かへり、日夜にちやの參詣者さんけいしやに對たいして鎮魂ちんこんを施ほどこし神占しんせんを取次とりついでゐた。

(大正一一・一〇・九 舊八・一九 松村眞澄録)

第三篇

坂丹珍聞はんだんちんぶん

第一三章 煙の都「一〇二五」

松岡天使の命令によつて、喜樂は只一人初めて大坂の布教を試みむと早朝吾家を立ち出で、天然笛と鎮魂の玉に皮製の鞆を一つ肩にひっかけ、生首峠を渡り茨木街道に出で、それより汽車に乗つて大坂の地に着いた。

大坂は煙の都とかねて聞いて居た。初めて大都會を見た田舎者の目には、井中の蛙が大海に放り出された様に面喰つて了ひ、何處を如何行つたら宜いかわらなくなつて了つた。幾百とも知れぬ煙突から立ち上る濛々たる黒煙は、中空に龍の躍るが如く、馬車人車の行き交ふ音は轟々として、雷を聞くかとはばかり疑はれ、魂消きつて梅田の驛から當途もなしに南へ南へと進んで行つた。漸く中の島の公園に辿りつき、豊太閤を祀つた豊國神社や、木村重成の誠忠碑の大きな花崗石が、真中から斜に罅き割れて居るの等を拜禮し乍ら、多田龜の元の妻たりしお國と云ふ女の宅を頼らうと、其處らあたりをうるつき廻つた。此お國サンの家には、多田琴が娘の事とて、布教がてら先へ行つて居るので、兩人息を合せ此地で大宣傳

を試みようと思ふたからである。

水の都の大坂市、中空は煙に包まれ地は河で圍まれて居る。同じ様な橋が幾つともなく架かつて居る。大坂には殆ど千ばかりの橋梁が市内に架つて居る。橋と名のつくのは僅に二つ三つで其外は皆橋である。天満橋、天神橋、浪速橋と云ふ様に橋ばかりの大都會を、軒別に……お國の家は此處か……と尋ね廻る間抜けさ加減、國を出る時に多田龜にお國サンの住所を詳しく聞く事を忘れて來たのだ。田舎育ちの喜樂は、名さへ云へば小さい田舎の様に直判ると思ふて居たから、住所を詳しく問ふておかなかつたのである。何程廣い大坂でも、交番所で尋ねたらお國サンの處ぐらゐは直に判ると早合點して居た。それが大坂へ初めて來て見ればチツとも見當がつかない。交番所へ行つて尋ねて見ても巡査に笑はれるばかり、住所と苗字の知れぬ只お國サンだけでは到底駄目だつた。不圖、自宅の隣家に住む穴太の齋藤佐一と云ふ人が天満橋の詰め近く空心町と云ふ處に餅屋をしてると云ふ事を豫て聞いて居た。これを思ひ出して尋ねようと考へ込んだ。これは地理をよく知つた車屋に案内さすが一番だと考へ、折柄空俵をひいて橋の詰めに

やつて来る俣夫に向つて、

喜樂「空心町の齋藤佐一と云ふ餅屋へやつて呉れ」

と頼んで見た。車夫は、

車夫「空心町は餘程道程がありますから廿五錢下さい」

といふ。自分は直に廿五錢を俣屋に渡した。さうして長い天満橋の上を南へ渡り、

それから又大きな橋を一つ渡つて又もとの橋の近所へ連れて來られた。其橋詰の

少し凹んだ狭い間口の家の前に卸して呉れた。よくよく見れば「實盛餅」と書い

てある。あゝ此處だたと頷き乍ら、

喜樂「御免」

といつて中へ這入つた。随分狭い家であつた。初めに俣に乗つた處へ畢竟おろさ

れて居たのである。後で考へて見れば、天神橋を南へ渡り又天満橋を北へ渡り、

町中を廻つて元の處へ下されたのであつた。田舎者の事とて、二十八才の青年も

人力車に乗つたのは、恥かし乍らこれが初めてであつた。實盛餅の主人は、自分

の顔を見て、

主人「あゝ喜樂サンですか、能うおいでやす。あなたは此頃噂に聞けば偉う信神が出来ますさうな、そりや結構です。マアゆつくり一服して下さい」と云ふ。

喜樂「ハイ、有難う」

と腰を掛け、扇をパチパチと云はして俯向いて居ると、主人の佐市サンはお繁と云ふ嫁サンに實盛餅を皿に盛らせて、

主人「サアお上り」

と親切に茶を汲んで出して呉れた。お繁サンも亦、

お繁「喜樂サン、マア珍しい、能う來なさつた。折角だから家で泊つて貰ひ度いが、此通り表が二疊敷、奥が四疊半で寝る處がないので、泊つて貰ふ譯にもゆきませぬ。妾が宿屋を案内するから其處で泊りなさい。旅費は持つて來なさつたかと尋ねる。喜樂は、

喜樂「實は五十圓の旅費を算段して持つて來ました。まだ、四十九圓五十錢残つて居る」

て居る」

と答へると、佐市サンは、

佐市「そんな大金を持つて居ると、掏摸が田舎者だと思ふて盗るか知れぬから、

シツカリと内懐へ入れて片一方の手で握りもつて歩きなさい」

と注意し乍ら、川傍の三階建の宿屋へ案内して呉れた。荷物といったら靴一つよ

りない。外へ鞆を提げて、行き當り次第布教に出ようと宿屋を出掛ると、其處の

番頭が喜樂の襟髪をグツと握り、

番頭「こりや何處へ逃げて行く、田舎者奴が！」

とえらい權幕で唸鳴りつける。喜樂は吃驚して、

喜樂「ヘイ、私は何處か其處らへ神様の道を拓きに行かうと思ひます。夜になつ

たら歸つて來ますから、何卒やらして下さい。毎日日こんな處へ來て、宿賃を

拂つて遊んで居つては詰りませぬから……」

と云ふと、番頭は少し顔を和らげて、

番頭「そんなら其鞆を置いて行かつしやい、お金は何程持つてる」

と云ふ。

喜樂「ここに四十圓あまり持つて居ます」

と答へると番頭は、

番頭「其金を預けて行きなさい。確に預るから……お前サンの様な都會に慣れない人は、何時掬摸に盗られるか知れぬから、もしも盗られたら此方の宿賃まで貰へぬ様になつて了ふ。さうなれば互の迷惑だ」

と少し言葉を和らげて云ふ。そこで喜樂は四十圓を此處の番頭へ預けておき、残りの端金を懐に入れて其處等あたりをウロつきまはり、色々の教會を訪問し、稻荷下げを調べたり何かして二週間ばかり何の効果も無く過ぎして了つた。さうして多田琴の母親の家は如何しても判らなかつた。夜分になると宿屋へ歸つて鎮魂をしたり、自問自答して神勅を伺ふたけれど、チツとも松岡サンも大霜サンもスカタンばかり教へて本當の事を言つて呉れなかつた。

二週間経つと宿屋の番頭が、

番頭「お客サン、勘定を願ます」

と云つて勘定書を持つて来る。よくよく見れば一日の泊りが二圓八十錢で二週間

で三十九圓二十錢と書いてある。一度田舎の宿で泊つた時二十五錢であつた。何程大坂が高いと云つても一日五十錢出せば大丈夫だ……と思ふて居た田舎者の喜樂は、生命の綱と頼んで居た旅費の大部分が、思ひ掛けなき宿料に皆とられた事に肝を潰し、直に預けた金の中から八十錢返して貰ひ、それを茶代として渡したので、畢竟四十圓の金は二週間前に番頭に渡した時見たきり、それが長のお別れとなつて了つた。實際を云へば此五十圓は、牧畜業の方では三人の組合で金を如何することも出来ないの、自分の家と屋敷を抵當に入れて借つてきた金である。そこら迂路々と芝居を見たり落語を聞いたり、見世物や車賃などで七八圓の金はなくなつて居た。もはや懐には一圓あまり外、なかつたのである。

此宿屋は玉屋と書いてあつた。河端の極く新しい白木造りの家であつた。此玉屋を立ち出で北區の天満天神さまの鳥居を潜つて、大坂へ別れを告ぐべく參拜をした。神苑内には丹頂の鶴が金網を張つて四五羽飼つてあつた。さうして六十年ばかりの爺が鱒を賣つて居る。爺は參拜者をつかまへては、爺「皆サン、お鶴サンに鱒を献上なさいませ。一盛が一錢です」

と唼鳴つて居る。見れば小さい鯁鮎の様な鮠が、二匹浅い竹筒に水と一所に盛り
竝べてある。一錢出しては鮠を買ひ、鶴の立つて居る浅い水溜りへ投げてやると、
長い嘴をつつこんで直にとつて食ふ。鶴は目出度い鳥ぢやと聞いて居る。繪に書
いた鶴は澤山見たが、生たのは初めてなので、好奇心に驅られて一錢銅貨と交換
しては、竝べてある鮠の竹鉢を残らず鶴に與へて了つた。さうすると一方の方に
白い毛の駿馬が、足摺荒くして板の間をトントントンと叩いて居る。一寸見れば
其處にも土器に大豆の煮でたのが七八ツ皿に盛つて、

□ 一皿一錢お馬さんにおあげなさいませ

と書いてある。鶴に五杯の鮠をスツカリ與へて五錢はり込んでやつたのだから、
此馬にもやらすには居られぬと、五七三十五粒の煮豆を、白銅一枚はりこんで馬
に振れ舞ひ興に入つて居る。その時後の方から、

□ 先生々々

と呼ぶ聲が聞える。誰の事かと思ふて後を振り向くと、白髪の老人が周易の看板
を机にブラ下げ、赤毛布をかけて椅子に腰をかけ、此方を向いて手招きして居る。

見れば易者が五六人も境内の此處彼處に易斷の店を張つて居た。其老人は小林易斷所としてあつたから、大方小林と云ふ男であつただらう。その老爺がいふには、易者「先生、お前さまは丹波のお方でせう。今大坂へ出て来て神様の教を宣傳するのには、未だ時機が早い。一時も早う丹波の國へ歸りなさい。さうして十年ばかり修業を積んだ上、大坂へ布教に來られたならば屹度成功します。今は大切な時だ、輕擧盲動をしてはなりませんぞ」

と頼みもせぬのに熱心に云つて呉れる。喜樂は、

喜樂「不思議な事を云ふ易者だな、如何して丹波の人間と云ふ事が判つたのか知らぬ」

と思ひ乍ら今度此方から易者に向つて、

喜樂「先生、貴方は神さまの様な人ですな、一體何處の國でお生れになつたのですか」

と問ひかけると老易者は、

易者「俺は若い時から長らくの間、富士講と云つて淺間様の教會に這入り、富士

の山で修業をして居つたものだ。さうした處、富士講の丸山教會は、教祖の六郎兵衛サンが神罰を蒙つて悶死されてから、其教會は滅茶々に壞れて了ひ今は情ないこんな易者になつて大坂で渡世をしてるのだ。實は私は小林勇と云ふ者である。然し乍ら、これは一寸假の名だ、本當の名は再びお前に會ふて打明かす時が来るであらう。先づ達者にして修業を成さるが宜しい。これからお前サンの丹波に歸つてから十年間の艱難辛苦といふものは、今から思ふても眞に可哀相な氣がする。然し乍らこれも神様のため、世の中の爲めだから辛抱しなさい」

と云ふ聲さへも涙に曇つて居る。喜樂は思はず俯伏し、一言も發し得ず落涙に咽んで居た。暫くして頭をあげて見れば、今小林勇と云つた老易者の影は何處へ行つたか跡方もなく消えて居つた。かかる不思議に出會ふた喜樂は手を組み首を傾けて暫し茫然と佇んで居た。

「ア、今のは神様の化身ではなかつたかなア」

忘れもせない二月の九日の夜、芙蓉仙人松岡天使に高熊山に誘はれて受けた教訓、今更の如く胸に浮かんで來た。

其時の松岡天使の教訓は大略左の通りであつた。

「澆季末法に傾いた邪神の荒ぶ今の時に當つて、お前は至粹至純なる惟神の大道を研究し、身魂を清め、立派な宣傳使となつて世界に向ひ、神道の喇叭を吹き立て、世界を覺醒せなくてはならぬぞよ。今に於て惟神の大道を宣傳し、世界の目を醒ますものが無ければ、今日の社會を維持する事は出来ない。惹いては世界の破滅を招來する事は鏡にかけて見る様だ。お前はこれから神の僕となつて、暗黒世界の光となり、冷酷な社會の温暖となり、腐りきつた身魂を救ひ清める鹽となり、身魂の病を癒す藥ともなり、四魂を研ぎ五情を鍛へ、誠の大和魂となつて、天地の花と謳はれ果實と喜ばれ、世の爲め道の爲めに盡して呉れねばならぬ。眞の勇、眞の親、眞の愛、眞の智慧を輝かし此大任を完成せむとするは、仲々容易な事業ではない。今後十年の間は其方は研究の時期である。其間に起る所の艱難辛苦は非常なものだ。之を忍耐せなくては汝の使命を果す事は出来ないぞ。屢神の試にも遭ひ、邪神の群に包圍され苦しむ事もあるであらう。前途に當つて深い谷もあり、劍の山や、血の池地獄や、蛇の室、蜂の室、暴風怒濤に苦しみ、一命

の危あやふい事ことも屢しばしばあるであらう。手足てあしの爪つめ迄まで抜ぬかれて、神かむ退やらひに退やらはれる事ことも覺かく悟ごして居をらねばならぬ。さり乍ながら少すこしも恐おそるには及およばぬ。神かみ様さまを力ちからに誠まことを杖つゑに猛まう進しんせよ。如何いかなる災さい害がいに遭あふとも決けつして退たい却きやくしてはならぬ。何なに事ことも皆みな神かみの御ご經けい綸りんだと思おもへ。一時いちじの失しつ敗ぱいや艱かん難なんに出で會あふた爲ために、神かみの道みちに遠とほざかり心こころを變へんじてはならぬ。五み六ろく七しちの神かみの御み心こころを、生いのち命のちの續つづく限かぎり遵じゆん奉ほうし、且かつ世せ界かいへ擴くわく充じゆうせよ。神かみ々がみは汝なんぢの身みを照てらし、汝なんぢの身しん邊へんに附つき添そふて、此この使し命めいを果はたすべく守まもり玉たまふであらう。特とくに十じふ年ねん間かんは最もつとも必ひつ要えうな修しう業げふ時じ代だいだ

との嚴きびしき神しん示じは深ふかく腦なう裡りに刻きざまれてあつた。其そ處こへ今いま又また小こ林ばやし勇いさむと云いふ不ふ思し議ぎな老らう易えき者しやより同おなじ様やうな教けう訓くんを受うけたのは實じつに不ふ思し議ぎであつた。

これより社しゃ前ぜんに額ぬかづき、拍はく手しゆ再さい拜はいし天あま津つ祝のり詞とを奏そう上じやうし、社しゃ内ないを退しりぞき懷ふと淋こさしきま
ま、天てん滿ま橋はし詰づめの空くう心しん町まちの實さね盛もり餌もちを目め當あてに尋たづねて行ゆく事こととした。

(大正一一・一〇・一〇 舊八・二〇 北村隆光録)

第一四章 夜の山路（一〇二六）

喜樂は懐淋しく、何となしに力落ちがして愈歸國の途に就かむとした。一度空
心町の齋藤の家に暇乞ひに立寄つて見ようと思ひ、再び訪れると、佐市夫婦を始
め、四年以前に一寸悶錯を起して別れた娘が折よく来て居た。お繁婆アさんは粹
を利かして、狭い内だけれど今晚は泊つて歸れと云ふ。そこへ十六七の富野とい
ふ妹が居るので、僅四疊半の間で、五人が雑魚寝することとなつた。姉娘のお秋
といふのが夜の十時頃に、ガラガラと車でやつて来て、何だかブツブツ小言を云
ひ乍ら、「おいの」といふ女を合乗りで連れて歸つて了つた。油揚を鳶にさらは
れたやうな気分、喜樂は舌打ちし乍ら眠に就いた。併し乍ら此時の喜樂は一切
の情欲に離れ、只信仰一點張に酔つ拂つて居た時だから、昔の女に出會ひ一閒に
寝た所で、別に舊交を温めようとも何ともそんな考へは持つて居なかつた。乍併
何となくなつかしいやうな氣がして、其女と同じ家に一宿することを嬉しく思う
て居たのである。

夜は容赦なく更け渡る。四人は何時の間にか安々と眠りについて了つた。

永き春日も稍西に傾いて、淀の川水に金鱗の光を流す、水瀬も深き浪速湯、水の都の天神橋の上に立つて、首を傾け思案にくれてゐた。巽の方を見れば、山嶽の如く巍々として築き上げられた、宏壯雄大なる大坂城が水に映つて、蕘がキラキラと西日に輝いてゐる。喜樂は之を見て感に打たれ、獨言を云つてゐた。

「あゝ人間の運命といふものは不思議なものだ。二百八間の矢矧の長橋に菰を纏うた腕白小僧の藤吉郎も、忍耐勉勵の功空しからず、登龍の大志を達成し威徳赫々として、旭日東海の波をけり、躍り出でたるが如く、遂に六十餘州の天下を掌握し、三韓を切り従へ、大明王を驚かせ、萬古不朽の偉業を後世に傳へた。話に聞くも實に心持よき英雄である。豊太閤だとしてヤツパリ人間の生んだ子だ。彼も亦同じ百姓から生れた人間だ。豊太閤の幼時の境遇は、又喜樂の當時に酷似してゐる。矢矧の橋ならぬ天神橋の袂、自分も此處で一つ何か思案をせなくてはなるまい。折角無理算段をして持つて來た旅費はいつの間にか、煙の都の煙と消えて了

ひ、何一つ持つて歸るべき土産もない。精神一到何事か成らざむや、吾れも太閤の成功位に甘んじては居れまい。神を力に誠を杖に、五六七神政の基礎を固めねばならぬ」

と往來しげき橋の上にて、吾れを忘れて雄健びなしつつ、空想にからるる一刹那、ドンと突當つた十二三歳の子供があつた。喜樂は驚いて其子供の顔を見つめてゐる。あとより息せき切つてかけ來る三十前後の番頭風の大男有無をいはず子供を引摺み、打つやら、蹴るやら、亂暴狼藉を恣にしてゐる。子供は悲鳴をあげて、泣き叫ぶのを、物見高い大坂人の常として、忽ち橋の上は三人、五人、十人と立止まり、往來止めの姿と變つて了つた。番頭風の男は尚も續いて手首を無理に固く執り、腕もぬけむ計りに引張り乍ら、男「一寸警察迄出て來い！」

と引きずつて行かうとする。喜樂は見るに見かねて、喜樂「モシモシ暫く待つてやつて下さい。どんな悪いことをしたか知りませぬが

……」

と言はせも果てず、男は言も荒々しく、

男「お前は田舎下りの旅人、構うてくれな。此奴ア「チボ」の玉子だ。今店先に

あつた寶母散を一服かつさらへ、逃げ出してうせたツ太き小僧だ。今後の戒めに

橋詰の巡査に引渡すのだ」

と鼻息あらく、エライ權幕で睨みつける。子供は藥の包をそこへなげ出し、兩手

をつき、涙乍らに泣きわびるいぢらしさ。喜樂は此子供もウブからのチボではあ

るまいと思ひ、大の男に向つて言葉を叮嚀に、子供に代つてあやまり、子供の言

ふことを聞訊してみれば、

子供「私の母は永らく子宮病とかに罹つて苦み最早生命も危うなつて居ります。

貧乏の爲に藥を買ふことも出来ず、お醫者さまに診て貰ふことも出来ないので、

居乍らお母アサンの死ぬのを見るに忍びず、日々エライ心配をして居りましたが、

隣の人の話によると、女の病には寶母散を呑んだら、キツと全快すると聞いて、

俄に其藥が欲しくなり母を大事と思ふ一念から、後前の辨へもなく藥屋の店先に

あつた寶母散を一服持つて逃げて來ました」

と語り了つて、ワツと計り其場に泣き倒れた。孝行息子の心にほだされて、喜樂も思はず知らず貰ひ泣きをし乍ら、懷を探つて五十錢を取出し、喜樂「此藥を私に賣つて下さい、そして子供の罪を許してやつて下さい」

といへば、大の男は面をふくらせ乍ら、

男「此奴は許し難い奴だが、今日はお前に免じて忘れてやるから今後はキツと愼め！」

と口汚く罵り、一服十錢の藥に五十錢を引つたくるやうにして受取り、ツリをも拂はず肩を怒らして歸つて行く其無情さ。血も涙も通はぬ男かなと、怒りの色を現はして、歸り行く男の姿を齒ぎしりし乍ら見送つて居た。

草枕旅にし出でて悟りけり

空恐ろしき人の心を

大坂と云へば日本三大都會の一つ、商業發達の大地で七福神のみの樂天地と思

うて居つたのに、今日いまのあたり貧兒ひんじの境遇きやうぐうを見聞みききして、どこへ行つても、ヤツパ
リ秋あきには秋あきが来る、冬ふゆはヤツパリ冬ふゆだ、暗黒界あんこくかいは鄙も都みやこも同じおなものだと溜息ためいきつく
つく、「ア、ア、ア」と歎なげいた聲こゑが、側そばに寝ねてゐるおしげ婆ばアサンの耳みみに入り、
「コレコレ喜樂きらくサン、何寢言なにねごとをいつてるのだ」
とゆすり起おこされて氣きがついてみれば、狭せまい餅屋もちやの四疊半よでふはんに眠ねむつてゐた。今いまの橋はしの
上うへの夢ゆめの中なかの出來事できごとは神かみさまの御心みこころによりて、喜樂きらくの心こころを鞭撻べんたつし、郷里くりにに一人ひとりの
母ははや、老祖母らうそぼのあることを思おもひ出いださしめ、早はやく歸國きこくさせむとの計はからひなりしこと
が後日ごじつに至いたつて感かんじられた。

易者えきしやの言葉ことばに勵はげまされ

丹波たんばの國くにへ歸かへらむと

心こころの駒こまに鞭むちうつて

車くるまも呼よばずトボトボと

梅田うめだの驛えきにつきにけり

仕度したくなさむと懷中くわいちゆうを

探さぐりてみれば情なさけない

殘のこりの金かねは二錢半にせんはん

汽車きしやはあれ共乘どもるすべも

何なんと線路せんろの眞中まんなかを

一直線いつちよくせんに膝栗毛ひざくりげ 腹はらも吹田すゐたのうまやぢの
 茶店ちやみせにひさぐ蒸むし芋いもは 栗くりより甘うまい十三里じふさんりの
 道程みちのり一歩いっぽ又一歩またいっぽ 茨木町いばらぎまちを北きたに取りと
 丹波たんばをさして歸かへり行ゆく 頃ころしも四月しぐわつ十五夜じふごやの
 月つきは東ひがしの山やまの端はに 丸まるき面おもてをあらはして
 ニコニコ笑えませ玉たまへ共ども 夕ゆふべの空そらの何なんとなく
 心こころ淋さびしき一人旅ひとりたび 東ひがしも西にしも南なん北ぼくも
 知しる人もなくなく山路やまみちを 空そらの月つきかげ力ちからとし
 一度いちど通りしおる覺おぼえの 山やまと山やまとの谷路たにみちを
 どこやら不安ふあんの心地こころにして 岐路きろある所ところに停立ていりつし
 首くびをかたぐる時ときも時とき 忽たちまち前まへに現あらはれし
 怪あやしき白衣びやくいの旅人たびびとは 四五しごけん間ま先さきへ立たつて行ゆく
 喜き樂らくが進すすめば彼進かれすすみ 立たち止とどまれば又また止とどまり
 モウシモウシと聲こゑをかけ 呼よべど答こたへぬ白しろい影かげ

或は現はれ又は消え

變幻出沒不思議なり

二股道に現はれて

又もや案内をする如し

怪しみ乍らも力得て

足を運べど空腹と

疲れの爲に進みかね

眠けの鬼におそはれて

街路に轉倒し乍らも

眠たさ恹へて歸り行く

西別院の村外れ

下り坂にとさしかかる

水さへ音なき丑の刻

道の片方の細谷川を

隔てて狭き墳墓あり

六地藏さまを祀りたる

小さき屋根が見えてゐる

ここにて雨露を凌がむと

厭らし墓と知り乍ら

天の與へと喜びて

六體竝んだ石地藏の

しりへに身をば横たへて

手枕したままグウグウと

華胥の國へ上りゆく

あゝ惟神々々

御靈幸はへましますよ。

あたり寂然として静まり返る時しもあれ、夢か現か幻か、吾枕頭に近く聞ゆる女の忍び泣く聲、幽かに耳に入ると共にフと目をさませば、喜樂は六地藏の後に横たはつてゐることに氣が付いた。

喜樂の頬に、冷たい水のしぶきがかかる。キツと目をあけて見れば六地藏の前に餘り背の高くない、横太い怪しい一人の女が、赤ん坊を背に負ひ乍ら、土瓶のやうな物を片手に提げ、石地藏の頭から、『南無阿彌陀佛』といひ乍ら、冷たい水をかけて、何事か切りに、石地藏に訴へてゐるやうである、喜樂は轟く心臓の鼓動を強て鎮壓し、息を殺して伺ひ居れば、怪しき女の影は一步步とゆるぐが如く、しづしづとして新しい墓の前に到り、マツチをすり蠟燭を點じ、合掌し乍ら泣き聲になつて、伏し屈んでゐる。石地藏の立つてゐる隙間から、此様子を覗きみた喜樂は俄に恐怖心かられ、頭の毛はちぢみ、體はふるひ出し、寸時もここに居たたまらず、厭らしさに此場を逃げ出さうかと思つたが、腹の底から小さい聲で、『待て』と云ふやうに聞えて來た。此聲に自分は再び胸をすえ、直日に省りみることを得た。……喜樂は顯幽兩界の救濟者たらむとする靈學の修業者で

ある、今幸ひにして斯の如き怪靈に出會し、研究の好材料を得たのは全く神さまの御心であらう。よく考へて見れば天が下に素より妖怪變化のあるべき筈がない、何れも皆心の迷ひから怖くない者が怖くなつたりするのである。何でもない者を妖怪變化だと思つて、昏迷誑惑其度を失はむとしたのは、何たる卑怯であらう。長途の旅にて心身疲勞の結果、こんな妄想に陥つたのではあるまいか……と、キツと心膽を据え、目を見はれば妖怪でも幽霊でもなく、田舎婦人が何事か急の出来事の爲に、此眞夜中に亡き夫の墓に參つたのであるらしく、稍久しく祈つた後、
□南無阿彌陀佛□と力なげに口ずさみ乍ら、ヨボヨボと元來し細谷川を渡つて、其姿は木立に紛れて見えなくなつて了つた。

女の姿の消えしより、喜樂も亦俄に恐ろしくなつて來た。永居はならじとソロソロ立上り、頬かぶりをなし、尻をひつからげ、コワゴワ溪流を渡り、山路に出でたる一刹那、

□怖いッ！□

といふ子供の叫び聲が、つい足許に聞えて來た。喜樂は此聲に二度ビツクリし乍

ら、

何にも怖いことはない、俺は人間だ！

と呼ばはりつつ後ふり向きもせず、一目散に足の痛みも忘れて、法貴谷の方へと走せ歸るのであつた。

(大正一一・一〇・一〇 舊八・二〇 松村眞澄録)

第一五章 盲目鳥(一一〇二七)

五月雨の空低うして、四邊の山は雲に包まれ、杜鵑の鳴く聲遠近に聞える、穴太宮内垣の賤が伏家も、今は犬の手も人の手と稱する田植の最中、片時を争ふ農家の激戦場裡で、遠近の人々は植付、麥刈などに忙殺されて、教の門を潜る人々の足も杜絶えた折柄、身なり賤しい一人の婦人、兩眼のあたりを白き布にて繃帯し乍ら、杖を力に、

「先生はお在宅ですか？」

と尋ねて来た。婆アサンが案内とみえて、一人付いて居る。此頃は参拜者がないので、神殿に於て心ゆく迄、幽齋の修行にひたつて居た喜樂は、此聲を聞いて、

「マアマア」

と狭い座敷へ通し、來意を問へば、眼病を治して欲しいので、はるばる参拜したとの事であつた。どことなく何時かは見たことのある様な女と、訝かり乍ら住所姓名や、來歴を問うて見た。女は恥かしげに顔を赤らめ、稍俯むき氣味になつて語る。

「私は西別院村の小末と申す者で御座います。見るかげもなき貧乏人で、屋根はもり、壁はおち、明日の糧を貯ふるの餘裕もなき貧しい暮しの中に、私の夫は長の病になやまされ、私は産婦の重き身の上、働きすることさへも叶はねば、朝夕の糊口に差支へ、錢となるべき物は賣り拂ひ、質におき盡くして、今は最早何ものなき極貧の身の上、醫藥の手だてさへなく、夫は無殘にも死を待つより仕方のない身の上となりました。草根木皮を食ひ、一時の命をつないで居りましたが、何

の因果か、夫婦の體は水腫れを起し、夫は遂に幽界の人となつて了ひました。取
りのこされた私は、まだ出産後僅に一週日、血の若い身で、赤兒をかかへて、形
許りの弔ひをすませ、さむしい日をおくる内にも、村の人達の無情さ、米屋は米
代を拂へとせめてくる、醤油屋は醤油代を渡せときびしい催促に、如何すること
も出来ませず、一層の事私も夫の後を逐ふて此世の暇乞ひをせうかと思案に沈み
乍ら、五つになつた先妻の子や、一人の赤子の愛にひかれて、死ぬことも出来ず、
心弱いは女の常とて、何の考へもなきまま、大坂に嫁入つて居る姉を便つて一時
の急場をのがれやうと、去る日の夜中頃、赤子を背に五つの子の手を曳いて、吾
家を後に山路を辿り、出て行きました、其途中、亡夫を葬つた墓が御座いますの
で、暇乞の爲に立寄り水を供へ、幸ひ傍に人影もなければ、心の行く丈愚癡の繰
言をくり返し、心を残して墓場を立去る、時しも夫の墓の畔から現はれ出でたる
怪しき物かげに、思はず知らず母子は聲を揃へて泣き叫びました。不思議にも其
怪しの人影は、夫の亡靈であつたか、何だか分らぬことを大聲に叫び乍ら、吾家
の方へ走せ行きました。そこで私の思ひますには、墳土まだ乾かず、五十日もす

まぬのに夫の墓の土地を離れむとしたのは誠にすまぬことであつた。夫の靈は私等の大坂へ行くのを嫌うて居るのであらうと心を取直し、力なげに再吾家へ歸つて來ました。其時の驚きが災禍となり、遂に斯の如く兩眼を失ひ、其上晝夜疼痛に苦しむこと限りなく、一人の赤子も亦十日以前に、乳のとぼしい勢が身體が瘦衰へて、亡き人の數に入りました。先妻の子は私が盲になつたので親類が預つてくれました。私は最早夫や子に別れ、此世に生きて何の望みもありませぬから、せめては夫や吾子の靈を弔うて、善根を盡くすより途は御座りませぬが、何をいうても盲目の不自由な身の上、どうぞお助け下さいませ」

と涙を流して泣き叫ぶ。此物語の始終を聞いた喜樂の心は、一節一節胸に釘鎚を打たるる如くであつた。あゝ心に當るは過ぎにし春の月の夜半の出來事、大坂より歸りの途次、眠けにたへずして、とある墓場に石枕、計らず會せし妖怪變化と疑うた影は、正しく此婦人であつたか、逐一事情をきくにつけ、氣の毒にも此女が眼病にかかつた原因は、自分が突然墓から逃出した其姿を見て、亡き夫の幽靈と誤解し、驚愕の餘り、若血の身の上とて逆上して目にあがつて、こんな不具者

となつたのであるか、吁氣の毒だ。何とかして生命に代へても此眼病を直してやらなくては、神さまに對して濟まない。又自分の責任がすまぬと、直に荒蕪を大地に布き、井戸端に端坐して、頭からザブザブと水ごりを取り、拍手再拜祈願の祝詞を奏上し、一心不亂に勤行した。其至誠に畏くも神明感じさせ玉ひけむ、今まで苦痛に悩みし兩眼の痛みは忘れた様に鎮靜し、あたりをじつと見まはし乍ら、思ひがけなき此世の光明に飛び立つ許り打喜び、

先生お蔭で目があきました。ア、勿體ない辱ない！

と伏し拜む。此場の奇瑞に祈願者の喜樂も打驚き、即時の靈驗と、又不思議の邂逅に、神界の深甚微妙なる御經綸に敬服したのである。

此女は石田小末といふ。これより幽齋を日夜に修業し、神術大いに發達し、遂に小松林、松岡などの高等着族の神靈懸らせ玉ひて、いろいろ幽界の有様を表示し、其後百餘日の後再び大坂の姉の家に行かむと、喜樂に別れを告げて出て行つた儘である。

大本の神の教を傳へむと

山路遙に越ゆる津の國。

浪速江のよしも悪きも神術と

知らずに下る淀の流れを。

千早ぶる神の教を畏みて

駒立て直し元の丹波へ。

足曳の山路を夜半に辿る身は

御空の月ぞ力なりけり。

ゆくりなく巡り會ひたる嬉しさに

誠の神の恵悟りぬ。

惟神神の御靈の幸はひて

此物語世にてらしませ。

(大正一一・一〇・一〇 舊八・二〇 松村眞澄録)

第一六章 四郎狸（一〇二八）

稲の植付けも出来上がり、麥【かち】をしようと庭一面に麥を擴げて日光に乾かして居た。其日の十一時頃三人の男が、

「喜樂サンは在宅ですか」

と尋ねて來た。此頃は麥【かち】と田植とで餘り參詣者も無いので、麥【かち】を手傳ふ積りで農夫の姿となつて、朝早くから麥を田圃から運んだり擴げたりして居たのである。其處へやつて來た三人の男は、旭村の印地と云ふ處の岩田彌太郎、射場久助、入江幸太郎であつた。

其用向きは岩田彌太郎の妻のお藤と云ふのが、二三月前から靈感者となり、一日に飯を五六升も炊いてケロリと平げ、酒の三升も缺かさずに飲み、養蠶を手傳ひ乍ら、折角大きくなつた蠶の蟲を、片端から抓んで喰べると云ふ厄介な者である。然し乍ら、

「此方は白木大明神だ」

と云つて、妙な目を剥いて色々な指圖をする。種々の病人が此お藤の祈祷や指圖した薬によつて誰も彼も全快するので、それが評判となつて朝から晩まで小さい家の中に、参詣人がつまつて居たのである。其隣村に黒髪大明神と云ふ、稻荷を祀つた教會があつて、其お臺サンと云ふのが五十計りの婆アサンであつた。其婆アサンが、岩田藤が山子を始めて人を誑らかすとか云つて交番へ届けたので、巡查がやつて来て、

「許可なしに貴様の内へ人を寄せたり薬の指圖をしたりする事はならぬ」と八釜しく云つて来る。されども岩田藤は靈感者の事とて、誰が何といつても聞き入れず、ドシドシと託宣をしたり祈祷をしたり、薬の指圖をやつて居る。さうして相變らず毎日大酒を飲み、大飯を食ひ、折角巢につきかけた蠶の蟲まで片端から掴んで喰ふので、三人の男が何とかして鎮めて貰ひ度いと相談の結果、田植が濟んだ其休日を利用して喜樂を頼みに來たのであつた。

喜樂は直に神主の小末に命じて、印地の岩田お藤の家や容姿を透視せしめた。其結果其家の瓦葺である事、疊數が何枚ある事、蠶の棚が何枚竝んで居る事、お

藤の顔に痘痕のある事、家の少し横に氏神の社がある事、裏の方には五六間幅の水の無い川があつて其兩方の堤に竹藪のある事等をスツカリ透視して了ひ、三人に其由を告げると、三人は互に顔を見合はせ、

「如何にも其通りで御座います。神様は實に尊いもので御座いますなア」

と感嘆して居た。そこで喜樂は三人の頼みを容れ、神主の小末を従へ五人連れで、晝飯を濟ませ炎天の夏の日を浴び乍ら、吉田、小林、小川、川關、八木の大橋を越え、其日の三時頃漸くにして岩田藤の宅に着いたのである。

行つて見れば數十人の參詣人が座敷に坐つて居た。岩田藤は門口に出で迎へ夫の彌太郎に向ひ小聲で、

「彌太やん、喜樂サンは居やはりましたか」

と尋ねて居る。彌太郎は喜樂から、

「留守だつたと云へ、さうして神憑りが俺を喜樂だと云ふ事を知つてるか如何かを調べる必要があるから途中で小林の人が拜んで貰ひに來られたのだと云ふが宜

い」

と教へられて居たから、彌太郎は故意と恍けて、

彌太「折角行つて来たけれど、喜樂の先生は留守だつた。エー、仕方がない」

と力なげに首を頷垂れて見せた。お藤は喜樂の八の字髭を見て巡査と思ふたか、

小聲で、

お藤「彌太ヤン、あの人は巡査ぢやないかい」

と心配さうに尋ねて居る。彌太郎は、

彌太郎「いや、あのお方は小林の井筒屋に泊つて御座る段通屋サンで、俺がお前

の神憑りの話をしたら大變賛成して、俺も一つ商賣上の事や身體の病氣の事を伺

つて貰ひ度いと云つて跟いて御座つたのだ。さうしてあの獨眼の太い女サンは井

筒屋の女中サンだ」

と甘く胡魔化して居る。お藤は別に疑ひもせず、

お藤「アーさうかい。そんなら之から神様にお願ひします」

と云ひ乍ら、御神殿に向つて拍手し、片言交りに神言を奏上し始めた。神言の半

分あまり進んだ頃から俄に聲がかすり出し、「ガアガア」と驚の様な言靈の調子

になつて来た。喜樂は、

喜樂「何と言靈の濁つた女だ。大方狸が憑いて居るのだらう」

と思ひ乍ら、大勢の中へ紛れて小末に彼の守護神を透視させ乍ら、素知らぬ顔し

て控へて居た。祝詞が終るとお藤は「キリキリキリ」と大きな齒ざしりをし、團

栗の様な目を剥いて、時々舌をチヨ口チヨ口出し乍ら、クレリと神壇を後にし、

参詣人の方へ向き直つた。誰が見ても人間の顔とは見えない、狸其の儘の面相に

なつて居る。お藤は自分の姿を見て俄に態度を改め、両手をついて、

お藤「これはこれは喜樂先生で御座いましたか、私は稻荷山の一の峰に守護致す

白木大明神で御座います。今日は麥「かち」をなさるお考へで御忙しうして御座

る中へ、彌太郎外兩人がお邪魔を致しまして偉い御馳走に預かりました。能うま

あお越し下さいました。私は彌太郎の後について貴方のお宅迄参りました。それ

故小林の井筒屋で御休息の時、私を審神する爲めに彌太郎にいろいろ仰有つた事

も、チヤンと聞いて居ります。何卒私に神名を下さしまして、神界の御用が出来

ます様に、大神様にお取次をお願い致します」

とキリキリキリと又もや猛烈な齒ぎしりをする。數十人の參詣者はお藤と喜樂に視線を集中し、息をこらして見詰て居た。小末は、

「ウン！」

と一聲飛び上がると共に、忽ち歸神状態になつて了ひ、

小末「其方は稻荷山の眷族白木明神と申して居るが、眞赤な詐りであらうがな」
お藤「いえいえ決して嘘は申さぬ。稻荷山の白木明神に間違ひは御座りませぬ。

とつくりと調べて下されよ」

と切口上になつて力んで居る。

小末「詐りを申すな。其方は能勢妙見の新瀧に守護致す、四郎右衛門と申す狸であらうがな」

と目星を指されてお藤の憑靈は閉口し、

お藤「ハイ、もう斯うなる上は仕方が御座いませぬ。何卒私に何とか名を下さいまして、人助けをさせて下さいませ。何も彼も白状致しますが、實は私は丹波の國多紀の郡村教會に守護致す、四十八匹の狸の親分で御座いましたが、

喜き樂らく先生せんせいの前まへではチツと申まをし上あげかねる事ことなれども、斯かうなれば仕しか方たがありませぬ。何なにも彼かも白はく状じやう致いたします。私わたしは御ご存ぞんじの通とほり四し郎ろう右ゑ衛もん門まをと申まをす狸たぬきで御ご座ざいます。が、大おほ勢ぜいの人にん間げんに憑うつつつて色いろ々いろの病やまひを起おこさせ、醫い者しゃの藥くすりを服のませて試し験けんを致いたしました。それ故ゆゑ此この病びやう氣きには此この藥くすりが利きくと云いふ事ことをよく知しつて居あります。靈れい界かいの醫い者しゃにならうと思おもつて、澤たく山さんの人ひとの身からだ體たいを稽けい古こに使つかひ、人にん間げんの生いのち命ちを二ふた人たりまで過あやまつて了しまひました。其その罪つみによつて 教けう會くわいの守しゆ護ご神じんの役やくを剥はく奪だつされ、只ただ今いまは悲かなしき浪ろう人にんの身み上うへ、誰たれかよき臺だいがあれば憑うつつつて人ひとを助たすけ、自じ分ぶんの罪つみを亡ほろぼし神しん界かいへお詫わびを致いたさうと、良よい神かむ懸がりの臺だいを考かんがへて探さぐして居ある中うち、此このお藤ふぢの肉にく體たいが石せき炭たん山やまへ石いし割わりに行いつて酒さけに食くらひ酔よひ、山やまにぶつ倒たふれて居あり其その隙すきを狙ねらひすまして、とりつきました。此この肉にく體たいを使つかふて一ひとつ思おも惑わくを立てようと思おもひますから、何どう卒ぞ私わたしに名なをお與あたへ下くだされ。又またお藤ふぢの肉にく體たいにも、それ相さう當たうの役やく目めを仰おほせつて下くだされままする様やうにお願ねがひ致いたします。』

と四し郎ろう右ゑ衛もん門まを狸たぬきは自じ分ぶんの懺ざん悔げ話わを諄じゆん々じゆんと述のべ立て、顔かほ一いち面めんに涙なみだを漲みなぎらし兩りやう手てをついて頼たのみ込こむ。何なんとはなしに喜き樂らくも可か哀あい相さうな氣きがして來きた。

喜樂「お前サンは今二人の人を過つて殺したと云つたが、それは何と云ふ人だ。

差支がなければ聞かして貰ひ度いものだ」

四郎狸「ハイ、仕方がありません、何も彼も白状しますが、教會の教導職お

鶴サンと云ふ女教師の腹に這入り、種々と病氣の試験中頭お鶴サンは死んで了

ひました。それから外に、も一人、これは小さい子供で御座いました。先生様の

お身の上に關係のない事ですから、此人の名だけは御免を蒙りませう」

喜樂「教會のお鶴サンは俺の従妹であつて叔父の女房だ。それをお前は知つ

て居るのだらうなア」

四郎狸「ハイ、それだから貴方に神界にお詫をして頂き、罪を許されて天晴れ元

の神の座へ復らして貰ひ度いので、態々彌太郎や久助サン、幸太郎サンを先生の

お宅に頼みにやつたので御座います。改心の證に今此處で證據を見せます」

と云ふより早く、コンコンと二回ばかり大きな咳をした。其機に眞白毛の毛玉が

飛んで出た。よくよく見れば其毛玉は自由自在に動いて居る。風が當つて動くの

ではなからうかと思ひ、直に硝子蓋のしてある箱の中へ入れて見たが、毛玉は矢

張り左右へ自由自在に動いて居る。大勢の者が寄つて集つて毛玉を不思議相に眺めて居る。四郎右衛門狸は口を尖らし、四郎狸「早く白粉を其毛玉にふりかけて下され。弱ります」
と嘆願してる。お藤の使ふ白粉を彌太郎が探し出して、白い毛玉にブツかけてやつた。毛玉は硝子箱の中心に坐を占め、幾萬とも知れぬ細い毛を前後左右に動かして居た。

其夜は射場久助の家に泊めて貰ひ、岩田藤に修齋を與へ、二人連れ立つて穴太へ歸つて見ると、四五人の修業者を巡査がやつて来て交番所へ引張つて去のうとしてる處であつた。さうして御嶽教の太元教會の杉山某と云ふ男が其處に立つて居る。喜樂は巡査と杉山に向つて種々と靈學上の議論を闘はし、漸く巡査は納得して無事に歸つて行つた。

此杉山と云ふ男は元は金岐の隠亡であつて、村の戸長を勤めて居た男であつたが、明治十六年の旱魃で、御嶽教の山下と云ふ行者が、龜岡の餘部へやつて来て雨乞をして、雨を降らすと二週間の斷食を河原の中でやつた。けれども雨はあま

り足りになる程降らなかつたが、二週間の上りにバラバラと降つてきたのは事實である。其時に、餘部の或家の女房で、高島おふみと云ふ若い女が、山下某の神徳に感じ、毎晩川へ行つて水行をやつて居ると何時の間にやら體が震ひ出し、

「此方は稻荷大明神だ！」

と喋り出した。それから餘部のお稻荷サンと云つて、四方八方から參詣する者が出來て來た。其時に參拜したのが杉山藤五郎と云ふ男であつた。此男は相當に學問もあり財産もあり、人格もあまり悪くない。何時も高島ふみの教會へ通ふて受付等をやつて居たが、知らぬ間に妙な仲となつたのを、ふみの夫が嗅つけ、

「ド狐もつて出て行きさらせ」

と一言の許に放り出され、二人はそれより天下晴れての夫婦氣取りで、同じ餘部の町へ宏大な家を借り、そこへ稻荷サンを祀つて附近の信者を集めて居た。然るに今度喜樂が、あまり遠からぬ穴太で伺ひや祈禱をやり出したので、此教會へうつつを抜かして通ふて居た信者が残らず穴太へ集まるので、何とかして叩き潰してやらうと考へ、駐在所の巡査を説きつけてやつて來たものである。

喜樂も三四年以前から父が病氣なので、祈禱して貰つたり伺つて貰ふ爲めに高島ふみの教會へチヨコチヨコ通ひ、杉山とは餘程懇意になつて居たのである。けれども杉山は高島ふみに唆されて、穴太の喜樂を何處かへやつてやらうと企んで來たのであつた。餘部の太元教會には服部某と云ふ男が受付をして居た。明治二十九年の春の事であつた。春季大祭が行はれると云ふので早うから參拜して見ると、服部某が只一人、玄關口に酒をチヨビリチヨビリ飲み乍ら控へて居た。一見して五十七八か六十二三位に見える爺サンである。喜樂は、喜樂「服部サン、お早う。今日はお祭りぢやさうで參拜しました」と云ふと、服部は目をちらつかせ乍ら、服部「あゝ喜樂サンか、ま一杯やりなさい。此處の祭は午後一時と云ふのだが、皆遠い所から參るので如何しても四時頃にならぬと始まらぬ。杉山サンも高島おふみサンも朝早うから世話方の家へ奔走に行つたので留守だが、稻荷サンも宜い加減なものだぜ。……喜樂サン、お前サンも宜い加減に目を醒ましたら如何だ。尻に狐の尻尾を結びつけて羽織の裏からチヨイチヨイ出し、本當の稻荷サンが憑

つて來られた様に誤魔化すので、本氣に拜む氣になりはせないわ。阿呆らしい、朝から晩まで椀給でこき使はれて堪つたものぢやない。お神酒だといつて一升買ふて置きやがったから、お神酒徳利に水を入れて、酒は此通り俺が飲んで居るのだら

と何から何まで祕密を素破抜いて居る。喜樂は、

……マサカそんな事はあるまい。服部奴が不平のあまりこんな中傷讒誣をするのだらう……と思ひ乍ら、辨當を出して食ひ祭典の時の至るのを待つて居た。

(大正一一・一〇・一〇 舊八・二〇 北村隆光録)

第十七章 狐の尾(一一〇二九)

暫くあつて御臺サンと稱する高島ふみ子は、總務格兼良人なる杉山氏と共に歸つて來た。服部と云ふ爺は驚いて、俄に徳利を股にかくす。杉山は喜樂の姿を見

て、嬉し相に笑ひ、笑顔を作り、杉山「あゝ喜樂サン、能う来て下さいました。今日はあなたに一席の講演を願はねばなりません。御存じの通り信者が澤山殖えまして、何時までもこんな不便な家を借つて居る譯にも行きませぬ。どつかに新築をしたいと思ひますがそれに就いては一寸三千圓許り必要なので、今寄附帳を拵へて、各自に手分けをなし、世話が寄附金募集に歩かうと相談の纏まつた所で御座います。就いては私が教會建築の話をするのも何だか面白くありませんから、一つあなたが私に代つて演壇に立つて下さいませぬア」

と云ふ。喜樂は其時はまだ二十六歳、父の病氣が治して欲しさに信仰をして居たのだから、神様の事なら何でもいと云ふ氣になつて居た。そこで直に承諾の旨を告げ、教會の仕様書や設計などを見せて貰ひ、祭典がすめば一場の演説を試みようとし心ひそかに腹案を作つてみた。高島ふみ子、杉山の兩人は非常に喜び、丁重な料理を取よせて、奥の間で響應してくれた。服部は眞赤な顔をし、フリーと苦しさを息をし乍ら、高島の前にやつて来て、

服部「今世話方衆が見えました。やがて信者も追々集まりませうから、世話方に
夫れまで酒を呑んで貰ひませうか」

高島は小聲で、

高島「世話方なんと云つた所で、いつも出て来て酒をのむ許りで何にもなりやし
ない」

と云つたのを、服部は聞きかじつて、巻舌になり乍ら、

服部「ナ、何がイ、稲荷のお臺サン、キ、狐サン、役に立たぬのだ。朝から晩ま
でおめし給銀でこき使はれて居るのだから、たまたま一升位酒を飲んだつて、ゴ
テゴテ言ひなさるな」

高島「コレ服部サン、ソリヤ何を言つてみなさるのだ。早う御世話方にお酒でも

出して叮嚀にあしらうて下さい」

服部「今日は神様の一年に一度の春季大祭だから、私が神さまの御神酒を頂いた
位で、ゴテゴテ言ひはしませぬだらうな。實の所は學校の小使に使うてやらうと
云ふ人があるのだけれど、お前サンが怒つて、狐でも使ふて「あたん」でもする

と困るから、そんな事アおけと友達が言ふてくれるので、辛抱して居るのだが、今日はモウ喜樂サンが来て居るのだから、狐の尾丈はやめなさいや」と言ひ乍ら、ヒヨロリ ヒヨロリと玄關口の方へ走つて行く。

いよいよ午後の三時過になると、ボツボツと參詣人が集つて来て、牡丹餅や菓子、米、包み物、小豆、豆など澤山に供へられ、いよいよ午後四時を期して祝詞が始まり、神殿の前で護摩をたき始めた。五寸許りに切つて割つた木切れに、一々姓名や年齢を書き記し、それを高くつんで、大きな鍋の中で、火をつけてもやす、其上には幣が切つてぶら下つてゐる。杉山を始め服部其他澤山の世話方は、お鍋で作つた火鉢のぐるりから、祝詞を一生懸命に稱へる。火はポーポーと音を立ててもえる。アワヤ上に吊つた御幣に火が燃えつかうとすると、水の垂るやうな柵をポツとくべて火を防ぐ、又燃上らうとすると柵の葉をくべる、それでも火はだんだんと烈しくなつてくる。高島ふみ子は例の神憑りになり、羽織のあひからちヨ口チヨ口と赤い色の狐の尻尾を見せながら、御幣をふつて、烈しく燃え上がる火の中へ突き出し、上から吊つた御幣に延焼せむとするのを防ぎつつ、其幣を又

もや信者の頭の上に左右とふる。すみからすみまで、百四五十人の頭の上を一つ一つ御幣でしばいてまはる、護摩の火はだんだん高くなり、アワヤ吊り下たフサフサとした御幣に燃え移らうとする危険に迫ると、四五人の世話方が一割大きな聲で、シヤクル様に祝詞を上げる、それを合圖に高島ふみ子は榊の青葉に括りつけた御幣を、あわてて火と吊幣との間にグツとつき出し延焼を防ぐ其巧妙さ。喜樂は高島ふみ子の尻からチヨロチヨロ見えて居る狐の尻尾をグツと握ると、ふみ子は驚いて「シューシュー」と云ひ乍ら芋蟲を弄ふた様な體裁でプリンと尻を一方へふり、御幣をプイプイと振り廻し又向ふの方へ拂ひもつて行く。斯の如くして祭典は無事に終了を告げた。服部爺サンの言つた狐の尾も萬更ウソでない事を悟つた。可笑しいやら馬鹿らしいやら、俄に信仰がさめて了ひ、それから三十年の二月、廿八歳になるまで、神様に手を合すのがいやになり、極端な無神論者になつて了つたのである。

祭典は無事に済んだ。杉山某から御馳走迄拵へて頼まれた演説も此尻尾を見てから何となく氣乗がせず、折角拵へておいた腹案もどつかへ消えて了ひ、申し譯

的に十分間程取とめもない、支離滅裂な演説をやつてのけた。それでも不思議な事には、杉山を始め世話方信者は手を叩いて、非常に感服してゐる様子であつた。何も譯の分らぬ婆嬪の迷信連に向つて、自分でさへも譯の分らぬ事を云つたのに、餘り反對も受けず、却て拍手を以て迎へられたのは合點のいかぬ事であつた。譯の分らぬ人間に對しては、ヤツパリ分らぬ事を云ふて聞かすのが、よく耳に這入るものだなアと、自ら感心せざるを得なかつた。

祭典は無事に済み、お臺サンのおふみサンの言ひ付けで馬路村の或る中川と云ふ信者から、子が無事に生れたお禮だと云つて、御供へした澤山の牡丹餅を百四五十人の信者に二つづつ配つて廻つた。そしておふみサンの言草が面白い。

皆サン中川サンの奥サンは、御妊娠をなさつてから、十二ヶ月になるのに、子が出ませぬので、此大神様にお参りになり、お伺ひ遊ばした所、此人は懐妊になつてから、牛の綱を跨げたから、其罰で牛の子が宿つたので、十二ヶ月も腹に居らはつたのです。神様の御言葉では、此儘放つといたら牛の子が生れるに依つて、信仰をせよと仰有りました。それから中川サン御夫婦は二里もある所を代る代る

御参拜になつて、とうとう立派な人間の男の子がお生れになつたので、今日はお祭を幸ひに、牡丹餅をお供へになつたので御座います。皆サンあやかつて下さいませ。神様は信心さへ強うすればどんな事でも聞いて下はります。どうぞ皆サンも疑はずに信心をして下さりませ、キツと廣大な御利益が頂けますぞえ」
としたり顔に教服をつけたまま、上座に立つて喋り立て、次の間に這入つた。大勢の信者は手に頂いて、一口かぶつては妙な顔をし乍ら懐から紙を出して包み袂に入れる。誰もかれも厭相な顔をしてゐる。自分も二つ貰うたが、妙な香だと思つて割つて見ると牛糞が包んであつた。

大勢の中から、

「オイお臺サン、コリヤ牛糞が交ぜつとりませすぜ」

と叫ぶ者がある。さうするとあちらからも此方からも、

「あゝ臭かつた、エーエー」

と紙を使ふものも出来て来た。高島ふみ子サンは驚いて、上装束をぬぎ、狐の尾を細帯で括つたまま、取るのを忘れて、此場へ走り來り、

高島「皆サン勿體ない事を仰有るな。そんな物を神様にお供へしそんな事がありませぬ」

と云ふや否や、中川と云ふ男、三十二三歳の少し色の黒い、細長い顔をして、神壇の前に立ち、

中川「私は馬路村の中川某と云ふ者です。私の家内が妊娠をしてから月が満ちても出産せぬので、ここへ伺ひに来た所、この奴狐がぬかすには、牛の綱をまたげたから、牛の子が宿つて居るのだ、信心さへすれば人間の子に生れさしてやると、バカな事をぬかしやがる、人間さまを馬鹿にしやがるも程があると思うて居つたが、それでも出来て見ねば分らぬと思ひ、女房の代りに毎日参つて居りました。そして所、女子が出来るとぬかしたに拘らず、立派な男の子が生まれました。そんな事の腹の中の事まで分る様な稻荷なら、牡丹餅の中へ牛糞を入れて供へたら、案の條、牛糞を神様の前に供へて拜んでをる可笑しさ。私は皆さまに食て下さいと云ふて牡丹餅を持つて来たのだないから、皆さま怒つて下さるな。ここ

の婆アが悪いのだ、アハ、稲荷下の山子バ、尻でもくらへ、これから俺がそこから中、此次第をふれ歩いてやる』
と言ひ乍ら、一目散に飛出し歸つて行つた。これより旭日昇天の勢ひであつた、此教會も次第々々にさびれて、遂には維持が出来なくなり、京町の天神さまの境内へ移轉して、僅かに命脈を保つて、明治四十五年頃まで繼續して居たのであつた。

(大正一一・一〇・一〇 舊八・二〇 松村眞澄録)

第一八章 奥野操(一〇三〇)

一旦齋藤宇一の座敷から、退却を命ぜられた修業場は、
て、再修行場に、二間續きの奥座敷を給與された。其時は多田琴、石田小末、上田幸吉などが最も面白き神懸りであり、いろいろの珍しき神術をして見せた。多

田琴が両手を組み審神者となり、石田小末が神主となり、

「サア地震だ」

といへば、俄に家がガタガタとふるひ出し、ゴーゴーと唸り聲が聞えて来る。これ共地震は此家限りで、門口を出ると最早何の事もなかつた、大勢の者は其不可思議な神力に肝を潰し、舌を巻いてゐた。多田琴が、

多田「われは巴御前だ、オイ家來の者、皆サンにお茶を注げ」

と命ずると、戸棚からガチャガチャと音がして茶碗が人の數丈宙をたつて、二人の前に出て来る。多田は、

多田「皆サンの前へ、一つづつ配れ」

と嚴命すると、何も居らぬのに、茶碗が疊の上五六寸の所を通つて、各自の膝の前にチャンと据はる、据はつた時どれもこれも茶碗が二三遍キリキリと舞うてゐるのが不思議である。

多田「サアお茶をつけ」

と多田琴が命令すると、石田小末は手で土瓶を持つて、茶を注ぐ眞似をする。さ

うすると、火鉢にかかつてゐた土瓶が勝手に、宙をブラブラやつて来て、誰かが持つて茶を注ぐ様に、八分許り、各次ぎ次ぎに注いでまはる。始めの中は喜樂の靈學は偉い者だとほめて居たが、ソロソロ魔法使、飯綱使と口を極めて罵り出した。それにも構はず靈をかけて火鉢を動かしたり、机を二三尺許りも宙に上げたり、土瓶を廻らしたりして、日夜研究に没頭してゐた。此時位面白くて得意な事はなかつた。多田琴に憑つた巴御前と自稱する靈は喜樂に向つて曰ふ。

多田「此通り色々の靈術を、神が守護致してさしてやるのだから、これから一座を組んで、京大坂へ飛出し、奇術師となつて、ドツサリ金を儲け、それを資本として大きな神殿を造り本部を建てようだないか」

と勧めるのであつた。喜樂は神様の道に、そんな馬鹿な事をしては却て神の道と汚すだらうと思つて、躊躇して居ると、石田小末の憑靈が又もや發動して、小末「サア是から宙を歩いて見せる、何ンでもカンでも御望み次第ぢや、こんな結構な神術があるのに、丹波の山奥に隠しておくのは勿體ない、京大坂へ出て、天晴れ神術をして見せたら、それこそ一遍に神様の御神徳が分つて、お道が開け

るだらう。サア早く決心なされ」

と多田と小末の二人の神懸が兩方からつめかける。山子好きの元市親子は喉をならして喜び、

「サアこれが神様の御神徳だ。天眼通から天耳通、天言通、それにこんな神術、これを見せたら、いかな理屈の強い男でも、往生せずには居られまい。金儲けをしもつて、神様のお道が廣まるのだ、エへ、へ、へ、こんな結構な事が世にあらうか」

と乗氣になつて居る。岩森とく、齋藤高子までが色々の不思議な神術を習得して同意し出した。喜樂の心では、……そんな所へ出て、藝をして見せるのは、何だか恥しくて堪らない、乍併それで神様の道が開けるのならば、強ち止める譯にも行くまい。何事も神懸に任して、思ひ切つて京大坂へ一興行やりに行かうか……と決心し、産土神社へ參つて、伺つてみた。さうすると又もや自分の腹から塊が二つ三つゴロゴロと喉のあたりまで舞ひ上り、

「バカ バカ バカッ」

と唝鳴りつけた。喜樂は止めるのが馬鹿か、興行に出るのが馬鹿か、どちらで御座ります………と問ひ返して見ると、又腹の中から、

「其判断がつかぬ奴は尚馬鹿だ」

と唝鳴られた。喜樂は、

「そんなら多数決に依つて、神懸や元市サンの云ふ通りに致します」

と言つてみれば、又もや腹の中から、

「やるならやれ、兇黨界に落してやるぞよ」

と唝鳴りつけられ、とうとう靈學興行は思ひ切る事にして了つた。

例の如く修業場で幽齋を始めて居ると、多田琴の容貌が俄に獰惡となつて來た。

そしてはじけられるやうな聲で、

「アラ アラ アラ」

と唝鳴り出し、擊劍家が竹刀をふり上げて立合ふ様な素振りをして居る。審神者

の喜樂は、

「鎮まれ！」

と一言言靈を發射した。多田は其一言に元の座に行儀よく坐り、組んだ手を離して、昔の武士が、腰の刀を抜く様な素振をなし、
『之を見よ』

と審神者の前に手をつき出す、審神者は目をつぶつた儘、之を見れば短刀の根元に、白紙が巻いてあるのをつき出して見るやうに見える。そして此短刀を持った男は、年は四十前後の稍赤みがかつた細だちの品のよい男である。多田は口を切つて云ふ、

多田『某は園部の藩主小出公の指南番奥野操といふ者で、同役のそねみに依つて、讒言をせられ、園部を追ひ出され、龜山に参り、松平公の指南番となり、勤めてみた所、十八歳の殿様の妹娘に惚れられて、遂に同役より又もや讒言をせられ、無念の涙を呑んで、丁度八十年以前の今晚、切腹を致して相果てた武士で、此短刀を見られよ、血汐が附いてをらうがなア』

と呶鳴り立てた。
喜樂『ここは神様のお憑り遊ばす爲の修行場であれば、人靈などの來るべき所で

はない。早く立去つたがよからう」

ときめつけた。憑靈は首を左右に振り、

「苟くも天下の豪傑、武道の指南番に向つて、無禮千萬な其言ひ條了見致さぬぞ」と言ひ乍ら、ツと立上り、

「ヤア ヤア」

と聲をかけ、喜樂の頭の上を前後左右に飛び廻り、時々頭を蹴つて、騒ぎまはり、何程鎮魂をしても、荒くなる計りで、少しも鎮まらない。喜樂も殆ど持てあまし、此場をぬけ出し、再産土の社へかけつけて、祈願をこらして居た。そこへ石田小末が走つて来て、

小末「モシ先生、鎮まりました。操と云ふ武士が先生に一つ御頼みがあるから、早く歸つて欲しいと頼んで居ります。どうぞ歸つて下さいませ」

と叮嚀に頭を下げて頼んで居る。喜樂は、

喜樂「ヤアもう鎮まつたか、そりや有難い、産土様の御蔭だ」

と云ひ乍ら、社前に感謝し、直に元市の宅へ歸つて行く。

歸つて見れば多田琴は嚴然として坐りこみ、
多田「アイヤ上田氏、某は最前申せし如く、龜山公の指南番奥野操と申す者で
る。女房もなければ子もなし、又身内もなき故に後弔ひくれるものもなく、宙に
迷うて居ります。就いては自分の家に入りを致して居つた家來の子孫が内丸町
に紙屑屋を致して居る。これは西尾と申す者なれば、よく査べて下され、戒名は
何々と記し西尾の宅と西町の某寺に祀つてある。先づ第一に虚實を調べた上、此
方の靈を御祀り下さらば、某は神の座に直り、其方が神業を保護いたし、日本國
中は申すに及ばず、世界の隅々に致るまで十年ならずして名を轟かして見せるで
ムらう。猶も疑はしくば、龜岡古世裏の墓地へ往つて調べて下され。入口から右
に當つて三つ目の石塔が、拙者の石塔でムる。性念のある印には、上田氏が石塔
の前に立たれたならば自然に動くに依つて、それを證據に御祀り下され。武士が
百姓の倅に頭を下げてお願申す」
と威丈高になつて構へてゐる。これより喜樂は宇一其他二三の修業者を引つれ西
町の某寺を調べ、紙屑屋の西尾の宅へ行つて聞いて見たが、操と云ふ名はハツキ

り分らぬが、某々院殿某々居士と云ふ事丈は的中して居た。全く操の靈に間違ないといと、勇んで古世裏の墓地へ往つて見た。所が墓地全體の様子が亡靈のいつた通り寸分の間違もなく、右の三つ目の石碑には苔がたまつて、ハツキリとは分らぬが、どうも似た字が現はれてゐる。石塔がモウ動くかモウ動くかと待つ事殆ど一時間許り、されど依然としてビクとも動かない。ハテ不思議と、不思議でもない事を、不思議がつて瞑目し、靈眼で調べて見ると、石塔の裏に大きな古狸が目をむいてゐるのが目についた。

「おのれド狸奴が、人を馬鹿にしやがつた、これから歸つて多田琴の審神を嚴重にしてやらう」

と思ひ乍ら、スタスタと穴太の修業場へ歸つて來た。其時既に日は暮れて居た、修業場には薄暗いランプが一つ、點つて其向ふに多田琴と石田が四角張つて、嚴然と控えて居る。自分等の姿を見るより、

「ヤア上田殿、大儀々々よくこそお調べ下さつた。此方の申す事に間違はムらうまいがなア、早く某の靈をお祀り下され。ヤア元市どの、其外の面々、いかい御

苦勞でムつた、アツハ、、、

と豪傑笑ひをなし、肩を二人一時に揺すつてゐる。

喜樂「コリヤ多田に憑つてゐる古狸奴、小末にうつつてる狸の子分奴、此審神者を馬鹿にしやがつたな、サアもう了見ならぬ。これから靈縛をかけて縛めてやるから覺悟を致せ」

多田の憑神は一層大きく肩をゆすりて大口をあけ、

「アハ、、、イヒ、、、」

と笑ひ乍ら横にゴロンとこけて了つた。喜樂は兩手を組み、一生懸命にウンウンと靈縛をかけた。石田はウンの聲と共にゴロリと倒れた。それと引替へに多田の肉體はムクリと起き上り、ドンドンと餅つく様に二十貫の體を二尺許り上げ下げして、座敷中を飛び廻る。喜樂は一生懸命になつて、

喜樂「どうぞお静まりを願ひます」

と頭を下げ、優しく出た。憑神は大口あけて、

「アハ、、、おれは小松林様に頼まれて、貴様達に審神者の修業をさせてやつた

何とも知れぬ不快の臭が室内に充ち、ランプの光は自然に細つてそこから中が薄暗くなつて來た。それから蠟燭を四五本も燈してみたが、どれもこれも火が小さくなつて消えて了ふ。仕方がないから、東側の細溝の清水で體を清め、胴を据えて、天津祝詞を一生懸命に奏上しかけた。怪しき亡者の影は一人減り二人減り、とうとう又元の障子の細い破れ穴から逃げ去つて了つた。かかる所へお紋の母親お初といふ婆アサンが、慌ただしくやつて來て、お初「モシモシ喜樂サン、最前から俄にお紋が病氣になつて囁言許りいつてゐます、そして喜樂サンどうぞこらへて下さいと、幾度となく繰返して居りますから、どうぞ、どんな悪い事をしたか知らぬが、まだ年の行かぬ子供の事だから、力二一してやつて下され。大變な熱で、臭うて側へもよりつけませぬ」

と言ひ乍ら、泣いて居る。喜樂はこれを聞くより隣のお紋サンの家に行き見れば、お初婆アサンの云つた通り、熱臭く不快な臭が漂ひ娘はウンウンと唸つて居る。丁度元市の修業場で嗅いだ臭とソツクリであつた。そこで又もや天津祝詞を聲高らかに奏上し、鎮魂を施せば、お紋サンは夢中になつて、

『のきます のきます』

と云ひ乍ら、寢所から立上り、二足三足門口の方へ歩き出し、バタリと其場に倒れて了つた。それと同時に病氣はスツカリ治つて了つたのである。

此事があつてから、次郎松は、いよいよ喜樂は飯綱使だと口を極めて罵り、曾我部の村中を、御苦勞にも仕事を休んでまでふれて歩いた奇篤な人間である。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一〇・一〇 舊八・二〇 松村眞澄録)

第十九章 逆襲(一〇三)

不圖配達して来た日出新聞の廣告欄を見ると、壯士俳優募集と云ふ立派な廣告が出て居た。自分は一生懸命に其廣告を見詰めて居ると、多田琴がポンと飛び上り神懸りになつて、

多田「俺は男山の眷族小松林命であるぞ。今其廣告にある通り、神界の仕組で正義團と云ふ壯士芝居の團體が募集されて居るのだ。お前はこれから、今迄苦勞して覺えた靈術を應用して芝居の役者になれ。神が守護して如何な不思議な事でもさしてやるから、川上音次郎以上の名優にしてやらう。如何ぢや、神の申す事を承諾するか、但は否と申すか、直に返答をして呉れ」

とニコニコ笑ひ乍ら強制的に問ひかける。喜樂は此廣告を見て、

「俺も一度壯士役者になつて見たいものだ」

と思ひつめて居た際であるから、一も二もなく喜んで、

喜樂「ハイ、神様さへお許し下されば壯士役者になります」

と速座に答へた。さうすると小松林と名乗る憑靈は、嬉しさうな顔して言葉まで柔しく、

「流石はよく先の見える、先の分つた審神者だ。サア愚圖々々してると應募者がつまれば駄目だから、今夜直様立つて行け。さうして金を十五六圓ばかり積りをして行け」

と云ひ渡す。

ありもせぬ金を寄せ集めてヤツと十五圓拵へ、保津の濱から、舟に乗つて谷間を下り嵯峨に着き、それから竹屋町富小路の宿屋に尋ねて行つた。正義團長と稱する男、名は忘れたが直様二階へ案内して呉れ、入會料として十圓を請求する。直様十圓を放り出し種々と手続きを済まして、それから安い宿を探し、日々柔術の型を稽古したり、科白を覚えたり、十二三人の男がやつて居た。愚圖々々して居ると五圓の金が無くなつて了ふ。さうして臀部に大きな瘍が出来てビクとも出ず、うづいて堪らない。

「こんな事では芝居どころの騒ぎぢやない。何とかして吾家へ歸りたいものだが歩いて去ぬ事は出来ず、俵賃はなし、一層の事、枳殻邸の附近に弟の政一が子に行つて居るから、其處迄俵で運んで貰ひ世話にならうかなア」
と考へ込んで居ると腹の中から又もや玉ごろが喉元へつめ上つて來た。さうして、

「アハ、ハ、ハ、」

と可笑しさうに笑ひ出す。

「足の腫物が痛くて何どこでもないので、可笑しさに腹の中から笑ふ奴は何枉津ぢやい」

と嘔鳴つて見た。腹の中からも可笑しさに小氣味良さ相の聲で、

「イヒ、ヒ、ヒ、ヒ」

と連続的に十分間程笑ひつづける。さうして、

「俺は松岡ぢや、貴様が新聞の廣告を見て、役者になり度相にして居るから、一寸改心の爲に黽つて見たのだ。本當に日本一の大馬鹿だのう、オホ、ヒ、ヒ」

と笑ひ出す。進退維谷まつた喜樂は如何する事も出来ず、宿賃を三日分三圓六十錢拂ひ、丹波へ歸らうとして宿の門口を立つて出た。知らぬ間に臀部の大きな腫物は嘘をついた様に治つて居た。それきり壯士俳優になつて見度いと云ふ心は、スツカリ消え失せ、一心不亂に神界の御用に盡すと云ふ心になつたのである。

同じ穴太の齋藤某と云ふ紋屋の息子が、肺病で苦しみ醫藥の效もなく困つて居るから、其處へ助けに行つたら如何だ……と お【いよ】と云ふ婆サンが出て來て、頻りに勧めるので、喜樂も、

「彼處の息子の計サンの病を癒してやつたら、チツと村の者も氣がつくだらう。信仰をするだらう」

と思ふたので、朝早くから其家に羽織袴で訪問して、

喜樂「計サンの病氣平癒をさしてやりませうか」

と掛合ふて見た。此處の奥サンはお悅と云ひ、随分口の八釜しい女で、村の人が

ら雲雀のお悅サンと仇名をとつて居た。お悅サンは喜樂の姿を見て目を圓うし、

お悅「これこれ、飯綱使ひの喜三ヤン、何ぞ用かい、大方お前は、家の計の病氣

を拜んでやらうと云つて來たのだらう。ア、いや いや いや、神さまの【か】

の字を聞いても腹が立つ、家の親類は天理サンに呆けて家も倉もサツパリとられ

て了つた。近はんは稻荷下げに呆けて相場して、家も屋敷も田地迄賣つて了つた。

此時節に神々吐す奴に碌な者はない。お前サンも人の處を一杯かけようとと思ふて

來たのんだらう。サア何卒歸つて下さい。然し喜樂サン、俺が斯う云ふとお前は

腹を立てて、「あたん」に飯綱をつけて歸るかも知れぬが、憑けるなら憑けなさ

れ。俺ん所は黒住さまを祀つてあるから、飯綱位に仇はしられませぬから大丈夫

ぢや。黒住さまは天照皇大神宮さまぢや、天狗サンや四足とは「てん」からお顔の段が違ひますぞえ。サア早う去んで下され。其處等がウサウサして來た。又計の病氣が重うなると困るから……サア去んでと云ふたら去んでおくれ。エー尻太い人ぢやなア、蛙切りの子は蛙切りさへして居れば宜いのに、どてらい山子を起して金も無い癖に、人の金で乳屋をしたり、其乳屋が又面白くない様になつたので、そろそろ商賣替へをして飯綱使ひをするなんて、お前にも似合はぬ事をするぢやないか。昨日も次郎松サンが出て來て何も彼も云ふてをりましたぞえ。薩張り化けの皮が剥けて居るぢやないか。龜岡の紙屑屋へは如何でしたな」

と口を極めて罵詈訕弄する。喜樂はむかつて堪らぬけれど、

「此處が一つ辛抱だ。こんな八釜しい女の誤解をといておかねば將來の爲め面白くない」

と思ふたので、色々雑多と神様の道を説いて聞かせたが、てんで耳をふさいで聞かうとせぬ。お悦サンは半泣聲を出して、

お悦「エーエー煩さい。何程落語家の喜樂サンが甘い事云つても、論より證據、

現在げんざい身内みうちの次郎松じろまつサンが證據しょうこ人だから……エー穢けがらはしい、早くはや去いんで下ください。これお留とめ、鹽しほもつておいで……

と下女げぢよの名迄なまで呼びたてて人を鹽しほでもかけてぶつ歸かへさうとして居ある。仕方しかたが無いなのでトボトボと吾家わがやを指さして歸かへつて來きた。

小幡橋をばたばしの袂たもとまで歸かへつて來くると、次郎松じろまつサンが眞青まつさをな顔かほして出でて來くるのに出會であつた。次郎松じろまつは「ついに」にない優やさしい顔かほをして、

「もしもし上田先生うへだせんせい、一寸ちよつと頼たのまれて下くだされ。二三日にさんにちまへ前から家うちの阿栗あぐ（ひとりむすめの名な）に狐きつねが憑ついて囁言うさごとを云いふたり、雪隠せつちんへ行いつて尻しりから出でるものを手てに掬すくひ、コロコロ團子だんごを拵こしらへて佛壇ぶつだんに供そなへたり、妙めうな手付てつきで躍をどつたり、跳はねたりした擧句あげくは、布ふと團んをグツスリ被かぶつて寢通ねとほしぢや。モウこれからお前まへには敵對てきたはぬから何卒どうぞ堪忍かんにんして呉くれ。あんまり俺おれが反對はんたいするのでお前まへが怒おこつて、それ……あの……何々なになにを憑つけたのぢやらう。もうこれから屹度きつとお前まへの云いふ通とほりにするから、何々なになにを連つれて行いつて下くだされ。ナア喜樂先生きらくせんせい、何卒どうぞ頼たのみますわ」

と橋はしの上うへで大おほきな聲こゑで云いふ。人ひとに聞きえては態さまが悪わるいと思おもふては、キヨロキヨロ其そ

處等を見廻して居ると、松サンは頓着なしに娘の病氣の事を喋り立てる。仕方が無いので喜樂は、

喜樂「免も角行つて見ませう」

と先に立つて次郎松の家へ行つた。おこの婆サンは喜樂の顔を見て、いきなり、おこの「これ喜樂サン、お腹が立つたぢやらうが何卒忪へてお呉れ。昨夜から阿栗が喜樂サン喜樂サンと八釜しう云ふて仕様がな。あまり宅の松が神さまの悪口を云ふもんだから、お前が怒つて一寸……したのだらう。何と云ふても隠居母家の間柄、宅の難儀はお前の處の難儀だ、又お前の處の難儀は矢張俺の宅の難儀だ。悪い事せずに、早う飯綱を連れて去んでくれ。年寄の頼みぢやから……たつた一人の孫があんな態になつてるのを見て居る俺の心はいぢらしいわいなア、アンアン」

と泣き出す。喜樂はムツとして、

喜樂「これ、おこのサン、そんな無茶な事云ひなさんな、殺生ぢやないか。誰がそんな物を使ふものか、自分の宅に置いた奉公人でさへも仲々言ふ事を聞かぬぢ

やないか。假令そんな狐があるにした處で人間の云ふ事を聞きさうな筈がない。
あんまり見違ひをしておくれな、わしは腹が立つ。村中の者に飯綱使ひぢやと悪
く云はれるのも、皆松サンが仕様もない事を觸れて歩くから俺が迷惑をしてるの
ぢや。結構な神さまの名まで悪くして堪らぬぢやないか」
おこの「その腹立ちは尤もぢやが、外ぢやないから何卒機嫌を直して阿栗の病氣
を助けてやつてくれ。これ松、お前もチツと喜樂サンに頼まぬかいな」
奥の間で阿栗と云ふ娘は、ケラケラケラと他愛もなく狐が憑いて笑ふて居る。
助けてやつても悪く云はれる、助けてやらねば尚悪く云はれる、こんな男にかか
つたら如何する事も出来ぬ。エー仕方がないと病人の前へ端坐して天津祝詞を奏
上し、神言を靜に唱へて一二三四……と天の數歌を四五回繰返した。病人はムク
ムクムクと立ち上がり、矢庭に跣足のまま庭に下り、門口の戸に頭を打つて「キ
ヤツ」と云つたまま仰向けに倒れた。此時高畑の狐が退いたのである。それから
娘の病氣はスツカリ癒つて了つた。松サンは口を尖らして、
次郎松「これ、喜樂サン、お前は何と云ふ惡戯をする男だ。人の處の娘へ狐を憑

けて長い事苦しめ、知らぬかと思ふて居つたが、宅の母者人や、此松サンの黒い目でサツパリ看破られ、しやう事なしに憑けた狐をおひ出したのだらう。今度はこれで恠へてやるが、一人娘を又こんな目に遭はすと警察へつき出してしまふぞ。サア飯綱使ひ、早う去ね、何程仇をしようと思ふても、宅には金比羅さまのお札が此通り澤山にあるから、これから金比羅さまを祈つてお前の魔術が利かぬ様にしてやる。お前も、もういい加減に改心をして元の乳屋になり、年寄やお米はんは安心をさしたら如何ぢや。お前處が難儀をするとな矢張黙つて見捨てておく譯には行かぬから、親切に氣をつけるのだから悪う思ふ事はならぬぞ」

と娘を助けて貰うてお禮を云ふ處か、アベコベに不足のタラダラを竝べ罵詈雑言を逞しうし、お爲めごかしの御意見を諄々と聞かして呉れた。松サンは其翌日から益々猛烈に反對をしだし、

次郎松「宅の娘に喜樂がド狐を憑けて苦しめよつた。到頭化けが現はれて俺に責め付けられ、仕様事なしに骨折つて憑けた狐をおひ出して連れて去によつた。俺は親類で居つて云ふのだから嘘ぢやない。みな用心しなされや」

と其處等中を觸れ歩いた。喜樂こそ宜い面の皮である。

(大正一一・一〇・一〇 舊八・二〇 北村隆光録)

第二〇章 仁志東(一〇三二)

話は少し元へ歸る。明治卅一年の四月三日神武天皇祭の日、喜樂は早朝より神殿を清め修業者と共に祭典を行つて居た。そこへ瓢然として尋ねて來た五十餘りの男がある。男は無造作に鬪をまたげて又ツと這入り、男「私は紀州の者で三矢喜右衛門と申します。稻荷講の福井縣本部長で、静岡縣阿部郡富士見村月見里稻荷神社附屬、稻荷講社總本部の配札係で御座います。紀州を巡回の折柄、ここの噂を承り、すぐさま總本部へのぼり長澤總理様に伺うた所、因縁のある人間ぢやに依つて、兔も角調べて來いと言はれました。過去現在未來一目に見え透く靈學の大先生長澤様の御言葉だから、喜んでお受けなされ、

決して私わたしは一通ひととほりの御札おふだくばりではありませぬぞ」

とまだ喜き樂らくが一口ひとくちも何なんともいはぬ先さきから、虎とらの威あをかる狐きつねのやうに威あばり散ちらしてゐる。喜き樂らくは稻荷講社いなりかうしやと云いふ名めい稱しやうに就ついては聊いささか迷めい惑わくのやうな氣きがした。なぜならば口丹波邊くちたんばへんは稻荷講社いなりかうしやといへば直すぐに稻荷いなりおろしを聯想れんさうし、狐狸きつねたぬきを祀まつるものと誤ご解いされるからである。併しかし乍ながら過くわ去げん現ざい在みらい未み來らいを透察とうさつする靈學れいがくの大家たいかが長澤先生ながさはせんせいだと言いふことを聞きいては、此この三みつ矢やを只ただでいなすことは出で來きない様やうになつて來きた。

二月にぐわつ以來いら高たか熊くま山やまの修しう行ぎやうから歸かへつたあとは、靈れい感かん問もん題だいに没頭ぼつとうし、明あけても暮くれても、靈れい學がくの解かい決けつに精せい神しんを集しふ中ちゆうして居あたからである。そして親しん戚せきや兄きやう弟だい、村むらの者ものまでも、でが、山子やまこだ、飯綱使いづなつかひだ、狐きつねだ、狸たぬきだ、野天狗のてんぐだ、半氣違はんきちがひだと口々くちくちに嘲てう笑せう惡あく罵ばをたくまま遅おそしうするので、何なんとかして此この明ありあを立たて、人々ひとびとの目めをさまさねばならぬと、心しん配はいして居あた所ところへ三みつ矢や氏しが來きたのだから、一いち道だうの光くわう明みやうを認みとめたやうな氣きになつて、勇いさみ喜よろこび、直ただに三みつ矢やを吾家わがやに止とどめ、いろいと靈れい學がく上じやうの問もん題だいを提てい出しゆつして聞きいて見みたが、只ただ配はい札さつのみの男をとこと見みえて、靈れい學がく上じやうの話はなしは脱線だつせんだらけで、何なにを聞きいても一ひとも得うる所ところがなかつた。それから旅費りよひを工面くめんして、三みつ矢やの案内あんないで愈いよ同どう月げつの十三日じふさんにち、

穴太を立つて京都まで徒歩し、生れてから始めての三等汽車に乗つて、無事静岡の長澤先生の宅に着くことを得た。

長澤先生は其時まだ四十歳の元氣盛りであつた。いろいろと靈學上の話や、本田親徳翁の來歴等を三四時間も引續けに話される。喜樂が一口言はうと思つても、チツとも隙がない。此方の用向も聞かずに四時間斗り喋り立て、ツツと立つて雪隠へ行き、又元の所へ坐り、三方白の大きな目を剥き出し、少し目が近いので背を曲げ、こちらを覗く様にして、又もや自分の話を續けられる。机の下は二三ヶ月間の新聞紙が無雜作に散らけてある。澤山の來信も封を切つたのや切らぬのが、新聞紙とゴツチャになつて廣い机のグルリに散亂してゐる。長澤先生は障子の破れ紙の端をチヨツと引むしつて、ツンと鼻をかみ、ダラダラと流れやうとする鼻汁を又ポンと紙を折り、遂にはツと餘つて鼻汁が膝の上に着ちやうとするのを、今度はあわてて新聞紙の端を千切り、それに鼻汁紙を包んで、無雜作に机の下に投げ込み乍ら、平氣な顔で又五時間斗り喋りつづけられた。長途の汽車の旅で體は草臥てゐる。一寸どこかで足を伸ばしたいと思ふても先生が動かないので如何

することも出来ず、とうとう其日は自分の住所姓名を僅に告げた丈で、長澤先生の話斗りで終つて了つた。

先生の母堂に豊子といふ方があつて、餘程靈感を得てゐられた。豊子さまは喜樂に向ひ、

豊子「お前さまは丹波から來られたさうだが、本田さまが十年前に仰つたのは、是から十年程先になつたら、丹波からコレコレの男が來るだらう、神の道は丹波から開けると仰有つたから、キツとお前さまのことだらう、これも時節が來たのだ。就ては、本田さまから預つて置いた鎮魂の玉や天然笛があるから、之を上げませう。これを以てドシドシと布教をしなされ」

と二つの神器を箏笥の引出しから出して喜樂に與へ、且神傳祕書の巻物まで渡してくれられた。翌朝早うから之を開いて見ると、實に何とも云へぬ嬉しい感じがした。自分の今迄の靈學上に関する疑問も、又一切の煩悶も拭ふが如く拂拭されて了つた。

午前九時頃から、長澤先生は再び自分を招かれた。早速に先生の前に出で、今

度は自分の方から喋り立て、先生に一言も云はずまいと覺悟をきめて出合ふなり、自分の神懸りになつた一伍一什を息もつかずに三時間斗り述べ立てた。先生は只「ハイハイ」と時々返事をして、喜樂の三時間の長物語を神妙に聞いて呉れられた。其結果一度審神者をして見ようと云ふことになり、喜樂は神主の席にすわり、先生は審神者となつて幽齋式が始まつた。其結果疑ふ方なき小松林命の御神懸といふことが明かになり、鎮魂歸神の二科高等得業を證すといふ免状迄渡して貰つた。喜樂は今迄數多の人々に發狂者だ、山子だ、狐つきだとけなされ、誰一人見わけしてくれる者がなかつた所を、斯の如く審神の結果、高等神懸と斷定を下されたのであるから、此先生こそ世界にない、喜樂に對しては大なる力となるべき方だと打喜び、直ちに請ふて入門することとなつたのである。要するに長澤先生の門人になつたのは靈學を研究するといふよりは、自分の靈感を認めて貰つたのが嬉しかつたので入門したのであつた。

夫れより先生に従ひ、三保の松原に渡り、三保神社に參拜して、羽衣の松を見たり、又は天人の羽衣の破れ端だと稱する、古代の織物が硝子瓶の中に納められ

てあるのを拜観はいくわんしたりし乍ながら、一週間許いっしゅうかんばかり世話せわになつて、二十二日の夜漸にじふにちよるやうやく穴太あなをの自宅じたくに歸かへる事ことを得えた。三矢喜右衛門みつやきうゑもんも再穴太ふたたびあなをへ従ついて歸かへり、園部そのべの下司熊吉方げしくまきちかたに往復わうふくして、とうとう齋藤静子さいとうしづこと熊吉くまきちとの縁談えんだんの媒人なかつどまでなし、今迄いままでの態度たいどを一變ぺんして、下司熊げしくまをおだて上げ、いろいろと喜樂きらくに對たいし、反抗運動はんかううんどうを試こころみる事こととなつた。

下司熊げしくまは、齋藤静子さいとうしづこの餘あまりよくない神憑かむがかりを女房にようぼうに持もち、自分じぶんも神憑かむがかりとなつて、相場占さつばつらなひを始め出だした。下司げしの腹心ふくしんの者ものに藤田泰平ふぢたたいへいといふ男をとこがあつた。此男このをとこは人の反物たんものを預あづかり、着物きものや羽織はおりを仕立したて、賃錢ちんせんを貰もらつて生計せいけいを立て居ゐた男をとこである。下司熊くまの頼たのみによつて、方々ほうほうから預あづかつたいろいろの反物たんものを質しちに入れ、金を借かり、それを下司熊げしくまに使つかはれて了しまひ、依頼主いらいぬしから火急くわきふな催足さいそくをされて、非常ひじやうに煩悶はんもんをしてゐた。グズグズして居ゐると刑事問題けいじもんだいが起おこり相さうなので、泰平たいへい自ら穴太あなをへ行やつて來きて、下司熊げしくまの爲ために自分じぶんは退引のつびきならぬ破目はめに陥おちいつた事を歎なげきつつ物語ものがたり、如何どうかして助たすけて貰もらふ譯わけには行ゆかうまいかと云いつて泣ないて居ゐる。喜樂きらくも最早もはや如何どうする事ことも出で來きない。併しかし乍ながら何なんとかして助たすけてやりやうはないかと、頭あたまを惱なやましてゐた。そこ

へ齋藤宇一が自分の叔母の婿となつた下司熊と共に出て来て、何とかして藤田を助ける工夫はなからうか、藤田許りか下司までが、此儘にしておいたら、取返しつかぬやうな事になつて了ふ。お前の家や屋敷を抵當に入れて、金でも借つてくれまいかと齋藤が云ふ。併し乍ら喜樂の家屋敷は既に抵當に入り、五十圓借つた金も、とうの昔になくなつて居た。ふと思ひ出したのは奥條といふ所に預けておいた乳牛がある。其牛は喜樂の自由の物で、精乳館の物ではなかつたのを幸ひ、それを賣つて下司や藤田の急場を助けてやらうかと思ひ、喜樂が九十圓で買つた牛が奥條に預けてある、それをどつかへ賣つてくれたら、其金を間に合はしてやらうと、云ふた言葉に下司は手を拍つて踊りあがり、

下司「そんなら濟まぬが、どうぞ暫く私に貸して下さい。此牛は自分が入營してゐた時の友達で、矢賀といふ所に伯樂をして居る者があるから、そこへ連れて行って買つて貰はう」

といふ。そこで話が纏まつて、藤田泰平は園部へ歸る。喜樂と宇一と下司熊の三人は、奥條の牛の預け先から引出して来て、八木の川向うの矢賀といふ所へ引張

つて行つた。

其日は此地方の氏神の祭禮で、あちらこちらに大きな幟が立つてゐる。漸くにして九十圓の牛を十五圓に買ひ取られ、日が暮れてからソロソロ八木へ廻つて歸らうとした。十五圓の金は下司が預つたきり、懐へ入れて了つた。そして十圓さへあれば下司の問題も一切片付くのである。五圓丈は喜樂に渡すといふ約束であつたが、下司はふれまわれた酒にへべレケに酔うて、何と云つても、妙な事計り言つて受入れぬのみか、日清戦争で戦死した戦友の石碑が立つてる前へ行つて手を合せ、

「惟神靈幸倍坐世、オイ貴様もおれと一緒に戦争に往つたのだが、とうとう先へ死によつたのう、本當に貴様は可哀相なものだ。こんな部落へ生れて来て、いろいると言はれ、其上鐵砲玉に當つて死んで了ひ、本當に可哀相だ。おりや君に同情するよ。ナアに、俺だつて、同じ人間だ。そんなこた遠慮に及ばぬ」

と澤山の部落民がそこに居るのも構はず喋り立てる。忽ち十四五人の男が現はれて、

「ナアに失禮な事をぬかす、やつてやれ」

と言ひ乍ら、下司熊の手足を取り、ヨイサヨイサと祭の酒に酔うた奴斗りが、矢賀橋の側までかいて行き、メツタ矢鱈に頭をなぐる、打つ蹴る、非常な大騒ぎとなつた。宇一は部落民の方へ分け入つて、いろいろと下司の爲にあやまつてやつてみた。喜樂は懷中の天然笛を取り出して、一生懸命にヒューヒューと吹き立てた。何と思ふたか、一人も残らず暴漢は逃げて行く。

そこへ巡回の巡查がやつて来て、下司熊を勞はり八木まで送り届けてくれた。喜樂も宇一も巡查の後に従いて八木の橋詰まで歸つて来た。来て見れば橋の西側に劇場があつて、芝居が始まつてゐる。勸進元は下司熊の父親の下司市といふ可なり名の賣れた顔役である。下司熊は喜樂や宇一を樂屋の中まで引張て行き裸になつて見せて、
下司「あゝ喜樂サン、折角に世話になつた牛の金が最前の喧嘩でおとしたとみえて、これ此通り一文も無い」
としらばくれてゐる。後から事情を探つて見れば、實際は五十圓に牛を賣り、ワ

ザとに八百長喧嘩を仕組み、一文も残らず引つたくつてやるといふ計略に乗せられたのであつた。又藤田の來たのも、下司や宇一との計略に依つて喜樂の牛を賣らし其金をせしめようといふ計略であつた事が判明したのである。それが分つたので喜樂は神懸になり、腹の中の憑靈に向つて、
喜樂 『なぜ喜樂の肉體がこんな目に會うてるのに知らさなんだか、言はいでもよいこと許り喋る癖に、なぜかう云ふ時に知らしてくれぬのだ。もうこれからお前の言ふことは聞かぬ。サア私の體からトツトと歸つてくれ』
と腹立紛れに呶鳴り立てた。さうすると暫く静まつて居つた玉ゴロが、又もや喉元へこみ上げて來て、小さい聲で、

『アツハ、ハ、ハ、馬鹿だのう』

といったぎり、何と云つても、キウともスウとも答へてくれぬ。とうとう泣き寝入りになつて了うた。

下司熊は其後須知の岩清水といふ所で、村の神官と謀し合せ、觀音の木像を土の中へ深く埋けておいて、「サテ自分は神さまのお告に依り岩清水の或地點に觀

音さまが埋まつて御座ることを聞きました、一ぺん調べさして頂きたい」と區長の宅へ頼みに行つた。それから區長の許しを受けて、宮の神主と共に掘り出しに行つた所、觀音の木像が出たので、それを御神體とし、船越某の家で祭壇を作り、所在神佛の木像を古道具屋の店のやうに祀りこみ、二三十本の幟をあちら此方に立て、お大師さまの御夢想の湯だと云つて、湯をわかし、患者を入浴せしめなどして、澤山の愚夫愚婦を集めて居た。そして觀音の木像が神さまのお告げで現はれたといふので大變な人氣となり、一時は非常に繁昌してゐたが遂に警察から料料を取られ、拘留に處せられ、それより段々信者が來なくなつて了ひ、やむを得ず、岩清水を立つて、再び園部へ舞ひもどり、神さま商賣もテンと流行らなくなつたので、再び博徒の群に入り、とうとう鞆丸炎を起して夭死して了つた。泰平も亦二三年を経て急病でなくなつて了つた。牛を下司に取られたといふので、又々由松が怒り出し、

由松「此神は盲神だから、兄貴の馬鹿がだまされて居るのを、黙つて見てやがつた、腰拔神だ。モウ俺の内にはおいてやらぬ」

といつて再齋壇を引つくり返し、暴れまはるので、喜樂も安閑として居る譯にも
行かず、此上如何したらよからうか、一つ神さまに伺つて見ようと、産土の社に
参拜して神勅を受けた。其時小松林命喜樂に神懸りして、
「一日も早く西北の方をさして行け、神界の仕組がしてある。お前の來るのを待
つてゐる人がある。何事にも頓着なく速にここを立つて園部の方へ向つて行け！
と大きな聲できめつけられた。それより喜樂は故郷を離れる事を決意したのであ
る。」

(大正一一・一〇・一一 舊八・二一 松村眞澄録)

第四篇 山青水清

第二章 參綾（一〇三三）

舊六月の暑い最中であつた。老祖母や修業者に無理に別れを告げて、只一人穴太を離れ北へ北へと進み行く。道程殆ど二里ばかり来た處に、南桑田、船井郡の境界の標が立つて居る。其處には大井川の清流をひいた、有名な虎天關と云ふのがある。虎天關の傍に枝振りよき竝木を眺めて小さき茶店が建つて居た。喜樂は何氣なく其茶店に立寄つて休息をして居た。

三十あまりのボツテリと肥えた妻君が現はれて澁茶を汲んで呉れた。さうして喜樂の異様な姿を眺めて、

女「貴方は神様の御用をなさる方ぢや御座いませぬか」

と云ふ。喜樂は即座に、

喜樂「私は神様の審神をする者で御座います。随分其處ら中の教會を調べて見ま

したが、狐や狸のお臺サンばかりでした。アハ、ハ、ハ、ハ」

と手もなく笑つて居る。此女は疊みかけた様に、

女「モシ先生、私が一つ頼み度い事があります。私の母は今綾部に居りますが、元は金光様を信神して居ましたが、俄に艮の金神さまがお憑りなさつて澤山の方が御神徳を頂き、金光教會の先生が世話をして居られますが、母に憑つた神様の仰有るには、私の身上を分けて呉れる者は東から出て来る。其御方さへ見えたならば出口直の身上は判つてくると仰有いましたので、私等夫婦は態と此道端に茶店を開いて往來の人さまに休んで貰ひ、母の言つたお方を探して居りました。大方貴方の事かと思はれてなりません。何卒一度母の身上を調べてやつて下さるか。これが母の神様が御書になつたお筆先で御座います』
と出して來たのが、バラバラの一枚書きの筆先であつた。
喜樂は此筆先を見て、高熊山の修業の中に於て靈眼にて見聞したる事の或部分に符合せるに驚き、婦人の依頼を受けて近々に上綾する事を約し、園部の廣田屋と云ふ旅館に落着き、あちらこちらと知己を訪問して靈學の宣傳に従事しつつあつた。

舊八月二十三日、初めて綾部裏町の教祖の宅を訪問し、二三日滞在して居た。

然るに金光教の教會の受持教師なる足立正信を始め、世話係の中村竹造、村上清次郎、西村文右衛門等に、極力反對運動をされ、時機未だ至らずとして教祖に暇を告げ、綾部の地を去つて園部村の字黒田、西田卯之助の座敷を借つて神の道を宣傳しつゝあつた。種々の神憑りに關する面白き話は此地方に於ても澤山目撃したり遭遇したる事あれども、岐路に入る虞ある故此處には省略して置く。園部の上本町に奥村徳次郎と云ふ熱心な信者があつた。あまり澤山な信者が喜樂を訪ねて來るので、園部町の有志は信仰は免も角土地繁榮の一策として園部の公園内に立派なる布教所を建設し、喜樂を、此處に永住せしめむと、土地の有志が東西に奔走し、話も大方纏まつて居る所へ、綾部から出口教祖のお使として、四方平藏氏が遙々訪ねて來た。

其時喜樂は園部川の大橋の下流で漁遊びをして居た。其處へ平藏氏がやつて來て、河の堤から、平藏「モシモシ、上田さまは此邊に居られませぬか、只今黒田のお宅へ參りましたら、園部の河原へ魚取りに行かれたとの話故、此川縁を傳うて此處迄來ました」

と云つて居る。喜樂は川の中から、

喜樂「ハイ、上田は私です。貴方は先頃手紙を呉れた綾部の四方サンですか。綾部はもう懲々しましたから行くのは止めますわ。今面白い最中だから、モチツと魚をとつて歸りますから、日の暮に来て下さい」

と云へば四方氏は堤の上から、

平藏「そんなら仕方ありません。私は園部の扇屋で今晚泊りますから、又お訪ね致します」

と云ひ乍ら、四方氏は大橋を渡つて扇屋をさして行つて了つた。喜樂は漁を終り、黒田の宅へ歸り着物を着換へ、園部の扇屋に四方氏を訪ねて見た。さうして今度は足立、中村其他の役員には極内々で、教祖と自分とが相談の上、喜樂を迎へて来た事が分つた。斯うなると自分も敵の中へ飛込む様なものである。餘程の覺悟をせなくてはならぬと思ひ乍ら、早速綾部へ行く事を承諾し、往復八里の夜の道を穴太へ歸り、老祖母や母に愈綾部に行く事を云ひ、産土の大神に祈願をこらし、夜の明るる前漸く園部の扇屋へ歸つて来た。されど四方氏は喜樂が穴太へ歸つて

來た事はチツとも分らなかつた。

それより四方氏と共に黒田の宅へ歸り、種々と支度をなし、五時頃から黒田を立ち出で、漸くにして檜山迄着いた。日はズツポリと暮れて來た。少し目の悪い四方氏は最早歩く事が出来なくなつて來た。止むを得ず樽屋と云ふ宿屋へ投宿した。忽ち大雨降り來り、雷鳴さへも轟いて實に物凄き天地となつて來た。樽屋の裏の離座敷を與へられ、喜樂と四方氏は四方山の話に耽り乍ら、夜の一時頃になつて漸く寢に就いた。朝の四時頃に四方氏は目を覺まし早くも天津祝詞を奏上して居た。喜樂は其聲に目を覺まし、慌て起き出で見れば、相變らず車軸を流す様な大雨である。四方氏は、四方「先生、お目覺めですか。早うから八釜しく申しましてお目を覺まして濟ませぬ。昨夜は何とはなしに氣が欣欣しませて一睡も出來ませなんだ。神様が大變にお勇みだと見えます。併し乍ら昨夜から引き續いて偉い大雨です。これでも止みませうかな」

と心配相に尋ねる。喜樂は一寸目を塞ぎ伺つて見て、

喜樂「九時になればカラリと晴れます。それまで、マアゆつくり話を承りませう。貴方は綾部から来たといはれましたが、お宅は大變な山家の様に思ひますが違ひますか。家の裏に綺麗な水が湧いた溜池があり、前は一尺ばかりまはつた枝振りの面白き松の樹がある。さうして少し右前の方の街道に沿うて小屋の様なものがあり、其處に菓子なんかの店が出してあり、六十位のお婆アサンが見えませんが違ひますか」

と尋ねて見た。四方氏は吃驚して、

四方「ハイ、其通りです。そんな事までよく見えますか。あんたは、さうすると稲荷でも使ふて居られるのですか」

と不思議相に顔を覗く。喜樂は首を振り、

喜樂「イエイエ、そんな事はありません。靈學の一部、天眼通で見たのです。誰

でも眞心にさへなれば、天眼通位は直に判る様になりますよ」

四方「ア、それで安心しました。私は金光教の古い信者で御座いましたが、こんな處から五里も六里もある處が見える様なものは、狐か狸だと金光教の先生が云

ひました。もし先生が綾部へ行つて、そんな事でもなさらうものならサツパリ狐使ひだと云つて、ボツ歸されて了ひますから、綾部へ御いになつたら、其魔法だけは暫くやらぬ様にして下さい。疑を受けては貴方の御迷惑ですからなア」

喜樂「そんな分らぬ奴ばかり居る所なら、もう私は御免蒙つてこれから歸ります

ワ」

四方「そんな短氣を出さずに兔も角教祖様の御内命で来たのですから、一度綾部を見ると思ふて来て下さい。此頃は和知川の鮎が澤山にとれますから、鮎食ひに行くと思つて、マアマア兔も角一遍来て下さい。私も今此處で先生に歸られては教祖様に對し申譯が御座いませぬ」

喜樂「第一貴方に靈學を諒解して貰ふておかなくてはなりませんから、狐を使ふか、使はぬかと云ふ事を一遍此處で實地を見せませう。さうして貴方に承知が行つたら行く事にしませう。そんな處まで鮎食ひに行かなくても園部で澤山ですか

ら……」

四方「私の様な素人にでも、そんな天眼通が行へますだらうか」

喜樂「マア其處に坐つて目を塞ぎ、兩手を組んで見なさい」

四方「そんなら頼みます」

と四方氏は素直に座敷の眞中に正座し、手を組み目を塞いだ。喜樂は、

喜樂「サアこれから四方サン、天眼通を授けます。今私が……ソレ見……と云

つたが最後、何かの姿が映りますから、それを話して御覽……」

四方「ハイ……」

と云ひ乍ら、一生懸命に目を塞ぎ早くも靈感者になつて、少し鼻息を荒くし體を

ピリピリと慄はせて居る。喜樂は、

「それ見い！」

と大喝一聲した。

四方「ハイ、見えました。小さい古き藁葺の家が一軒、前横の方に又一つ汚い家

があつて、其處に美しい水の湧いた池があります。さうして裏の方には榎の木や、

棕の大木が見えます。細い綺麗な河が道の下を流れて居ます」

喜樂「ア、それで愈天眼通が開けました。それは私の生れた家ですよ。もう宜し

い
』

と云へば、四方氏は組んだ手を離し目を開き、

四方『何とマア、結構な神様ですな。イヤもう感心致しました。流石教祖様も偉

いわい。多勢の役員や信者に隠れてお迎へして来いと仰有った丈の價値があり

ます。こんな事が分れば、三千世界一度に見え透くと仰有る神様の御用が充分に

勤まりませう』

と無性矢鱈に喜んで居る。それから病氣の伺ひや天眼通の試験を色々として、四

方氏に先づ靈學の尊い事を悟つて貰ひ、朝飯を食ひ愈これから出立しようとする

時、さしもの大雨もピタリと止まり、ガンガンと日本晴れの空に太陽が照り輝き

出した。四方氏は、

四方『ヤア、仰有った通り九時になつたらカラリと霽れました。ほんに靈學と云

ふものは結構なものですな。これから綾部へ歸りましたら、金光教の先生や役員

どもが愚圖々々云ふと面倒で御座いますから、ソツと裏町の教祖さまの宅へ参り

ませう』

と云ひ乍ら六里の山坂を越えて其日の午後四時頃、漸くにして裏町の教祖の宅へ安着した。

誰が喋つたのか早くも信者の四方與平、黒田清子、四方すみ子、鹽見じゆん子を始め七八人の信者が集まつて来て、

「平藏サン、結構な御神徳を頂きなさつた。よい先生を迎へて来て下さいました」などと喜び勇み、金光教の舊信者へ通知に各自廻つて了つた。此勢に足立正信氏は吃驚して中村竹造を裏町へ遣はし、色々と水をさし妨害を加へた。されど出口教祖を始め、四方平藏氏の勢があんまり猛烈なので、到頭中村竹造も我を折り教祖の命に服従して了つた。

四方源之助、西岡彌吉、西村文右衛門、村上清次郎、西村庄太郎、四方伊左衛門等と云ふ世話がかり、裏町の宅へ集まり來たり、平藏氏と教祖の説明によつて非常に共鳴し、良金神様の金の字をとり、日の大神様、月の大神様の月日を合せて金明會と云ふ團體を組織し、信者は日に夜に遠近より集まり來り、裏町の狭い倉の中では身動きもならぬやうになつたので、本町の中村竹造の本宅へ金明會を移し

て了つた。四方氏は得意の天眼通を振りまはし神占をしたり、病氣平癒を祈つたりして非常な人氣である。只の一回位、靈學を教へて貰ふて、四方平藏サンはあれ丈け御神徳を貰ふたのだから、修行さへしたら誰でも神徳が頂けるだらうと、幽齋修行の希望者が瞬く内に二十人あまりも出来て來た。喜樂は向側の西村庄兵衛と云ふ信者の裏の離家を借つて其處に寢泊りをしたり、世話方に色々と神の話を聞かして居た。金光教會の足立正信氏は最早策の施すべき所なく、村上清次郎、中村竹造、四方すみ、鹽見じゆん、黒田清などの宅を訪問して、いろいろの反對運動を試みたけれども、到底效を奏する事が出来なくなつて來た。

教祖は足立氏の境遇を氣の毒に思ひ、小遣錢や米等を贈つて金光教を脱退し、教祖の教に従へと信者を交る遣はして勧められた。けれども足立氏は頑固として應ぜず、陰に陽に反對の氣勢を擧げ、足立「上田と云ふ狐使ひをこんな處へ引張つて來て、山子を始め出したから騙されぬない様にせよ」

と中村竹造や村上房之助等を遠近の信者の宅に遣はし、色々と非難攻撃を始めた。

中村は自分の家を金明會へ貸しておき乍ら、足立の命令に従つて反對運動を晝夜の區別なくやつて居た。併し乍ら時の勢には抗すべくもあらず、一人も信者が行かなくなり、手も足もまはらぬ破目に足立氏は陥つて了つた。そこで止むを得ず足立氏は我を折つて、

足立「何卒改心するから金明會へ使つて下さい」

と頼みに來た。金明會の役員連は速に協議會を開いた結果、

「足立正信氏は信者の受けも悪し、やと醜關係をつけ、神の名を汚して

居るから、此際絶對に金明會へ這入る事は謝絶するがよい」

と云ふ事に協議が纏まつて了つた。足立氏が尾を振つて來たのは、心の裡から金

明會へ心従して居るのではない。老母や子供が忽ち糊口に窮する處から、一時の

窮策として表面心従したと見せかけ時機を見て金明會を轉覆させ、喜樂先生を放

り出す計略なる事は、今迄の足立氏の行動に徴して明白だから、今度の好い機會

を幸ひに一切の關係を絶つ方が上分別だと、今まで同氏の熱心な教養をうけたも

のさへ、極力排斥を主張する様になつて來た。喜樂は足立氏の境遇を憐れみ、且

又今迄金光教を信じて居た役員や信者の人情の浮薄冷酷なるに呆れ果て、

「今日は人の身の上、明日は吾が身の上と云ふ事がある。こんな薄情な人間の處へ居つては到底駄目だ。自分さへ此處を立ち去つたならば足立氏親子の困難は除かれるだらう。世人の困難を救ふべき神の取次が人を困らせてはならない」

と思つたから、四方氏を始め重なる役員に向ひ、

上田「私が此處へ來たために、足立氏親子が困難を來すべき結果を生じたのだから、私は同氏に對して濟まないから今日から歸ります。何卒足立氏と仲良うして

神様の御用をして下さい」

と申し込んだ。そこで數多の役員は大に狼狽し、鳩首謀議の結果、

「足立氏の處置に就いては上田先生に一任しますから、是非とも教祖様の側に居て、大本の宣傳に力を盡して下され」

と異口同音に頼み込む。

そこで喜樂は足立氏を金明會の副會長に任じ、金明會の名の許に仲良く神務に奉仕する事となつた。出口教祖も足立氏の身の上につき心密かに非常な心痛をし

て居られたが、喜樂の同情ある處置に對し、非常に安心をしたと云つて感謝せられた。足立氏は大變に喜び、役員信者も喜樂の赤誠に感じ、直に今迄の態度を改め、教祖に次いで喜樂を師匠と尊敬し出した。一時は大爭亂が勃發しさうの模様であつた金光教對金明會も、茲に圓滿な解決が出来て、雙方とも心持克く勇んで和合の裡に神様の御用に盡す事を得たのである。

(大正一一・一〇・一二 舊八・二二 北村隆光録)

第二章 大僧坊(一〇三四)

喜樂の入綾に先立ち茲に一つの珍話がある。明治三十一年の八月、八木の福島に二三回頼まれて、園部黒田の會合所から、はるばると山坂を越え、參綾して教祖に面會し、四方すみ子、黒田きよ子、四方與平氏などの大贊成を得、出口教祖と共に、艮の金神様のお道を廣めようとした時、足立氏や中村氏の猛烈なる反

對に遭ひ、教祖より……時機尚早し、何れ神様の御仕組だから、時節を待つて御世話になりますから、一先づ歸つて下さい……と云はれて、是非なく園部黒田の會合所へ歸り、それよりあちら此方と宣傳に従事して居た。

黒田を發つて北桑田の方面へ布教を試みようと思ひ、五箇庄村の四谷の少し手前の、二十軒ばかりの村に差かかった。日もソロソロ黄昏時、どこかに適當の宿を求めようかと懷中を探つて見れば、懷にはたつた二十錢しかない。……ママよ、困つたら野宿をしてやらう……と腹をきめて疲れた足を引ずつて行くと、山から粗朶をかついで歸りて来る二三人の村人と途伴れになつた。ゆくゆく下らぬ話をしてゐる内にも、話は自然病人のことや憑者のことに移つて行つた。さうすると其中の一人が、

「あなたは憑者をおとす御方ですか、隨分誓願寺の祈祷坊主や稻荷下げが來ますけれど、中々おちぬものです。此村にも不思議な憑者で困つて居る者がありますと朴訥な村人は、行手に見える道の左側の可成り大きな一棟の家を指し乍ら、
「あすこの爺は小林貞藏といひますが、どういふ譯か、十五六年前から、腹の中

から大きな聲が出る病氣で、本人の知らぬことをズンズンと喋り立てます。貞藏サンは何かかして聲の出ない様にと骨を折るのだが、何うしても止らぬのが不思議ですよ。最初の間は自分から大變に警戒をしてゐましたが腹の中の憑者は……おれは立派な神さまだ……と名のるのを、いつのまにやら信じて了ひ、其聲の指し圖通りに相場をしましたが失敗の基で、田舎では可なりの財産を大方なくして了ひました。只今では駄菓子の小賣をしたり、ボ口材木屋をして暮してゐますが、腹の聲はまだ止まず、いろいろ雑多とつまらぬことを喋るので、貞藏サンもこれには持て餘してゐます」

と何氣なく喋り立てる。喜樂は心の中で、……今夜のおれの御宿坊はここだなア……と自分ぎめにきめて了ひ、何食はぬ顔して其家の店先へ行つて見ると、一文菓子少し計り竝べてあり、店先には五十計りの額口のバカに光つた、鼻の高い丸顔爺が、厭らしい笑を湛へてすわつてゐた。喜樂は、喜樂「一寸休ませて下さい」

と縁側に腰を卸して、ムシヤムシヤと駄菓子をつまんで食ひ出した。五錢十錢十

五錢と菓子くわしを平たいひらげ、貧弱ひんじやくな菓子箱くわしばこはモウそれでおしまひになつて了しまつた。爺おやぢは呆あきれて喜きらく樂らくの顔かほを見みつめて居ゐた。喜きらく樂らくは、

喜きらく樂らく「お菓子くわしはこれで品しな切れですか、せめてモウ一圓いちゑん計ばかり食くひたいものだ」

といつた。爺おやぢはますます呆あきれ、丸まるい目めを剥むき出だし、

爺おやぢ「お前まへサン、何なんとマアお菓子くわしの好すきな方かたですな。何どうしてそないに澤山たくさんあがられますか、お腹なかが悪わるうなりますで……」

と注意ちうい顔がほに云いふ。

喜きらく樂らく「わしが食たべるのぢやない、わしは元來ぐわんらい菓子くわしは嫌いやだが、皆みな私わたしに憑ついてゐる副ふく

守しゆ護ご神じんが食たべるのぢや。サアお金かねを取とつて下ください！」

と後生ごしやう大だい事じに持もつて居ゐた身しん上じやうありぎりの二十錢にじつせん銀貨ぎんくわをポぽンと放はなり出だした。

「へー」

と爺おやぢは益ますす目玉めだまをまん丸まるうして、

爺おやぢ「あなたにもヤツパリ憑つき者がものありますか、ふしぎな事こともあるものぢやなア。私わたしも

ドテライ憑つき者がもの居をつて、困こまりますのぢや」

と云ひ乍ら、自分の身の上を打あけて、果ては、

爺「どうぞ此憑者を退かして頂く譯には行きますまいか」

と憑靈退散の相談を持ちかけて来た。喜樂はヤツと安心して爺の勧むる儘に、家
に上りこんで、夕飯を頂き、そしてソロソロ鎮魂歸神の法を實施する段取となつ
た。

喜樂は審神者となり爺は神主となり、主客相對坐して奥座敷にすわり、懐から
神笛を出して、ヒューヒューヒューと吹き立て、天の數歌を二回唱へ上げ、「ウ
ン！」と力をこめるや否や、元來ういてゐた靈の事だから、ワケもなく大發動を
始めた。其發動状態が頗る奇抜なもので、青い鼻汁が盛に出る。ズルズルズル
ポトポトと際限なく膝の上に着る。爺サンはしきりにそれを氣にして、組んで
居た手を放して、懐から紙を出して、チヨイ チヨイと拭きにかかる、又手を組
む、ズルズルと鼻汁が出る、爺は手をはなして、

爺「一寸先生失禮」

といひ乍ら、懐から紙を出してツンとかむ、そして又手を組む、鼻汁がツルツル

と出る、又手を放し、懐の紙を出してハナを拭く。そして大きな聲で、

「ヴェー」

と唸り、うなつた拍子に、口が細く長くへの字になる。五六回もこんな事を繰返すのを、黙つて見て居たが、霹靂一聲、

「コラツ！」

と喜樂は大喝してみた。爺は此聲に驚いて、一尺許り手を組んだ儘飛上つた。

喜樂「モウ鼻汁をふく事は相成らぬ。何神か名を名乗れ！」

と問ひ詰めた。爺サンの鼻汁は依然として、遠慮會釋もなくツルツルと流れおつる。拭く事を禁ぜられたので、鼻汁が連絡して了ひ、鼻の穴から膝まで、つららのやうに垂れさがる。喜樂は委細かまはず、たたみかけて、

喜樂「早く名を言へ、早く早く」

とせき立つれば、爺の憑靈は肘をはり、口をへの字に結び、しかつめらしく、

爺「オーオ、俺は、俺は……のう」

と腹の底から途方途轍もない高い聲が湧いて来る。そして又、

爺おやぢ 『おれはおーれはのう、おれはのう』

と連続れんぞくてき的に『俺おれは』を續つづけてゐる。

喜樂きらく 『なんぢや辛氣しんきくさい、其先そのさきを言いへ』

爺おやぢ 『俺おれはのう、ウツフン、アツハ、、、』

喜樂きらく 『早はやく名乗なのらぬか、同おなじ事許ことばかり、何なんべんも何なんべんも、くり返かへしよつて、辛氣しんき

くさいワイ』

爺おやぢ 『オ、俺おれはのう、俺おれはのう、ク、、、鞍馬山くらまやまのダ、、、、大僧坊だいそうぼうだワイ』

と芝居しばゐがかりの大音聲だいおんぜう、

喜樂きらく 『フ、ン、何なにを吐ぬかすのだ。鞍馬山くらまやまには大僧正だいそうじやうなら居ゐるが、大僧坊だいそうぼうなどと言いふ

天狗てんぐがあるものか、有ありのままに白状はくじやうせい。果はたして鞍馬山くらまやまの天狗てんぐなれば、鞍馬山くらまやまの

地理位ちりべらゐは知しつてゐるだる。鞍馬山くらまやまは何なんといふ國くにの山やまだ』

爺おやぢ 『アツハ、、、ア、バカバカバカ、馬鹿者ばかものめ奴め！ 鞍馬山くらまやまの所在ありかが知しれぬ様やうな事こと

で、審神者さしにを致いたすなぞとは片腹痛かたはらいたいワイ。知しらな、云いつて聞きかさうか、山城やましろの國くに

の乙訓郡おとくにぐんであるぞよ』

喜樂「鞍馬山は乙訓郡ではないぞ。自分の居る所さへ分らぬ様な者が、鞍馬山の
大僧坊とは駄法螺を吹くにも程がある。其方は擬ふ方なき野天狗であらうがなア」
爺「見破られたか、残念やな、ク、ク、口惜やなア」
と鼻汁天狗は飽くまで芝居氣取りで、切り口上で呶鳴つてゐる。

喜樂「恐れ入ったか、貴様はヤツパリ野天狗であらうがなア」
爺「オ、オウ、俺は俺は、ヤツパリ野天狗であつたワエ」

言ひも終らず、爺の體は宙に浮かんで、靜坐せる審神者の頭の上を、前後左右
縦横自在にかけり出した。そして隙をねらつて、目玉のあたりを足げにせうとの
魂膽、實に險呑至極であつた。乍併これしきの事にビクツク様では審神者の役は
つとまらないと、咄嗟に組んだ手をといて右の人差指に靈をかけ、爺の體に向け
て、喜樂は指先を右に一回轉した。それに従つてクルリと爺の體は宙に浮かんだ
まま、鼻汁迄が圓を描いて、右に一回轉する。續いて指を左にまはせば、爺の體
はそれにつれて左に一回轉する。指をクルクルと間斷なくまはせば、爺の體
もクルクルクルとまるで風車其ままであつた。此荒料理には流石の野天狗も往生

したと見え、全身綿の如く疲れ切つてへトへトになり、とうとう疊に平太ばつて了つた。そして切りに首をふり乍ら、顔を疊にひつつけた儘、
爺「一切白状致します、御免下さいませ。モウ斯うなれば隠しても駄目だから……」

と以前の権幕はどこへやら、猫に追はれた鼠のやうにちぢこまつた。喜樂の質問につれ逐一自白したが、それはザツと左の通りであつた。

「此爺の叔父に一人の財産家があつた。それを此爺が十四五年前、惡辣なる手段でたらしこみ、財産全部を横領して了つた。叔父は憤怒と煩悶の餘り、精神に虚隙が出来、其結果野天狗につかれ、とうとう山奥にいつて首を縊つて往生して了つた。死骸は永らく見つからず、二三年してから白骨となつて、山の奥にころがつてゐた。餘りの悔しさ残念さに、叔父の亡靈は此爺が酒にくらひ酔うて、道傍に倒れてる隙を考へ、野天狗と一所に憑依し、そして鞍馬山の大僧坊と偽り、米が非常に下がるから早く相場をして賣にかかれ、大變な金を儲けさしてやると云ふので、賣方になると米が段々と上がつて來る。今度は又米があがるから買方に

なれと云ふので、其通りやつて見ると、大變な大下がり喰ひ、何回となくたばかられて、大損害を重ね、折角叔父から手に入れた山林田畠も残らず賣りとばして了ひ、駄菓子屋とへボ材木屋とまで零落させて了つたのである、尚最後には何とかして命まで取る積で居つた所、今日計らずも、靈術非凡な審神者に看破されたのでムいます」

と大體の自白をした。そして鼻汁が盛んに出るのはつまり首をくくつた時、鼻汁を垂れた其亡靈の所爲である。白骨の主を手あつく葬る事を爺が約束したので、亡靈はヤツとのことで、爺の體から退散した。乍併退散したといふのは表向で、ヤツパリ此爺の體に潛み、時々妙な事をやらすのである。此爺さんは明治四十五年頃大本へ訪ねて来たことがある。今は家も何もかも賣つて了ひ、大坂方面へ出稼ぎに行つたといふことである。

(大正一一・一〇・一二 舊八・二二 松村眞澄録)

第二三章 海老坂「一〇三五」

小林貞藏氏の宅で四五日計り滞在してゐる間に、村中の老若男女が集まり、鎮魂を受けたり、神懸の修行をしたりして、神徳の廣大なるに感謝し、全部信者となつて了つた。小林氏はせめて一月計り自分の宅に居つて貰ひ度いと頼むのも聞かずに此家を立出で、信者から二三圓計りの禮を貰ひ、それを以て北桑田へ渡らむと、日の暮前から神の命のまにまに海老坂峠まで差かかつた。日はズツポリと暮れ、其上に坂路のこととて、最早一步も進む事が出来なくなつた。此坂路の中途に古寺が建つてゐる。そして古い堂に地藏が祀つてあつた。止むを得ず喜樂は此堂へ這入つて一夜を明かさうと、佛壇の前でゴロリと横たはり其儘眠に就いた。夜中時分に妙な物音がしたので、フト目を醒まして見れば、黒い提燈をさげた大坊主が堂の入口に立ち、大きな聲で心經を唱へてゐる。喜樂は驚いて起上ると、坊主は大きな聲で、坊主「斷りもなく此堂に寝てゐる奴は何者だ。怪しからぬ、サア早く出て行け！」

と唼鳴りつける。喜樂は起あがり、一寸頭を下げて、

喜樂「お和尚サン、誠に濟まぬ事を致しましたが、私は靈學の修行者で、神道を開きに歩いて居る者で御座りますが、思ひの外道が遠かつたので、途中に日が暮れ、一寸失禮さして貰ひました。どうぞ今晚丈此處で泊めて下さいな」

坊主「神道の行者が佛の堂で泊るといふ事があるものか。お前サンはイカサマ神道家だ。賣僧坊主だなア」

と自分の坊主たる事を忘れて、聲に角を立てて唼鳴つてゐる。

喜樂「神さまも佛さまも元は一株だから、そんな區別を立てずに今晚丈泊めて下さい」

坊主「ウンさうか、神も佛も一株だといふのか。中々お前は能う分つたことを言ふ。そんなら今晚は泊まつて下さい。併しここでは仕方がないから庫裏の方へ来て下さい。何だか地藏堂が氣に掛つて寝られぬので、一寸見に来たのだ。お茶なつと進ぜよう」

と打つて變つた碎け方に喜樂はヤツと胸をなで卸し、大坊主に導かれて、庫裏の

方へついで行つた。

此寺は此坊主一人より外に誰も人らしい者は住んで居なかつた。ソロソロと身の上話を互に始めて見ると、不思議にも此坊主は喜樂の伯母の嫁入つて居た、南桑田郡千代川村字今津の人見彌吉といふ伯父の兄の子であつた。子供の時には四五回も遊んだことのある人見與三郎といふ男で、放蕩の結果親の財産を残らずなくして了ひ、それから園部監獄の看守となり、巡查も勤め、これも又酒の爲に免職させられ、それから易者を習ひ、眞言祕密の法を覚え、無住の寺を幸ひ、留守坊主に雇はれてゐた事が分つた。此奇遇に兩人は打とけて、いろいろの事を語り合ひ、ここに四五日逗留して、人見に鎮魂歸神の靈術を教へてやり、後日の再會を約して海老坂峠を北へ渡り、安懸といふ田舎の村迄辿り着いた。

さうすると俄に警鐘が響く、太鼓が鳴つて来る。村人は「野添に火事がある！」と云つて、一生懸命に鳶口や龍頭水、水桶などを持って駆出す。喜樂も村人の後から走つて野添といふ小村まで従いて往つた。併し乍ら何處にも煙は立つてゐず、火事らしきものも無かつた。されど野添の寺の鐘や太鼓が頻りに鳴つてゐる。向

うから走つて来た人の話によると、深い井戸を掘つてみた所、俄にウラが来て、井戸掘人足が埋まつて了つたから、掘り出す爲に、近在の人を集める爲の警鐘太鼓であつた事が分つた。

行つて見れば百人計りの人が井戸の端へ寄つて、鶴嘴や鍬で井戸から四五間わきの方から掘りかけてゐる。グツグツしてゐると、埋つた土砂と水の爲に息が切れて了ふ虞がある。喜樂は忽ち大地に瞑目靜坐して神勅を受けた。さうすると腹の中から、

小松林だ

といふ聲が出て来て、

種油を五六升、井戸の中へまくか、油がなければ酢を一斗計り撒け

といふ神勅が下る。そこで其由を村人に告げてやると、忽ち酢屋から五升樽を二つ計り持つて来て、井戸の中へダブダブと投込んだ。そして大勢がよつて集つて二時間計りかかつて、埋つた人足を引上げて見た。幸ひに息は絶えて居なかつた。其男は口中某といふ男であつた。其男の話によると、

口中くちなか「俄にはかにウラが来て土砂どしやに埋うめられた時とき、幸さいはひ横よこの方ほうから出でてゐた大きな石いしの下したに體からだをのがれ、腰こしから下したは水みづにひたり、體からだ中ちゆう土砂どしやにつめられたけれ共ども、突つき出でた石いしのおかげで首丈くびだけは自由じゆうに動うごく事ことが出で來きた。追々おひおひ息いきは苦くるしくなつて、最も早はや生命いのちが終をはるかと思おもつて居ゐると、俄にはかに酔すの匂におひがして來きて、息いきが樂らくになりました。其その時ときにどこともなしに小松林こまつばやしが……今いまお前まへの生命いのちを助たすけてやらう……といふ聲こゑが聞きこえました」

と嬉うれし泣なきし乍ながら物語ものがたつてゐる。大勢おほせいの人々ひとびとは喜き樂らくに向むかつて、非ひ常じやうに感かん謝しゃをし、二三日にさんにち逗留とつりうしてくれといふので、口中くちなかの家いへに泊とまつて、靈れい學がくの話はなしをしてゐた。併しかし此村このむらは大部分だいがぶん船岡ふなをかの妙靈教會めうれいけうくわいじよの信者しんじやであつた。そして其その教會けうくわいの會長くわいちやうといふのが、喜き樂らくの伯父をぢに當あたる佐野清六さのせいりくといふ教けう導だう職しよくであつた爲ため、宗しゆう教けう上じやうの關くわん係けいから村人むらびとの止とめるのも聞きかず、園部そのへの會合所くわいがふしよへ歸かへつて來きた。

それより此附近このふきんの人々ひとびとは船岡ふなをかの妙靈教會めうれいけうくわいへ參拜さんぱいの途次とじ、黒田くろだの會合所くわいがふしよへ參拜さんぱいして歸かへる者ものも澤山たくさんにあつた。又また小林貞藏こばやし氏しも澤山たくさんな信者しんじやを伴つれて、黒田くろだの會合所くわいがふしよへ幾度いくどとなく參まゐつて來きた。

因ちなみに海老坂えびさかの地藏堂ぢざうだうの留守坊主るすぼうずであつた人見與三郎ひとみよさぶろうは、何とかいふ法名はふめうを持つてゐたが忘れて了しまつた。大正六年頃たいしやうろくねんごろ大本おほもとへやつて来て、門掃かどはきや其他種々そのたいろいろの事ことを手傳てつたひふてゐたが、再び村人むらびとの請こひに依よつて、元もとの地藏堂ぢざうだうへ歸かへつて了しまつた。

船井郡紀井ふなぬぐんきゐの庄村木崎しやむむらきの、森田民もりたみといふ五十餘ごじふあまりの婆アサンばあさんに稻荷サンいなりがのり憑つり、澤山たくさんな信者しんじやが參拜さんぱいするのを聞きき、明治三十二年めいぢさんじふにねんの五月ごくわつの末すゑ、喜樂きらくは羽織袴はおりはかまをつけず、普通ふつうの百姓ひやくしやうのやうな風ふうをして、一ペンいつどんな神憑かむがかりだか調しらべて見みようと思おもひ、信者しんじやに紛まぎれて行いつて見みた。

産土うぶすなの大宮神社おほみやじんじやの一町計いちちやうばかり上うへの方にクツ屋やぶき葺きの小さい家いへがあつて、其横そのよこに六疊ろくでふ敷計じきばかりの新あたらしい紅殻染べにがらぞめの家いへが立たつてゐた。其前そのまへに小さい祠ほこらが赤あかく塗ぬつて建たててある。そして焼物やきものの狐きつねが四よつつ計ばかり祀まつつてあり、小ちひさき鈴すずをつつて、赤あかや白しろや黄色きいろの鐘かねの緒をが一尺五寸計いつしやくごすんばかり垂たれ下さがり、それに何歳なんさいの男をとことか女をんなとか書かいて五筋六筋いつすぢむすぢづつ下さがつてゐる。數十人すつじふにんの老若男女らうじやくなんによの參詣者さんけいしやを背後うしろにして、其婆アサンそのばあさんは祠ほこらの前まへにしやがみ、鈴すずをからからとふつては、

婆ばあ「あゝ左様さやうか、へー、さ様やつですか、オホ、へ、へ、へ、」

などと獨り言をいうてゐるかと思へば、又、

「只今何村の何某といふ何才の男が、病氣で困つて居りますが、これは如何したら直りますか？」

と云つては手を拍ち、

「あゝ左様か、分りました」

と云ひ、又次の伺ひをしては、

「あゝ左様か、そんなら大バコを煎じて吞ませばよいのですな。へー黒豆と柳の葉とまぜてどすか、ハイそない言うてやります」

と云うてる。一わたり伺ひがすむと、記憶のよい婆アサンと見えて、一々病氣の様子から藥のさしづをやつてゐる。不思議なことには、此婆アサンの指圖に依つて大體の病氣は治つたといふことである。そこで一つ可笑しい事は、一人の婆アサンが心配相な顔して伺つて居た。其次第は、

女「何遍嫁を貰つてもすぐに歸つて了ふので、兩親も心配を致して居りますが、嫁が育たぬのは何ぞ先祖の祟りでもあるのか、但は家相でも悪いのですか、一遍

伺うて下さい」

といふ。澤山の信者は一人も残らず歸つて了つた後には、お民といふ婆アサンと、今尋ねてゐる五十計りの女と喜樂と三人であつた。

お民は早速例の祠の前で伺ひを立て、

お民「義經大明神さま、桂大明神さま、玉房大明神さま、玉芳大明神さま」

と連呼し乍ら、以前の女の願を伺つてゐる。そして時々「ホ、ホ、ホ、」とこける

やうにして笑ふ。暫くするとお民サン此方へやつて来て云ふには、

お民「お前さんとこの息子はコレで嫁さんを五人貰うたでせう。皆歸つたのは肝

腎のお道具が衰になつてるから、それで皆歸つて了はれるのですから、此奴ア

一寸六つかしいものです。毛拔で抜いた所で又生えますサカえなア」

女「何とかお稻荷サンのおかげで治して頂く譯には行きませぬか」

と心配相にお民の顔を覗き込む。お民サンは首を傾け、

お民「マア信心して見なさい。信心さへ通つたら、神さまの事ですから、何とか

して下さりませう。サアもう歸つて下され。私はこれから一つ行をせなならぬの

です。神さまが大變お急きですから……」

といつて體よく歸して了つた。そしてお民婆アサンは喜樂に向ひ、

お民「先生、あなたは黒田の御方ですやう。信者に化けて私を調べに来なされたなア。神さまが先生に頼んで、教導職を受けるやうに手続きをして貰へと言つて

るやはりります。どうぞお世話をして下さいな」

喜樂「お前サンは普通の御臺サンと違つて仲々能う分る人だ。そして焼物の稲荷サンに向つていろいろと話しをして御座つたが、あんな焼物の稲荷サンが物言ひ

ますか」

と尋ねて見ると、お民サンは、言下に、

お民「へーへー言ははります共、今あの歸んだお方の息子はんの事を伺ひました

が、妙でしたよ。私がジツとして焼物の稲荷サンを見つめて居ると、稲荷サンの

股から、突然にポコンと が現はれ、先まで毛が一杯生えて居りましたので、

私が稲荷サンに向つて、……此男は蓑 だから、それで嫁さまが居りつかぬのだ

すか、と尋ねましたら、オ、さうだと言はれました。オホ、

と笑うて居る。そして、

お民「先生も一ぺんあの稻荷サンの前で問うて見なさい」

とすすめるので、稻荷の前にしやがんで、いろいろ問答をしてみたけれど、何ともかんとも一口も答へなかつた。それからお民サンの靈感者になつた來歴を尋ねて見ると、左の通り面白い經歷を物語つた。

お民「私と内の太吉サンと二人が薩摩芋や桑を作つてゐますと、毎年毎年薩摩芋を掘つて食ふ奴がある。雪隠のおとしわらを引張り出し、肝腎の肥にする糞まで食つて了うので、大方裏の山に棲んでる奴狐奴が芋や糞を食ふのに違ひないから、一つくすべて捕つてやらうと相談をきめて、太吉サンと私と倅の留吉と三人が、一方の穴を松葉でくすべ、一方から掘つて居た所、夫婦の狐が子二匹うんで居りました。おのれ糞ぐらひ狐めが……と、いきなり親子三人が備中鍬を振り上げて、其狐を四匹とも叩き殺し、皮は下木崎の新平サンに賣り、肉の甘い所は食つて了ひました。さうすると三日目から私の體中が、水腫れになり、苦しうて苦しうて堪らず、お櫃を開けると狐の顔が中に居る、雪隠へ行つても狐が居る。終ひには

何も彼も残らずそこらが狐の顔になり、恐い顔してねめつけますので、私が狐に向つて……コレお前妾が大事にして作った芋を毎年取つて食ひ、肥料にせうと思つた糞まで食たくせに、何が恨めしうてアタンをするのだと云ひますと、狐の親子四匹が、そこへ出て来て云ふには、芋を食たのも、糞を食たのも皆木崎の丸といふ犬の所作だ。それに私達親子の命を取り、皮を賣り、肉まで食うとは餘りだから、お前等親子三人の命を取り、弟の髻定の命も取らねば承知せぬと云ふて怖い顔して睨めつけました。そこで私が狐に向つて……ソラ誠にすまなんだ。お前もモウ斯うなつては仕方がない因縁ぢやと諦めて下さい。私等の命を取つた所で、お前の命が助かる譯もなし、何うぢやここは一つ相談だが、コレからお前を神々に祀つて上げるからどうぞ勘忍して呉れと頼んで見た所、中々淡泊した狐で……さうぢや、お前のいふ通り、命を取つて見た所で仕方がない、わしを祭つて呉れるのなら勘忍てやる、其代りに人を助けて、病氣を治したり、いろいろの事を知らしてやるから、お前は私の容れ物になつて、モウ今日限り仕事なんかすることはならぬぞ。其御禮に毎日七錢づつのお金をやらう……と云ひました。そして

四匹の狐に義經大明神、桂大明神、玉房大明神、玉芳大明神と名をつけて祭つて呉れと云ひましたので、此赤い祠を建てて祭つて居ります。さうすると澤山の人が参つて来て、一文供へていぬる人や五厘包んで呉れる人や、中には二十錢もはり込んで供へてくれる人もありますが、妙なもんで、一月ためて置くとヤツパリ二圓十錢で、一日に七錢の割になつて居ます。七錢さへあれば一寸米が七合計り買へますから、私丈食ふには不自由は御座いませぬ』

と眞面目くさつて話してゐる。喜樂は、

喜樂 『何と妙な狐サンぢやなア。それ丈何もかもよく分るのなら、私の事も一つ伺つて貰へまいかなア』

ときりだすと、お民サンは言下に、

お民 『あんたは今園部の人が澤山寄つて、公園の中で教會を建て、あんたを先生になつて貰はうと云うて騒いでゐる。そして先生もならうかなアと思つて御座るやうだが、あんたの納まる所は之から七里ほど西北に、チヤンときまつて居ます。モ一月程したら迎へに来る人があります。あんたの嫁サンもチヤンときまつてま

すで、お澄サンといふ名ですワ」

と事もなげに言ふ。喜樂は昨年さくねんの秋あき、綾部あやべへ行つた時とき、教祖けうそにお龍サンりようといふ娘むすめのあることは聞いてゐたが、お澄すみと云ふ娘むすめのある事は知らなかつた。そこで大方おほかた四方しかたすみ子の事ことではあるまいかとも思おもうてみた。併しかし綾部あやべへは殆どほとん十里じふりある。七里しちと云ふのは可笑おかしい。大方おほかた和知わちの方面ほうめんに自分じぶんの行く所ところがきまつて居ゐるのかなアとも考かんがへても見たみ。それからお民たみに別わかれて黒田くろだの會合所くわいがふしよへ歸かへつてみると、綾部あやべより四方しかた平藏へいざうとして封書ふうしよが來きてゐる。開ひらいて見みれば、

「田たの植付うゑつけが濟すみ次第しだい、出口でぐち教祖けうそさまの御命令ごめいれいで、御相談ごさうだんに參まゐりますから、どうぞ何處どこへも行ゆかず待まつてゐて下ください……」

といふ意味いみが認しためてあつた。……又また綾部あやべの連中れんちゆうから呼よびに來くるのかなア、モウ去年ねんの様やうな事ことなら行ゆかぬがまだ……と、氣きにもとめず、又またお民たみの神占しんせんをも半信半疑はんしんはんぎで、手紙てがみの事ことなどもスツカリ忘わすれてゐた。

所ところへ園部川そのべがはで漁りようの爲ため瓶付びんづけをしてゐたら、四方しかた氏が訪たづねて來きたので、いよいよ綾部あやべへ行く事こととなり、今度こんどは落付おちついて教祖けうそと共に金明會きんめいくわいを開ひらき、御用ごようをする事こととな

つた。

(大正一一・一〇・一二 舊八・二二 松村眞澄録)

第二四章 神助(一〇三六)

金光教會の八木の支部長をして居る土田雄弘と云ふ人は、金光教の足立正信氏が金明會へ降服したと聞き、周章狼狽して上級教會所なる杉田政次郎氏と協議した上、金光教の大の熱心者なる八木の福島寅之助氏を従へ綾部へ驅付け、直に足立正信氏と面會し、

金光教の本部から應援を乞ひ自分も極力應援の勞をとる考へだから、金明會の下らぬ所を脱會し、何程辛くても暫らくだから孤軍奮闘をつづけられよ。譯の分らぬ靈學等に降服するのは、金光教師の本領ではない。折角今迄金光教で苦勞をし乍ら、脆くも敵に甲を脱ぐとは不甲斐ない」

と熱涙を流して足立氏を激勵した。乍併足立氏は已に金光教會の部下に對する酷薄無情なるに呆れ果て、出口教祖や喜樂の温情に漸く感激して居たる際なれば、熱心なる友人の忠告も只一言の下に撥ねつけ、且大本の教義の深遠靈妙なる事を口を極めて説き、遂に土田雄弘氏も金明會の布教師になつて了つた。

そこで喜樂は足立、土田、福島氏等と神殿の次の間で神様の話や幽齋の方法などを説明して居ると十數年間胃腸病に悩んで居た人が、大原から駕で二三の親類に連れられ病氣平癒の祈願に來たので、喜樂は一寸神様に御祈願をなし、

喜樂「悪神立去れ！」

と只一言言靈を發射すれば、不思議にも多年の病は其場にて恢復し、喜び勇んで歸途は自ら歩行し、鼻唄等を唄つて歸る様になつた。又臺頭と云ふ處から、片山卯之助と云ふ十五歳の男が足の立たぬ病となり、之も亦駕に乗つて來たが、足立、土田、福島氏の前で直に足が立つて了つた。

此現場を目撃した三人は非常に靈術の效顯に驚嘆して居た。忽ち福島寅之助は發動を始め、

「ウンウン」

と呻り出し、次で土田雄弘も靈感者となり、天眼通の一端を修得するに到つたのである。足立正信氏は今迄幽冥界の實状を知らなかつた金光教の布教師なりしを以て、神懸り状態を見るのは生れてから始めてなりし爲め、非常に奇妙の思ひをし、之は屹度妖神の所業か、又は喜樂は魔法使ではないかと、そろそろと疑ひかけたが、現に友人の土田が靈感の神助を得てから、

「今迄の金光教會などはとるに足らぬものである。人間が寄つて集つて拵へた編輯教だから誠の神の教ぢやない」

と唱へ出し、今度は反對に足立氏を説服し、

「大本の教理は誠の神の御心に出でたるものなり」

と強く主張した。されど足立氏は依然として正邪眞偽の審判に苦しんで居た様に見えて居た。

教祖様や役員等の懇望によつて、喜樂は茲に幽齋の修行者を養成する事となり、本町の中村竹造氏の宅にて、數日間布教の傍幽齋の修行を執行し、求道者もおひ

おひ増加し、本町の中村氏宅も狭くなり、本宮の東四つ辻、元金光教の廣前に修行場を移した。福島寅之助の神憑りは随分亂暴なもので、邪神界の先導者とも云ふべき靈であつて、大變に審神者や役員を手古摺らした。東隣には其時分には綾部の警察署があり、日々撃劍の稽古で幽齋の邪魔になり、且又澤山の參拜者のために思ふやうに修行が出来ず、そこで神界へ伺つた上、猿田彦神の御神勅で山村の鷹栖へ修行場を移轉する事となつた。其時の歌に、

おほみいづたかちほやま
大稜威高千穂山の鷹栖へ

みちびかみ
導く神は猿田彦神

直に鷹栖の四方平藏氏の宅へ修行場を移し、二三日の後再び同地の信者四方祐助氏方へ移轉した。

修行者は何れも役員信者の弟子のみにて、福島寅之助、四方平藏、四方祐助、四方熊藏、同春藏、同甚之丞、同すみ子、大槻とう、鹽見せい子、中村菊子、田

中つや子、四方久子、野崎篤三郎、西村まき子、西村こまつ、村上房之助、黒田
きよ子、上仲義太郎、四方安藏、四方藤太郎、中村竹造等の二十有餘人の修行者
が集まつて朝から晩までドンドンと幽齋の修行にかかつて居た。二十有餘人が一
時に發動するので床の根太が歪み出し、祐助氏の息子の勇一氏が非常に困つて、
祕かに綾部の警察署へ、

「喜樂や足立が、しやうもない事を教へて困るから追拂つて下さい」
と願ふて出た。戸主の権利を以て謝絶すれば宜いものを、自分の卑怯さから、斯
かる手段を採つたのである。喜樂は小松林の神様によつてこれを前知したので、
即夜上谷の四方伊左衛門氏方へ修行者をつれて移轉し、前方の谷間に不動尊を祀
つた可なり大きな瀑布のあるを幸ひ、上谷を修行場と定めて幽齋に熱中した。さ
うした處案の定、警官が追拂ひに來た。けれども神道の爲め赤誠をこらして修業
にかかつてる熱心者のみなれば、少しも怯まず頓着せずドシドシと修業を續行し
て居た。猿田彦の神は又もや神懸りとなつて、

神懸り雲の上谷輝きて
動かぬ君の御代を照らさむ

と云ふ歌を與へられた。まだまだ其時に與へられた神歌は數百首に上つて居たが、今はハツキリ記憶して居ないのである。

切幽齋修行の結果は極めて良好であつて、數多の修行者の中に二三の變則的不成功者を出しただけで、其他は残らず神人感合の境に到達し、中には筆紙を用ひて世界動亂の豫言をなす者あり、北清事變の神諭を言ふ者あり、日露戰爭の豫言をしたり世界戰爭を豫告したりする神が憑つて來た。天眼通、天耳通、宿命通、感通等の神術に上達する者も出來て來た。大に神道の尊嚴無比を自覺した信者も尠からずあつた。中に最も不可思議なるは西村まき子と云ふ十八才の女、俗にいふ白癡であつたが彼は神懸りとなるや平素の言動は一變し、かの神世に於ける大氣津姫の如く、自分の耳から粟を幾粒となく出し、鼻よりは小豆を出し、秀處よりは麥種杯を出したる奇蹟があつた。これを見ても我國の神典が非凡の眞理を傳へ

たるものなる事を悟り得らるのである。

幽齋の修行もおひおひ發達したので、留守中を四方藤太郎に預けおき、四方平藏氏と共に静岡縣富士見村の長澤雄楯先生の奉仕して居られる月見里神社へ參拜する事となつた。道すがら大神の御神徳の廣大無邊なるを説きつつ、須知山峠を越え、大原、枯木峠を踏み越え十津川の山村にさしかかつた時、四方氏は俄に發動氣味となり、身體震動甚しく、止むを得ず枯木峠の頂上へ休息して、喜樂は立つたまま四方に鎮魂を施して見た。四方には松岡神使が臨時憑依し、天眼通が層一層明かになつて來た。

喜樂は前に述べた通り長澤雄楯翁の靈學の門人となつて居たので、一度報告旁細女命を祀つた月見里神社へ參拜したのである。漸くにして無事に富士見村の下清水、長澤先生の館に到着した。さうして四方平藏氏は、神懸りと俗間に行はれて居る稻荷下げとは其品位に於て又方法に於て雲泥の差のある事を一々例證を擧げて説明せられ、漸く靈學の趣旨を悟る様になり二晝夜滞在の上、惜き別れを告げ歸綾の途についた。

下清水より江尻迄二十丁ばかりの道を歩いて、午前一時の急行列車へ乗り込もうとする時、僅二分の短き停車、殊に列車はボギー式で、田舎の汽車の様に入口が澤山にない處へ、四方氏は生憎目が悪い、夜分は殆ど燈があつても見えぬ位だ。それに澤山の荷物を肩にひっかけて居る。喜樂も手一杯の荷物を下げて手早く乗車し、四方氏は如何かと昇降臺を見れば、今片手をかけたばかりに汽車は動き出して居る。驛員は力一杯の聲を出して「危ない危ない」と連呼して居る。

四方氏は其間に七八間も引きずられて居た。喜樂は金剛力を出して荷物諸共昇降臺迄ひきあげた。此時の事を思ふと今でもゾツとする様だ。全く神の加護によつて危き怪我を救はれたのだと心の裡にて感謝し乍ら、翌日の午後一時頃京都驛に安着し、二人は東本願寺前のある飲食店に這入つて晝飯をすませ、それより七條通りを西行して西七條に至り、此處から乗合馬車の龜岡行の切符を買ひ發車の時刻を待つてゐた。四方氏は本願寺前の茶店で買ふて食つた蝸の中毒で俄に苦しみ出し、嘔いたり、下痢たり、十數回に及んだ。顔色は眞蒼となり、其場に倒れて殆ど死人の様になつてゐる。馬車屋の主人は驚いて、

「お客サン、あんたは虎列刺病です。サア一刻も早く此場を退却して下され。警察へ知れたら何も彼も焼かれて了ひ、營業が出来なくなつて了ひます。そんな事にでもなれば家は大騒動だ。サア早く歸つて下さい」

と一旦受取つた金を返し切符を取上げて了つた。喜樂は教祖より授かつて来たお肌守を懐中より取り出し、四方氏の肩にかけてやり、又教祖様から頂いたおひねり二體を口に含ませ鎮魂を施した。御神徳は忽ち現はれ、四方氏は初めて言語も明白になり、元氣も稍恢復して来た。喜樂は四方氏の手をひき門へ出で、折柄空車をひいて来た二人の車夫を認め、天の與へと直に之に乗り、何喰はぬ顔にて一里半ばかり走らせ、桂の大橋にさしかかると、四方氏は全く舊の如くに元氣づき、車の上から潔い聲で四方山の話しをしたり、歌などを唄ひ出した。それから大枝坂、王子、篠村と疾走しつつ篠村八幡堂の少し手前迄歸つて来ると、四方氏の乗つた腕車は忽ち鐵の輪がガラリと外れ、グナグナと碎けて了ひ、四方氏は街路に眞逆様に放り出されて了つたが、幸ひに擦傷一つせず無事であつた。

四方氏は餘程運の強い人と見え、一日の間に三度まで汽車、馬車、人力車の危

難に救はれるといふ事は、實に不思議である。これも神様の御神徳と考へるより外に判断はつかぬ。人間には一生の中には必ず一度や二度は幸運が向ふて来る。それと同様に又一度や二度は大難が来るものである。四方氏の信仰の力と大神様のお蔭で、斯る危ない所を九分九厘で助けられたのは、全く神様に一心に仕へて居たお蔭である。

(大正一一・一〇・一二 舊八・二二 北村隆光録)

第二十五章 妖魅來(一〇三七)

篠村から徒歩となつて、歸途を幸ひ八木の福島寅之助方へ立寄つて見た。所が主人の寅之助氏は綾部へ修業に行つた不在中で、妻君の久子サンと子供が居つたので、四方氏から綾部の様子や福島氏の神憑りの次第まで逐一話して聞かした。されど久子は金光教の信者である所から、靈學の話などは半信半疑で、何を云ふ

ても鼻の先であしらひ、腑におちぬやうな按配で面白くない。二人はソコソコにして、此家を立出で八木の大橋を渡つて、刑部といふ所に土田雄弘氏の寓居を訪ね、神の道の御話など互に語らふ所へ、京都から一本の急電が届いた。土田氏は何事ならむと早速開いて見れば、京都に居る従弟の南部孫三郎といふ人が、病氣危篤であるからすぐ来てくれといふ電信であつた。土田氏は餘り豊かな生活でないから京都へ行く旅費もない。大に困つて喜樂に向ひ言ふよう、土田「只今の電報は私の従弟の南部といふ者が、今まで金光教會の布教師をつとめて居ましたが、身の修まらぬ人物で、今迄京都から尾州、遠州、駿州あたり迄十三ヶ所も金光教會所を開いては、婦女に關係をつけては失敗し、又土地をかへては教會を開き、同じく婦人に關係しては追出され、遂には金光教會の杉田政次郎氏から破門されて、今の所では妹の家に厄介になつて居りますが、二三年前より肺結核にかかりブラブラ致して居りました。とうとう神罰が當つたのでせうから、到底全快は覺束なからうと信じて居りますけれど、なる事なら今一度神様の御助けに預りたいものです。先生の御祈念で、ま一度助けてやつて下さる事は出

來ますまいか」

と心配相に頼み込む。喜樂は氣の毒がり、直に神界に伺うて見た。其神占によると、今後一週間目の日が此病人に取つて大峠である、九分九厘までは到底助かるまい……と云つた。そこで土田氏は……

土田「モシ南部の命をお救ひ下さるなれば、私から彼を説いてあなたの弟子と致し、お道の爲に誓つて盡力をさせませう」

と云ふ。喜樂は笑ひ乍ら、

喜樂「又金光教會の布教師時代の行方をくり返されますと困りますなア。併しここ三年の間、神様に願つて命を伸ばして貰ふやうに致します。神様は三年間の行状を見届けた上で、又々壽命をのばして下さりませう。此事を手紙に書いて南部サンへ知らしておやりなさい。さうすれば京都へ旅費を使うて行く必要はありません」

土田氏は喜んでこまごまと手紙を書き京都行きも見合した。果して南部氏は七日目に一旦息が絶え、暫くして再び息を吹き返し、それから日に日に快方に向つ

た。土田氏は南部全快の砌に京都へ行つて會見した際、

土田「貴兄の今度の大病が全快したのは、全く綾部に現はれた良の金神さまの御神徳と、上田といふ人の熱誠なる御祈念の賜物である」

と云つて喜樂に約束したと及綾部に於ける神懸修行の實驗談などを詳細に話して聞かせた。されど南部は、

南部「必しも綾部の良の金神様の御神徳ではない。平素信ずる天地金の神さまと、

金光教祖の御守護にて、吾大病を綾部の神や上田といふ男を役使してお助け下さつたのである。故に此御恩の九分九厘はヤツパリ金光さまにある」

と云つて、直に京都の島原の金光教會へ御禮參りをなし、綾部の方へは手も口くにあはさなんだのである。

それから後は「今まで金光教の布教師を拜命し乍らいろいろの醜行を敢てし、神様の御怒りにふれて一命すでに危ふき所を、お慈悲深き天地金の神や金光教祖の御威徳でおかげを被つた」とて、朝晩、母親や妹や自分が代る代る島原の教會所へ參拜して居つた。そした所が、一二ヶ月たつと今度は又腹が烈しくいたみ出

し、日を追うて重體に陥り、日參所か室内の運動も出来なくなつて了つた。それから母や妹が一生懸命に金光教會へお百度をふんでみたが少しも靈驗が現はれぬ。大學病院へかつぎこんで診察して貰うと、非常に重い盲腸炎だから、切開手術を施さねばならぬが、病人の體の衰弱が甚しいから、生命は受合へぬとの醫者の言であつた。そこで已むを得ず施術して貰ふのを見合せ、吾家へつれ歸り、成行に任せて、死期の至るを待つ外手段がなかつたのである。

益々重態に陥り、如何ともすることも出来なくなり命旦夕に迫つた。又もや從弟なる土田氏へ……病氣危篤すぐ來れ……の電報をうつた。土田氏は例の刑部の寓居にありて、之を披見し「綾部に向つて手を合せ」の返電を打つておいて上京せなかつた。京都の南部氏の母と妹とは其電報を見て、叶はぬ時の神頼み、命さへ助けて下さらば何神様でもよい……と綾部の方に向つて「良の金神様、今迄の取違と御無禮の段を御赦し下さいませ。孫三郎の一命を今一度お助け下さらば、彼の體も精神も差上げまして、良の金神さまの御用をさして頂きます」と一心不亂に祈願をこめた。ふしぎや忽ち感應あつて、南部氏の病床に一寸許り

もあらうと思ふ大きな蛇が、寒中にも抱はずブンと音を立ててどこからともなく飛來り、病人の頭の上を三回舞ひ了るや、南部氏の腹部は岩でも碎けるやうな音がして、二三升許りも汚いものが肛門から排出すると共に、それより腹部の激痛も止まり、日を追うて快方に向つた。此れが南部氏が金光教を斷念して綾部の大本へ入信した動機であつた。

それから二人は綾部へ歸つて見ると、上谷の修行場に邪神が襲來して、福島寅之助、村上房之助、野崎篤三郎其外一二名の神主は大亂脈となり、あらぬ事許り口走つて騒ぎまはつて居た。村上は近郷近在を晝夜の區別なくかけまはり、いろいろの事をふれまはつて、大本の名を悪くせむと一生懸命に妖魅がついて狂ひまはつて居る。福島寅之助は上谷の村中に響きわたるやうな大音聲で、福島丑の年に生れた寅之助は、福島只一人であるぞよ。それぢやによつて此方が誠の良の大神神であるぞよ。上田は未の年の生れ、出口直は申の年生れであるぞよ。漸く二人合はして坤の金神ぢやぞよ。二つ一つぢやぞよ。とても此福島寅之助には叶はぬぞよ。サア皆の者共、これから今までの取違をスツパリ改心致し

て、此方にお詫致せば今までの罪を許してやるぞよ。出口と上田は裏鬼門の金神
ぢや、誠の丑寅の金神は出口直ではなかりたぞよ。これが分らぬ奴はきびしきい
ましめ致して、谷底へ放るぞよ。これからは福島寅之助を神が使うて、三千世界
の立替立直しを致して、神も佛事も人民も餓鬼蟲けらに至る迄勇んでくらすぞ
よ。これが違うたら神は此世にをらぬぞよ。大の字逆様になりて居るぞよ。今に
天地がでんぐり覆るぞよ。用意をなされよ。今に足許から鳥が立つぞよ。良の金
神は今まで悪神崇り神とけなされたが誠に結構な神でありたぞよ。神が表に現は
れて善と悪とを立分けて世界の人民を改心さして松の神世にいたすぞよ。神は決
してウソは申さぬぞよ。疑へば神の氣障りになるぞよ。之から上田が歸つても相
手になる事はならぬぞよ。誠の良金神が氣をつけるぞよ」
などと赤裸となり妖魔がうつつて、教祖の筆先の眞似計りを、のべつ幕なしに嘸
鳴りちらして始末に了へない。喜樂は直に神界に祈願をこめ鎮魂を修した。其爲
一旦邪神の暴動が鎮定したが、又外の神懸にも澤山の妖魔の同類がうつつて福島
の神に加勢をする。遂には神懸一同が口を揃へて、

□ 皆みなの者ものよ。シツカリ致いたさぬと、上田うへだの曲津まがつにごまかされて、ヒドイ目めにあはされるぞよ。誠まことの良うしろの金神こんじんは福島ふくしま大先生だいせんせいに違ちがひはないぞよ□

と叫さけぶのを聞きいた福島ふくしまは、再ふたび邪神じやしんにおそはれて、黒くろい濃こい眉毛まゆげを上げたり下げたり、目めを剥むいたり、腕うでをふり上げたり、飛とんだりはねたり、尻しりをまくつてはねまはつたり、疊たたみは穴あながあき床ゆかはおつる、ドンドンドンと響ひびきわれるやうな音おとをさして、非ひ常じやうに大騒おほさわぎを再演さいえんし出したので、田舎人いなかびとが珍めづしがつて、四方しほう八方はつぱうから毎まい日に々じふ々いうよ辨當持べんたうもちで見物けんぶつに來くる。喜樂きらくは一いつ生しやう懸命けんめいに鎮壓ちんあつに力ちからを盡つくしても、二十有餘人にじふいうよにんの神憑かむがかりの大部分だいぶぶんに、不在ふざいの間に妖魅えうみが憑つつたのであるから、中々なかなか容易よういにしづまらない、こちらを押おさへばあちらが上あがる、丁度城ちやうどしろの馬場ばんばで合羽屋かつばやが合羽かつばを干ほしてゐた所ところへ俄にはかに天狗風てんぐかせが吹ふき合羽かつばが舞まひ上あり、一度いちどに押おさへることが出來できなくなつて、爺おやじがあわてて堀ほりへはまつたやうな具合ぐあひになつて來きた。そして日ひ一日いちにちと狂態きやうたいが烈はげしくなつて來くる。つひには修しゆ行者ぎやうしやの親兄弟おやぎやうだいが怒おこつて來きて、

□ 吾家わがやの大事だいじな倅せがれを氣違きちがひにしたから承知しやうちせない、吾妹わがもつとを狐きつねつきにしよつた……おれの子こを巫子みこに仕立したてよとしよつた……狸たぬきをつけたのだろ、其筋そのすぢに告こ訴そしてやる□

などと一齊にせめかくる。四方藤太郎は其中でも稍常識を持つてゐたから、陰に陽に氣を配り、忠實に審神者の手傳ひをしてくれたので、喜樂も非常に力を得、千難萬苦を排して一齊の反抗も妨害も頓着なく、あく迄審神者の職權をふりまはして漸く邪神を歸順せしむることを得た。

一方では金光教師たりし足立正信氏等は心機一轉して、金明會を破滅せしむるは此好機を措いて他にある可らずとなし、數多の信徒をひそかに、以前の田中新之助といふ信者の内に集めて、鎮魂歸神の靈術の不成績なることを強調し、且つ喜樂を放逐すべく密議をこらしてゐた。折角固まりかけてゐた金明會の信徒は五里霧中に彷徨し、去就に迷ひ、四分五裂の状態になつて來た。えたり賢しと、中村竹造、四方春三の野心家等が、諸方へかけまはつて喜樂の神懸は有害にして無益だとか、狐使だとか、魔法師だとか力限り根限り下らぬことをふれ歩く。遂には教祖のことまで惡口するやうになつて來た。其時の有様は全く萬妖悉く起るてふ古事記の天の岩戸がくれ式であつた。

幸にして四方平藏、同藤太郎等の熱心と誠實なる調停で、一時は喜樂に對する

猛烈な反抗も稍小康を得ることとなつた。そしてイの一番に叛旗をかかげたのは福島寅之助氏であつた。元來福島は正直の評判をとつてゐる、人間としては申分のない心掛のよい人である。妖魅といふ奴は中々食へぬ奴で、世界から：彼は悪人ぢや、不正直だと見なされてゐるやうな人間にはメツタに憑るものでない。たとへ憑つて見た所で其人物に信用がなければ、世人が信用せないことを知つてゐるからである。そこで悪魔は必ず善良なる人間を選んで憑りたがるものであるから、神懸の修行する者は餘程膽力のある智慧の働く人でないと、とんだ失敗を招くものである。良き實を結ぶ木には害蟲がわき易いものである。菊一本にても、大きい美しい花の咲くものには蟲が却てよけいにわくやうなもので、正直だから善人だから、悪神がつく筈がないと思ふのは、大變な考へ違である。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一〇・一二 舊八・二二 松村眞澄録)

(昭和一〇・六・一〇 王仁校正)

靈たまの礎いしず（九）

現實世界を後にして
地上の世界と同様に
而して諸の天人は
愛の善徳具へたる
而して東方は明瞭に
おぼろに之を感じず也
具へて住むは南北位
證覺光を具へたる
又北方はおぼろげに
天人のみぞ之に住む
在る天人と天國に

天上世界に往き見れば
東西南北の方位あり
各住所に異同あり
天人住めるは東西位
之をば感じ西方は
愛の徳より證覺を
而して南方は明瞭に
天人許りに之に住み
證覺光を具へたる
主神のいます靈國に
在る天人と皆共に

これの順序を守れども

主の靈國は愛の徳

この徳に依り眞光に

従ふものと相異あり

天の御國に於ける愛は

主神に對する愛にして

之より來る眞光は

即ち無上の證覺ぞ

靈國所在の眞愛は

公共に對する愛にして

之をば仁愛と稱ふなり

仁愛の眞の光明は

神に基く智慧ぞかし

これの智慧をば信と云ふ

主神の統轄爲し給ふ

高天原の天界は

全く二つに分れあり

主神の坐します天界を

稱して靈の國と謂ひ

天人達の住居せる

世界は即ち天國ぞ

靈の御國と天國を

構成したる諸々の 天の世界の方向は
 決して同じきものならず そも天國の天人は
 主神を太陽と打仰ぎ 靈の御國に住むものは
 主神を月と打仰ぐ 而して主神の顯現し
 たまふ處は東なり 眞神即ち主の神は
 天國にては太陽と 顯はれ給ひ靈國に
 在りては月と顯れたまふ 斯くも二種の御姿に
 顯はれ玉ふは何故ぞ 愛と信とを攝受する
 都合の異なる爲ぞかし 愛の善徳は火に應じ
 信は光明に相應ず 是靈國と天國の
 二つに分るる所以なり

高天原の天界に

住む天人の眼より

見る太陽は天界の

太陽に比して最暗し

又太陰も同様に

天界の月に比ぶれば

最も暗く見ゆるなり

其理如何と云ふならば

地上に於ける太陽の

火熱は自愛に相應し

その光明は自愛より

招ける虚偽に相應す

そもそも自愛は主の神の

愛と全く相反し

自愛よりするその虚偽は

主神の有する神眞と

正反対となればなり

かくして主神の具へたる

神愛神眞そのものに

逆らふものは天人の

眼に暗く映るなり

高天原の天國に

ある天人は主の神を

太陽の如く打仰ぎ

靈國在住の天人は

月の如くに仰ぐなり

地獄ぢごくの世界せかいに在あるものは 自己じこと世界せかいをのみ愛あいし
 神かみに逆さからふその爲ために 暗黒あんこく溟濛めいもうの裡うちに居をり
 全まく神かみに相背あひそむき 主神すしんを後方しりへに捨すてておく
 これ等らを鬼靈きれい精靈せいれいと 稱となへて地獄ぢごくの鬼おにとなす
 ア、惟かむながらかむながら神々々々 神かみの世界せかいの奇くしびなる。

大正十一年十二月

〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃
〃

靈界物語 第三七卷 舍身活躍 子の巻

終り